1011	第三章 平和会议! 說題及時期、各国ノ準備 五三
名龍・北京・フ古ノ伯・龍・フ	which should be equally applicable to maritime war, should be introduced personate complement to be
ネゲァー 紅叢 = 安丘セレ女に更ト忍ムレティーター国政府へ其時期ノ「パン、アメリカン、コングレス」及「ゼ	to be elaborated provisions concerning war on land
海牙平和会議ヲ来ル七月ニ開カントノ露国ノ通牒ニ対シ当	g
	be subjecte
大豆」	or neurals on of contraband rigi
四月、、、、、二〇 東京着四月、、、、、、 華府発	of hostilities, rig
	rded to merchant ships in order to leave neutra
第二回萬国平和会議開催期日ニ週四国王の第	of merchant ships into men-of-war, private property of belligerents on the sea, delay of favor to be ac-
五三 明治学光年四月七日 所國持卜為、三百 〈富良〉	a naval force, laying of torpedoes, etc., transformation
	war, concerning special operations of maritime war such as bombardment of ports, towns and village by
Motono.	vention relating to laws and customs of maritime
nor in general questions which would not directly enter into programme adopted by cabinets	question of its renewal, personally elaboration of con-
the powers nor state of things established by treaties	opening of hostilities, rights of neutrals on land $etc(?)$, declaration of 1899 one among them being the late (?)
be well understood that deliberations of the projected meeting should touch neither political relations between	and customs of war on land, concerning among others
tion of 1825. As at the conference of 1899, it should	the provisions of convention of 1899, relating to laws
	personality complement to be brought up
brought upon convention of 1899 for the adaptation	court of arbitration and international commissions of
iternational conflicts, with re	露国提議ノ議題要点電報方ノ件
No. 18. In reference to your telegram 18, amelioration to be brought upon convention relating to peaceful	五一 明治至去年20月六日 露国駐劄本野公使宛(電報)
Tokyo.	
Saionji,	
, 11 , 8-55	
Petersburg, April 10 1906 4-2 p.m.	シテ送附シ来リタリ又同会議ハ本年七月十五日以後ニ開キ
露国政府提議ノ第二回平和会議議題要旨報告ノ件	公文ノ写ヲ昨夜外務大臣ヨリ本官ノ
五二 明治学式年四月十日 西園寺外務大臣宛(電報)	第二平和会議ノ議題ニ関シ露国ヨリ在外露国使臣ヲ経テ各第一五号
	西園寺外務大臣 本 野 公 使
平和会議議題ノ要点ヲ電報セラルヘシ	四月八日 前七、 本省着四月七日 後一、三 露都発
- -	政府回文写受領ノ件貧ニ国真国当系会議、議長2世其、国ニノ富国
在露 本野公使 西國寺大臣	ノ義題及寺明=周=
四月九日 後二、二〇発	五〇 明治三元年四月七日 西國寺小笏大五紀(電報)
〈時期、各国ノ準備	第三章 平和会議ノ議題及時期、

第三章 平和会談ノ議題及時期、各国ノ準備

五 0

五 一

五二

101

第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 五三

10 三

Saionji, 四月十三日 able that the respective Governments should instruct Emperor of Russia, it is thought practical and desirsimply refuse, on that account, the invitation of the effect, whilst many Powers would not be inclined to had already answered to Russian Government to that tion of the programme and indeed U.S. Government to you. has been instructed by telegraph to communicate them posal, as I am assured that Russian Minister to Japan have already received full particulars of Russian pro-No. 12. their representatives at the Hague, assisted by one or 候而 議シタルハ千八百九十九年ノ国際的大集会ノ事業ノ基礎ト 露政府ヨリ回答アリ国務長官ハ多分十月初旬ニ開会セラル 平和会議開会ノ期日ハ当国政府ノ意見ニ依リ延期シタル旨 第三八号 two technical delegates, to meet here at the date of ル 議ノ事業ニ参加スヘキ国ノ数ハ出来得ル限リ之ヲ増加セサ ル ナリタル人道ノ諸原則ヲシテ新タニ一段ノ発展ヲ為サシム 以書翰致啓上候陳者帝国政府カ第二回平和会議ノ招集ヲ発 第二四三号 ペシト云ヘリ Regarding second Peace Conference, I believe you 五六 五四 ヘカラサルコトハ帝国政府ノ同時ニ信シタル次第ニ有之 ノ必要ヲ感シタルニ依ル次第ニ有之候尙右計劃ニ係ル会 西國寺外務大臣 シテ人類全体ノ福祉ヲ目的トスル諸思想ノ応用ニ対ス Tokio. 第二回萬国平和会議開催ニ関スル在蘭各国代表 第二回萬国平和会議議案通知 ノ意見報告ノ件 明治三九年 五月 九 日 As the time is too short for proper considera-明治三式年四月十一日 第三章 後三、三〇 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 Rec'd, Hague, 東華 京府 着発 April April 12, 1906, 西園寺外務大臣宛(電報)蘭国駐劄三橋公使ヨリ 西園寺外務大臣宛露国公使ヨリ ン件 11, 1906, E 置代理公使 3:7 6:45 p.m. p.m. 五六 ment, year. 之候 般福祉ノ為メニ全世界ノ尊敬ヲ博スル法学者ノ集会タルニ 要ノ創設物タル国際仲裁々判所ハ業ニヒニ其良績ヲ示シー 第一回会議ハ同会議ノ事業カ各国ニ於ケル規則正シキ人 delegates to 塾スヘキコトト被考候尙国際審査委員ノ執務方法ニ関シテ ル キ国語ニ付一定ノ主義ヲ定ムルコトハ今後仲裁々判ヲ求ム ヲ計ラサルヘカラサル次第ニ有之殊ニ訴訟手続上使用スヘ 等ノ点ニ関シ規定ヲ設ケ以テ該條約ノ為メニ必要ナル発達 ノ有之最近数個ノ仲裁×判ノ後裁判所ニ集合シタル法学者 乍去国際紛争平和的処理條約中ニモ種々改正ヲ要スヘキ ルニ付如何ニ有益ナルヤモ均シク吾人ノ知リ得タル所ニ有 立到申候又国際審査委員ナルモノカ国家間ノ争議ヲ解決ス ヘキコトヲ確信シ以テ閉会ヲ告ケ候処該会議ニ於ケル最重 ノ進歩ト漸次ニ積マルヘキ経験トニ依リテ後日完成セラル 回答振ニ徴シテ之ヲ知リ得ルコトニ有之候 モ多少改良ヲ要スルモノ可有之ト被存候 ニ於テ細目ニ関スル問題数種ヲ提起シタルコト有之候処此 五五五 邦国ノ漸次増加スルニ従ヒ発生スヘキ困難ニ鑑ミ最モ希

could be agreed to among the Powers concerned. have no objection to the suggested procedure, if it though he thought Dutch Government would certainly nature consideration to the programme and send full next year, so that respective Governments could give the conference and then adjourn it till, invitation to discuss and elaborate full programme for ference in compliance with request of Russian Governnecesary accommodation at the disposal of the Conas Dutch Government simply placed the Hague and concerning his attitude. colleagues. I asked Dutch Minister for Foreign Affairs he dit not feel inclined to express his opinion, Above is personal opinion of a number of my conclude discussion of the same He answered that inasmuch say, May next

第三章

平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備

五四

五五

一 〇 四

Above in submitted for your consideration.

Mitsuhashi.

第二回萬国平和会議開催期日延期報告ノ件

明治三九年四月十三日

西園寺外務大臣宛(電報)使ヨリ

世上ニ行ハルヽカハ該会議ノ招集ニ対スル諸国ノ熱心ナル ル連帯責務ノ念カ現今如何ニ深ク人心ヲ支配シ如何ニ広

Ţ

文

10五

Ŧ

第三章 平 -和会議 ノ議題及時期、 各国 「ノ準備 五七

> 帝国政府ニ於テハ次ノ会議ハ千八百九十九年ノ條規ヲ完成 N 為 メ Ξ 招 集セ ラル可 キ ÷E ノ ト想像致候果シ テ右 ノ 次第

ヲ迎フル 存 去他ノ一方ニ於テ目下ノ場合単純且ツ無條件ニテ新加入国 国ノ数ヲ増加スルコト 有之候処夫ノ一般平和ノ為メニ有益ナル協商 諸国中ニモ八百九 目下ノ計劃ニ係ル会議ノ事業ニ参加スル様招請 ル高尚ナル目的ニ適合スルモノニ外ナラサル義ニ有之候乍 2スルコトヲ勘考セサルヘカラサル次第ニ有之候 コトニ対シ単ニ形式上ノコトニ候得共一ノ 十九年ノ第一回会議 ハ此種ノ人道的大会議 三参加 同二加ハル カ達セント セ ーサリシ セ ラレ 、困難 へキ Ŧ IJ 1 ス 1 N

本使ハ右ノ趣本国政府ノ命ニ依リ閣下へ御通知申上且右計 ニ係ル会議ノ義ハ海牙府ニ於テ来ル七月(新暦)下半ヲ セラレ得へク右ノ時期ハ和蘭国政府ニ於テ ル所ナル旨ヲ附言致候 · モ 最 モ

務 議二 府 ニ近接セントノ希望ヲ表彰スルモノナルコトハ日本帝国政明世界全般ノ断ヘス目的トスル国際的正義ナル高尙ノ理想 関スル希望ヲ参酌致候而シテ右提出ノ諸件ノ全体ニ於テ文 和会議=於テ丧彰 セラレ タル 諸希望就中中立者 ノ 権利義帝国政府ハ前記議案ヲ編成スルニ方リ出来得ル丈第一回平 ニ於テ御洞察アランコトヲ欣然希望致候 海上 ニ於ケル交戦者ノ私有財産及港湾都市等ノ砲撃ニ ハ前記議案ヲ編成スルニ方リ出来得ル文第一回

於 テ自由ニ之ヲ決スヘキ儀ニ有之候

第二四四号 ノ 伴

平和会議々案ノ件ニ関スル本日付拙簡ノ追加 ナル御注意ヲ仰クヘキ旨本国政府ノ訓令ニ接シ候間第二回 書翰致啓上候陳者本使ハ左ノ件ニ付日本帝国政府ノ懇篤 ŀ -シテ茲ニ 申

進候

差押 ハ敵 ニ付海戦ノ法規慣例ニ関スル條約ヲ議定スル件 扚 於ケル中立者ノ権利義務就中戦時禁制品ノ問題及中立港 I ŀ 「「於テ交戦国艦船ノ遵守スへキ制度及ヒ捕獲物ト へ タ 港ヲ退去スル為メ商船ニ与フヘキ恩恵期間 海上ニ於 ル中立国商船ヲ不可抗力ノ為メニ破壊ス ヘケル 交戦者ノ私有財 産、 開戦後· 以中立港又 ٦ ルコ 海上ニ シテ

ŀ

用セラレ得へキモノヲ採用スヘキコト 右議定セラルヘキ條約ニハ陸戦ニ関スル條規中海戦ニ 応

存候

件ハ次回会議ノ事業中最モ顕著ナルモノノーナル

、ヘシト

被

関シテハ畢竟一個ノ條約ヲ議定スルコトヲ必要トスヘク此

ヲ調和セシムヘキ一定ノ規則ヲ制定スルノ必要有之候之ニ ヲ異ニスルモノ有之候ニ付交戦者ノ権利ト中立者ノ利益ト

験ニ

限ニ関スル

、問題ノ如

キ

、暫ク措テ問ハス単ニ最近数年ノ経済帝国政府ハ目下ノ処陸海軍備ノ制

以上ノ次第ニ有之候得者帝国政府ハ目

主要ナル左記ノ諸件ヲ提議致候

コト可然ト思考致候ニ付目下計劃ニ係ル会議ノ議案ト

シ ム

テ

ル

徴シテ最モ急務トスヘキ諸問題ノ研究ヲナスニ止

第

国際紛争平和的処理條約中仲裁裁判所及国際審查委

員ニ関スル條規改正ノ件

解ヲ防ク

ノ必要有之候海戦ニ関シテハ各国多少其法規慣例

ル條規ヲ増補シテ之ヲ正確ニシ以テ一切ノ誤

陸戦ノ

第三章

平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備

五六

= 於

第三

海軍力ラ以テスル港、

市

町

設

法規慣例ニ関スル規定ニ付テモ第一回平和会議

テ

定メラレタ

第四 千八百六十四年「ゼネヴァ」條約ノ原則ヲ 海 戦 -----応

及セサルヘキノミナラス各国政府ニ依リテ採用セラレタ 議案:直接関係ナキ案件ニー切論及シ得サルヘキハ言フ迄 会議れ各国間政治上ノ関係又ハ條約ニ依ル既定ノ專体ニ論 (千八百九十九年ノ会議ニ於 ケルト 同様ニ)右計劃ニ 用スル千八百九十九年ノ條約ニ対スル増補ノ件 係 N N

モ無キ義ニ有之候 ノ発表スル ルコトアル モ会議ニ付 ~ キ意見ヲ セラレ

定増補ノ件就中開戦、陸上ニ於ケル中立者ノ権利ニ関ス第二 陸戦ノ法規慣例ニ関スル千八百九十九年條約中ノ規

定増補ノ件就中開戦、

モ

1

明言 秋毫モ豫断スルモノニアラサルコトへ帝国政府ニ於テ特 各国ニ於テ前記議案ヲ承認シタリトスル タル案件ノ解決ニ関シ各国 セ ント スル所ニ有之候尙討議ニ 付 スヘキ案件 ノ順序ヲ =

五七

明治三式年云月 九日 西露 園国 青公使 務日 大リ 臣 宛

テ之ヲ既存條約ニ附加スルカノ如キハ全ク右計劃

数件ヲ採テ之ヲ新條約中ニ包含セシム

ルカ将タ追補ト

三係

N

会 シ メ及ヒ決議ニ対

シ如何ナル形式ヲ与フヘキカ即チ決議中

右宣言中

Ĵ

、一へ消

|滅ニ帰

\$

11 N

ラ以テ其更新

1 侔 千八百九十九年ノ諸宣言ニ関スル件

処理條約ニ加盟方法ニ関シ帝国政府ノ意向照第二回萬国平和会議開催ニ関シ国際紛争平和 ニ加盟方法ニ関シ帝国政府ノ意向照会国平和会諱開催ニ関シ国際紛争平和的

ス

バ クメテ

7

本使

い女

ニ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候

敬具

Ŧ

九百六年五月九日

(四月廿六日)東京ミ

於 テ

右ニ対シ可成丈速カニ日本帝国政府

ノ御回答相煩候様致度

適当ト

認

ム

シ開催

割

0 ÷ 商船ヲ軍艦ニ変スル 村ノ砲撃水雷ノ布

等ノ如キ海戦ニ特別ナル戦闘行為、

ō 六

五九 10九	第三章 平利会談ノ議題及時期、各国ノ準備 五八 一
│ 政府ハ豫メ之カ為メ必要ナル経費ヲ準備シ何時開会ヲ見	本使ハ茲ニ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具
会ノ運ニ至ルヘキヤ否ヤモ今日之ヲ明言スル能ハスト雖モ	テ玆ニ申添置候
開催セラルヘキャ否ハ事未定ニ屬シ又タ果シテ本年中ニ開	都合ニ依リテハ該期日モ尙延期シ得ヘキモノナルコトヲ併
国政府ニ提議シタリ尤同会議カ露国政府提議ノ時期ニ於テ	ス可キ趣ナレトモ海牙ヨリ最モ遠隔ナル日本帝国政府ノ御
以テ第二回萬国平和会議ヲ海牙府ニ於テ開催スルノ件ヲ列	当国政府ハ該会議ガ九月下旬ニ開催セラルヽコトニハ同意
国皇帝陛下ノ政府ハ嬴国政府ト協議ノ末本年七月下半月ヲ	本使ハ右ノ趣ヲ本国政府ノ命ニ依リ閣下ヘ御通知ニ及ヒ且
出ノ理由トシテ蘭国外務大臣ノ説明スルトコロニ依レハ露	有之候
追加豫算トンテ本月八日第二議院ニ提出致候而テ該予算提	府全体ニ取リ一層好都合ナル時期迄延引スル様可致覚悟ニ
待並同会議開催ニ要スル経費トシテ蘭貨七萬五千夫ノ高ヲ	ノ諸国ト協議ヲ遂ケタル上ニテ該会議ノ開催ヲ賛同諸国政
追々及具報置候処蘭国政府ハ右会議ニ参列ノ各国代表者接	取リ都合宜シカラサル趣ヲモ承知致候ニ付帝国政府ハ此等
第二回萬国平和会議当府ニ於テ開催ノ件ニ付テハ客歳以来	ルヽモ敢テ異議無之将又右示定ノ期日ニテハ若干ノ国々ニ
公信第二三号 六月二十五日接受	然ルニ其後和蘭国政府ニ於テ該会議カ他ノ期日ニ開催セラ
府ヨリ同国議会へ提出ノ件	テハ勿論該期日ヲ固執スル考ニテハ無カリシ次第ニ有之候
第二回萬国平和会議ニ関スル経費予算ヲ蘭国政	和蘭国政府ノ都合ニ依リ選定シタルマデニテ帝国政府ニ於
	時期ヲ七月ト相定候処右ハ好意ヲ以テ該会議ヲ招引シタル
「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」	以書翰致啓上候陳者帝国政府ハ震ニ第二回平和会議開催ノ
	第二四五号
	第二回萬国平和会議開催期日ニ関スル件
千九百六年五月九日(四月二十六日)東京ニ於テ	五八 明治三元年、四月二六日) 西國寺外務大臣宛
	「三禾冑自政力」によこノージ
	旧星スレコトラ田葛国父守三角与スレトトへコノ
	>諸国ニシテ今回ノ会議ニ招集セラレタルモノカ該條約
	為メ正式ニ委任ヲ受ケ以テ第一回平和会議ニ賛同セサリ
	国ヲ代表シテ第二回平和会議ニ出席セル各代表者ハ之カ
1、2月サラーン 耳	「国際紛争平和的処理ニ関スル千八百九十九年條約ノ記名
年五月九日(四月廿六日)東京	センコトヲ提議致候
ハ 姑ニ重テ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具	ニ賛同シタル諸国ノ各代表者ニ於テ先ツ左記議定書ニ調印
ル発意ニ付日本帝国政府ノ懇篤ナル御回答相	候ニ付帝国政府ハ第二回平和会議ヲ開クニ当リ第一回会議
紛争平和的処理條約二	手続ヲ定ムルニ付一ノ便法ヲ求ムルノ必要アルヘクト被存
政府へ通知スル様勧誘致置候	而シテ右ノ協商ナルモノハ未タ存在セサルニ依リ右加盟ノ
諸国ニ対シ右ノ二条約ニ加盟スルコトヲ今ヨリ	国間ノ協商ニ依リテ之ヲ定ム」トノ規定有之候
二条勺中~~無之~寸帝国政府へ街々~招集矛角タモ们糸食フ~旬~す。見方~りうこ	賛同セサリシ諸国カ本條約ニ加盟シ得ヘキ條件へ他日締盟
国祭汾争平和内処理条約第六十条ノ加キ規定ハ千八百九十(ニ全條約ニ加盟スルモノアル場合ニ関シ「萬国平和会議ニ

定セリレ ハ直ニ該條約ニ加盟シタルモノト看做サルヘキコトヲ協 一 0 八

新クニ第二回平和会議ニ招集セラレタル諸国ニ通知可致 趣ノ通知ヲ受ケタル他ノ諸国政府ニ於テ右ノ方法ヲ採用ス 若シ日本帝国政府並ニ第一回平和会議ニ費同シ且ツ前記旨 ルコトニ同意ヲ表セラルヽニ於テハ帝国政府ハ早速其旨ヲ

候

然ルニ国際紛争平和的処理條約ニハ其第六十條ニ於テ新タ

候

更ニ就キ他ノ諸国ト共同シテ討議ニ参加スヘキモノト被存

ハ右ノ手続ヲ了シタル後ニ於テ始メテ右條規ノ増補又ハ変

牙ノ三條約ニ加盟ノ手続ヲナスコト必要ニシテ此等ノ諸国 ナリトセハ今回新クニ招集セラレタル諸国ニ於テハ先ツ海

第三章

平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 五七

1

第三章 平和会議/議題及時期、各国/準備 六一四九号 林 外 務 大 臣 ノ ノ 中六月九日附 永 林 外 務 大 臣 ノ レ レ シ	保約加盟方法ニ関スル露国政府ノ題案 加盟後国平和会議議題開会期日及国際紛争平 シ又国月ノ交代年六月六日 林外務大臣ヨリ 建シ居	. ス 定 会 ニ 府 留 · ル ノ 有 関 ノ 保	カン 方 針 二 準 拠 シ ノ 外 交 方 新 二 準 拠 シ ノ 一 一 準 拠 シ ノ 一 一 準 拠 シ ノ 一 一 準 拠 シ ノ 一 一 準 拠 シ ノ 一 一 準 拠 シ ノ 一 一 巻 二 準 拠 シ 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一	ノ件 伊国外務大臣ノ萬国軍備制限ニ関スル議会演説 ノ精神ヲ以テ之ニ当リ平和ヲ維持 六〇 明治三元年玉月玉日 伊国駐劄大山公使ヨリ 形式ヲ発見スル事極メテ困難ナル へ・五レーヨ名目一致ノ丁ニ軍備	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	ニ有之候間本豫算ノ如キハ両院共無異議可決可相成ニシテ其実際支出ヲ要スル金額ハ本豫算ニ比シ増減ニシテ其実際支出ヲ要スル金額ハ本豫算ニ比シ増減ニシテ其実際支出ヲ要スル金額ハ本豫算ニ比シ増減ニシテ其実際支出ヲ要スル金額ハ本豫算ニ比シ増減ニシテ其実際支出ヲリのニ後と之ト同一ノ金額ヲ概算シク手八百九十九年第一回萬国平和会議開催ノ節同年度ニ七萬五千夫ノ高ヲ追加スルノ案ヲ提出スル所以ナ
111 リトノ事由ヲ以テ原締約国ノ同意ヲ得ス蘭国政府ニ対シ如ク或ル国カ単ニ露国ヨリ第二回平和会議ニ招請セラレ国際上重大ナル関係ヲ生スル次第ニ有之候ニ付露国提案ナラス仲裁々判所裁判官指定ノ権等ヲモ有スルコト、相	停ニ関シ特別ノ地位ヲ有ス処理條約加盟ノ件ニ関シテノ開設アランコトヲ希望スル次第ニ付帝国政府ニ於テルンスキョスを追え	保スル旨ヲ回答致度会議ノ時期ニ至テハ之ヲ本年九月ニ開保スル旨ヲ回答致度会議ノ時期ニ至テハ之ヲ本年九月ニ開照会有之候ニ付テハ該会議議案ノ義ニ関シテハ前キニ閣議理ニ関スル條約加盟ノ方法ニ関シ別紙原訳文甲乙丙号ノ通ヲ留保スル旨ヲ申入置候処今回本邦駐劄露国公使ヨリ本国ヲ留保スル旨ヲ申入置候処今回本邦駐劄露国公使ヨリ本国	議案ニ関シテハ帝国政府ニ於テ更ニ意見ヲ提出スルノ権利国政府ニ於テ賛同承諾ノ旨ヲ回答シ同時ニ該会議ノ時期及邦駐劄仏国公使ヨリ照会ノ件ニ付テハ嶷ニ閣議決定ノ上帝和蘭国海牙府ニ於テ第二回萬国平和会議開催ノ義ニ関シ本	伊墺ノ関係ヲ述ベ両国間ノ忠実ナル交情ハ無資子之ニ当リ平和ヲ維持スヘキヲ望ミ且ツ信ズ墺各国政治家カ国交艱難ノ危機ニ処シ調和ト交譲スル事極メテ困難ナルベキヲ知ルガ故ニ予ハ現スル事極メテ困難ナルベキヲ知ルガ故ニ予ハ現		同 ルガス 小田 三次 小田 宝家 マネクト 和 会議 来 マ 新 来 マ 新 赤 子 シ 外 務 決 ニ 対 子 ア 外 務 決 ニ 対 オ テ ナ 外 務 政 府 ハ エ オ ン 子 ハ 在 外 承 茂 下 戸 ハ 在 外 公 茶 フ モ ル 上 当 ハ か く 一 温 般

提議ニ同意致難キ旨回答スル様致度右至急閣議ヲ請候也 ナスハ適当ニアラスト相認候間右ノ趣旨ヲ以テ露国政府ノ 一片ノ通知ヲナスニヨリ直チニ該條約ニ加盟シ得ルコトヽ 第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 六二

註 別紙省略

(右決裁)

内閣批第一四号

明治三十九年六月九日機密送第四九号

スル回答ノ件請議ノ通 関スル條約加盟ノ方法ニ関スル在本邦露国公使ノ照会ニ対 第二回萬国平和会議ノ議案及時期並国際紛争平和的処理ニ

明治三十九年六月十八日

内閣総理大臣侯爵 西園寺公望(印)

ホニ 明治三九年六月三日 露国公使宛林外務大臣 ∃ IJ

シ 韓国ヲ第二回萬国平和会議ニ参列セシ 在本邦露国公使へ回答ノ件 メサ 、ル儀ニ 関

Minister at Tokyo, His Excellency Mous. &c., &c., &c. Bokhmeteff, the Russian

六 三 明治三式年六月宝日 露国駐劄本野公使宛(電報)林外務大臣ヨリ

韓国ヲ第二回萬国平和会議ニ参列セシメサル儀 関スル在本邦露国公使へノ回答要旨通知ノ件

Motono

Hague. to take part in the proposed second Conference of the ese Government would accept for Corea an invitation by the Russian Minister to Japan whether the Japan-No. 49. Petersburg. In reply to a verbal inquiry adressed to me I sent him a note verbal June 13th substan-

decline for Corea the invitation in question, believing tially as follows, ference that participation by Å that the states to be invited to participate in the new concerned, an independent status, and it is assumed Conference occupied, so far as foreign relations were Each of the Powers represented at the first Hague In consequence of the international position occupied meeting at the Hague will have the same standing, The Corea, she is unable at this time to claim for her-Imperial Government would feel obliged to would give rise to serious misconceptions. Corea in the work of the Con-

1 1 1

rise to serious misconceptions. by Corea in the work of that Assembly would give Conference of the Hague, believing that participation an invitation the Russian Minister under instructions from his Go-Government would feel obliged to decline for Corea vernment, has the honor to say that the Imperial verbal inquiry addressed to The Minister for Foreign Affairs, replying to the to take part in the proposed second him by His Excellency

at the proposed Conference. standing. in the new Meeting at the Hague will have the same assumed that the States to be invited to participate tions were concerned, an independent status, and it is Conference occupied, so far at least as foreign relaobligations which would be implied by representation for herself any of the rights or to fulfill any of the occupied by Corea, she is unable at this time to claim Each of the Powers represented at the first Hague In consequence of the international position

tions which would be implied by representation at the self any of the rights or to fulfill any of the obligaproposed conference. The above for your information.

Transmit 六公使 Sent June 15th 1906, 10-10 p.m.

Hayashi.

明治卅九年六月廿五日

送第六八号

在本邦 露国公使宛

林

大

臣

第二回萬国平和会議ニ関スル件回答

通知ノ件

第二回萬国平和会議開催期日ニ関シ我方ノ意向

明治三式年六月三宝日 露国公使宛 э У

六四

平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 六三 六四

第三章

111

本年九月ニ於テ該会議ヲ開催致候義ハ目下ノ所到底実行致 難ク被存候付テハ帝国政府ニ於テハ今暫ラク之ヲ延期シ明

月九日付第二四五号貴翰ヲ以テ御申趣ノ趣致敬承候然ルニ 以書翰致啓上候陳者第二回萬国平和会議開催ノ時期ニ付客

第二回平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 六七本使ヨリ之ヲ聖彼得堡へ伝達致候本件ニ関シ本使ハ茲ニ若干ノ増補的説明ヲ閣下ニ提示スルノ光栄ヲ有シ候而シテ前子ノ増補的説明ヲ閣下ニ提示スルノ光栄ヲ有シ候而シテ前之候 第二回平和会議開催ガ明春マテ延期セラレタルコトハ既ニ 常二回平和会議開催ガ明春マテ延期セラレタルコトハ既ニ 常二回平和会議開催ガ明春マテ延期セラレタルコトハ既ニ 第二回平和会議開催ガ明春マテ延期セラレタルコトハ既ニ 第二回平和会議開催ガ明春マテ延期セラレタルオトハ既ニ 第二回平和会議開催ガ明春マテ延期セラレタルオトハ既ニ 第二回平和会議のの本年の本使ノ疑ヲ客レサル所ニ有 之候	第七〇八号 第七〇八号	 ★五 明治三九年六月二十五日 林外務大臣 = J 第二回萬国平和会議議題ニ付テ之ヲ提出スルノ 権利ヲ留保スル回答通知ノ件 第二回萬国平和会議議題ニ付テ之ヲ提出スルノ 市在本邦 露国公使宛 第二回萬国平和会議ニ関スル件回答 第二回萬国平和会議ニ関スル件回答 第二回萬国平和会議ニ関スル件回答 第二回萬国平和会議ニ関スル件回答 上ニテ何等意見ヲ提出スルノ権利ヲ留保致置度候間右様御 	∧茲ニ重テ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ侯 敬具ニ可有之哉ニ相認候間右様御承知相成度此段回答旁本大臣年四五月ノ交ヲ以テ該会議ヲ開催セラレ候ハ、最モ好都合第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 六五 六
議 ルスノセ ハ コ ニコル招ラ 左 ト 参トコ待レ ノ 丶		 ★★ 明治手式年5月三十百 林外務大臣ョリ ★★ 明治手式年5月三十百 諸国公使宛 「二国海政府二方年5月三十百 諸国公使宛 「二国英国平和的処理條約ニ加盟方法ニ関スル回 「二国英国平和会議ニ関スル件回答 第二回英国平和会議ニ関スル件回答 第二回英国平和会議ニ関スル件回答 第二回英国平和会議ニ関スル件回答 「二国英国平和会議ニ関スル件回答 「二国英国平和会議ニ関スル件回答 「二国英国平和会議ニ関スル件回答 「二国英国平和会議ニ関スル件回答 「二国英国平和会議ニ関スル件回答 「二国英国平和会議ニ関スルート、テリ国際上重大ナ 「二国英国王」 「二国政府ニオシ通知ヲナスニョリ直チ 二国政府ニカン三方、「二国政府ニカン 	六六 小 11四 六六 小 11四

- _ 大

ヨリ本使へ訓令セラレ候義ニ於テ存在シ得ヘキヤヲ閣下ニ質問スヘキ旨露国外務省毫モ之ヲ豫想スル能ハサルニ付右難点ハ果シテ如何ナル意権ニ関シ日本政府ノ豫想セラル、難点ハ露国政府ニ於テハ新タニ加盟スル諸国ガ常置仲裁裁判所裁判官ヲ指定スルノ

確信スル所ニ有之候シムル様遅滞ナク回答ヲ与ヘラルベキハ露西亜帝国政府ノシムル様遅滞ナク回答ヲ与ヘラルベキハ露西亜帝国政府ノリテ露国政府ヲシテ該国際大会議ノ準備ヲ進行スルヲ得セン以テ総テノ大国トノ提携ヲ辞セント欲セラルヽニハ非ズ日本帝国政府ハ全文明世界ノ為メ斯ク貴重ナル事業ヲ阻礙

終ニ臨ミ本使ハ重テ閣下ニ対シ敬意ヲ表シ候

外務大臣子爵

林

董殿

在蘭

臨時代理公使

电山松次郎

印

開催ナキ事確定シ本年度ニ対シ追加豫算ノ必要ナキニ至リ 五日外務大臣ヨリ右追加豫算撤回ノ旨第二議院へ通牒有之 追加豫算ヲ嬴国政府ヨリ第二議院ニ提出セル儀ニ関シテハ 右及具報候 関係ナキ義ニ有之候 シカ故ニ有之従テ将来萬国平和会議開催ノ時日トハ何等ノ シテ政府カ右ノ挙措ニ出テタルハ本年内ニ萬国平和会議ノ タルカ故ナリトノ風説伝ハリ候へ共是一種ノ臆説ニ過キス 候右ニ就キ右ハ第二回萬国平和会議カ無期限ニ延期セラレ 去ル五月十一日付公信第二十三号ヲ以テ及具報置候処本月 龔ニ第二回萬国平和会議ニ要スル経費トシテ七万五千夫ノ 公信第五十一号 六八 明治三十九年十月十一日 和会議ニ関スル経費豫算撤回ノ件 蘭国政府ヨリ同国議会へ提出セル第二回萬国平 林外務大臣宛 蘭国駐劄亀山臨時代理公 敬具 十一月十三日接受

知並任国政府ノ回答振問合ニ付在英墺伊大公使第二回萬国平和会議ニ関スル露国ノ回答要旨通、 明治NHA年+月+天日 米国駐劄青本大使宛(電報)

へ転電方訓令ノ件

Aoki, Washington

No. 106. In reference to the proposed peace conference. In May last the Foreign Office received three Notes from the Russian Minister. First Note contained programme of second Conference as proposed by Russia. Second suggested conclusion by Powers signatory to Hague Arbitration Convention of a Protocol allowing Powers not represented at first Conference but invited to second Conference by Russia to adhere to said Convention by giving notice to the Netherlands Government and Third dealt with question of date of meeting of conference. Replies to the following effect were made to those Notes.

1. The Japanese Government would carefully study the programme before expressing any opinion regarding it.

第三章 平和会談ノ議題及時期、各国ノ準備 六九

were unable to consent to adhesion to Arbitration Convention of non-signatory Powers in the manner proposed by Russia, because Powers thus permitted at this time to adhere would not only be placed in special position as to good offices and mediation but would be invested with right to name members of Permanent Court of Arbitration.

sinia are out of question for other reasons and he regarding the programme and saying that a majority asks what difficulties Japan foresees in admitting the rican Republics which not having been represented at have influence upon the adhesion of the South Ame-Government to sign the proposed Protocol would only also states in said Note that the refusal of the Japanese programme proposed by Russia. of the interested Powers had adopted entirely the ging the Japanese Government to make an early reply received another Note from the Russian Minister urright of adhering Powers to designate members of the Conference. the first Conference are to be invited to the second be adjourned until April or May ω I suggested that the meeting of the Conference He adds that Corea, Panama and Abys-The Russian Minister next, I have just

七三九	第三章 平和会议ノ问题及时期、各国ノ準備 七二 十
of a few days. Then I saw Vice Minister for Foreign	ノ交渉ニ関スル件ハ本日(廿四日)墺匈帝国外務次官ニ面
will look into correspondence that took place during the former Ministry and let me know in the course	在英大使ヨリ転電費電第一〇六号第二平和会議ニ付露国ト第2(ユ
munication with Russian Government, but that he	第20字 林 大 臣 西代理公使
October 19th. He told me that, since his return to	十月二十五日 後二、二五 本省着十月二十四日 後七、二五 維納発
Zaiyei Taishi, I saw Italian Minister for Foreign Affairs	仕国政府ノ回答振
In accordance with your instructions transmitted by	第二回萬国平和会議ニ関スル露国政府ノ提案ニ
Tokio. No 35	七二 明治手丸年十月二四日 使ヨリ
Rome, Oct. 24, 1906, 3:50 p.m. Rec'd, Oct. 25, 1906, 1:25 p.m. Hayashi,	奥国駐劄西臨時代理公
任国政府ノ回答振答申ノ件(一)	
第二回萬国平和会議ニ関スル露国政府ノ提案ニ対シ	Sent Oct. 23, 1903. 3-30 p.m.
七三 明治三大年十月二六日 理公使ヨリ 伊国影響モ「音脳既代	as soon as possible. Hayashi.
日国主 11日二 13歳そう	hoped that you will confer with Secretary of State
***************************************	ι.
	÷
ニ及ブベキ旨ヲ答ヘタリ	Washington.
会ノ上電訓ノ趣ヲ申入レシニ同国政府ハ追テ取調ノ上回答	Aoki,
ニツキ擬義問合セニ対スル回答ノ件第二回眞国平和会議開催ニ関スル露国ヘノ回答	ニ対スル帝国政府回答ニツキ疑義問会セノ件第二回萬国平和会議開催ニ関シ露国政府ノ提案
日、別言之金一月言言し	
ヒー 明合言な手は引きす 林外務大臣ョリ	七〇明治学元年十月三十1日 林上統公司五、宮政之
Aoki,	
invitation to States having no international status.	Sent Oct. 16, 1906, 3-5 p.m.
able her to create complicated situation by issuing	Hayashi.
of protocol in the sense suggested by Russia will en-	astructions.
per of the Hague Convention. Furthermore, whether	
E .	Transmit the ab
ouidance whether martically speaking the object of	tion whatever to the proposed adhesion of the South
our Ambassador in London, but before conferring	gramme and the proposed rrotocol. For are attitudized to state that the Japanese Government have no objec-
No. 88. Your telegram 106 has been transmitted to	
Tokio.	credited and ask the Minister for Foreign Affairs what
Hayashi,	foregoing to the Government to which you are ac-
R'd. Tokio, Oct. 21st. 1906. 2.00 p.m.	1 de la companya de l
Washington, Oct.	of Arbitration. You are instr
一 1二八	第三章 平和会议ノ議題及時期、各国ノ準備 七〇 七

Affairs who said that he and Italian 第三章 平和会議ノ議題及時期、 Ambassador to 各国ノ準備 七四

France were appointed as the Italian Plenipotentiaries ries, 5 Russian to the Second Conference when it was proposed by that Abyssinia is among those accepted invitation to to Italy. Foreign Affairs verbally replied to Russian Ambassador swer as to the date on which Italian Minister for matter and said that his Government has committed Oct. 23rd. answered, Having already invited these three countclined and Corea is among those that have not yet Second Conference, Panama being only country deme in its entirety as well as Protocol, but made no anitself already by answering Russia accepting program-He me. did not understand what Russia really means. Russia says now that they are out of Government. He showed He added, showing me list sent by Russia, He was just engaged in drafting answer me I called all communications in that 0D Secretary-General question

Kusakabe

見ヲ交換スベシ抔懇話有之 ス ル コト故同会議ニ対スル行動ニ 就 テ ハ貴我充分研究シ 意

国カ是等ノ三国ニ対シ已ニ案内状ヲ発シタル今日ニ於テ他 Ŋ ラレ居リパナマハ案内ヲ断リタル唯一ノ国ニシテ朝鮮ハ未 バアビシニヤハ第二回ノ案内ヲ承諾シタル国ノ内ニ記入セ 憾ナリ抔ノ 挨拶 アリテ 猶露国ヨリ送付 セル 国名表ニ依レ 国ノ態度一定シ今更貴邦ト同一ノ態度ヲ取ル能ハサル 国ノ提案及議定書訂結ノ件ヲモ承諾シタル次第ニテ已ニ伊 物抔ヲ示シ之ヲ読上ヶ抔致シ伊国ハ何等ノ異議ナク全然露 尋ネ候処同氏ハ返翰起草中ニ有之伊露間ノ往復文書ノ印刷 応スペシトノ事ニ有之候仍テ昨廿三日午後書記官長代理ヲ 未夕何等大臣ヨリノ命ニ接セス然シ直ニ面会シ速ニ貴意ニ 記官長代理ニ裁シ其発送方ヲ促シ置キ候処直ニ返事アリテ 其後外務大臣ヨリ何等ノ返事無之候ニ依リ小官ハ私書ヲ書 ノ理由云々ヲ以テ此三国ハ問題外ナリト云フハ如何ナル 、何等ノ回答ヲ為サザル数ヶ国ノートナリ居レリ然ルニ露 い遺 意

申候 Foreign Affairs, substantially as follows: No. 36. 日夜来訪頻繁ヲ極メ居リ従ツテ覚書送附モ遅延致ス事ト 目下当府ニ独逸外務大臣来遊中ニテ外務大臣チト 此段及具報候 察候故不取敢今朝電報差進候次第二 成其全部ヲ記載スル Gaimudaijin, 七五 外務大臣子爵 明治三十九年十月廿四日 Tokio. 対シ任国政府ノ回答振回申ノ件(三) 第二回萬国平和会議ニ関スル露国政府ノ提案ニ 明治三式年十月二宝日 在伊 Just received note from Italian Minister for 敬具 臨時代理公使 Rome, Rec'd, 様三 林 ス 可 シ 董殿 October 25, 1906, 林外務大臣宛(電報)理公使ヨリ伊国駐劄日下部臨時代 3 ŀ 日 ノ事ニ有之右ニ F 御坐候 26, 部三九郎(印) 3 , 2 p.m. 2:25 p.m. テ **...** ,相分 ー氏へ

明治三元年十月三百日 林外務大臣宛伊国駐割日下部臨時代理公

1 = 0

七四

機密第拾弐号 第二回萬国平和会議二 ニ右ニ対スル任国政府 関スル露国政府ノ提案並 ノ回答振答申ノ件 十二月十日接受 <u>=</u>

第二平和会議ニ関スル件

テ右電報ノ通ニ可有之ト信シ候 其後未ダ外務大臣ヨリノ機密覚書接到不致候へ共大体は 第二平和会議ニ関シテハ本日御電報申進候次第ニ有之候処 於

会議ナリ抔談笑致居候 元来平和会議ノ後ニハ常ニ戦争ヲ見ル 東ナク又平和会議ノ果シテ成立スルヤハ尤測知スベカラズ 来年トナリテ果シテ自分カ依然任命セラレ居ル訳ナルヤ覚 スルコトト成リ居ルモ内閣変動ハ目下欧州ノ流行病ナレバ N 当国外務次官嘗テ初回ノ会議ニ伊国ノ委員トシテ参列 モ又委員ニ任命セラレ駐仏伊大使トルニエリ伯ト共ニ出席 **ハ閣下ニ於テモ御承知ノ通リニ有之候処第二回ノ会議ニ** コト故寧ロ忌 ムヘキ ৶ Ŋ

ナルモノヲ見タル事ナシトノ返事ニ有之候猶次官ハ仮令第 小官ハ露国ノ提案等ニ就テ氏ノ意見ヲ尋ネシニ未タ其提案

二回ノ会議成立スルコトト ナルモ夫迄ニハ充分ノ時日 ヲ存

被

 ν

1 11 1

味ナルヤ了解ニ苦シム云々相話シ有之候

小官ハ伊国カ露国ニ発シタル回答ノ写ヲ貰フ訳ニハ不参ヤ

ト相尋ネ候処同官ハ自分ノー慮見ニハ不参然シ返翰中ニ可

第三章

平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備

七五

from Russia and answered April 12th, (1) that adhesion of Italian Government to the program drawn by Russian Government has already in principle been accorded (having) made a reserve as regards possible suggestion that the Ministers of War and of Navy might consider themselves to be obliged to propose concerning matters of their respective competence;

(2) that Italian Government shared in every point opinion of Russian Government whether it concerns opportuneness of considering as granted the adhesion of those states invited to Second but which took no part in the First of the program to be followed in order to attain this result.

Kusakabe.

第二回萬国平和会議ニ関スル露国政府ノ提案ニモ六 明治三九年十月二六日 林外務大臣宛(電報)

対シ任国政府ノ回答振回申ノ件

七七 明治三大年十月二六日 林外務大臣宛(電報)

対シ任国政府ノ回答振リ回申ノ件第二回萬国平和会議ニ関スル露国政府ノ提案ニ

London,

Recd., Oct. 26 1906 10-20 a.m.

Hayashi, Tokio.

have signified their consent to programme of subjects the Russian Government to fix date for the meeting response to the Ambassador's note stating inability of of State for Foreign Affairs under date July 25th, in bassador to Great Britain by the Principal Secretary me a copy of confidential note sent to Russian State municated its purport to the Principal Secretary of No. 97. In reference to your telegram No. 106. I comnote is as follows: proposed for deliberation at conference. of the peace conference until all the great Powers for Foreign Affairs October 24th. Substance of He gave Am-

"British Government conclude that Russia does not intend to exclude the question of international limitation or reduction of armament from the subjects to 第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 七七

> Washington,----R'd. Tokio, Oct. 26th 1906. 5.10 p.m.

Hayashi, Tokio.

which he thought natural, but thought proper course thoroughly understood significance of Japan's objection ing my statement 25th October, Mr. Root said he No. 90. In reference to your telegram 106. ask him again for more positive answer. the next subject of conversation, but if desired I can general attitude, I thought it better to pass over to no word had come from St. Petersburg. the last thing he heard from Baron Rosen was that programme he dismissed subject by telling me that comments on protocol proposed by Russia. As regards to that of Corea it did not occur to her to make any even if it should meet at all, which was doubtful. peace conference would not lead to important results, without saying so directly that he thought second of her objection to Russia. He gave me an impression for Japan would be to communicate explicitly reasons He said that as United States had no question similar Such being On hear-

Aoki.

reserve right to suggest for discussion at a later state tion, and within a reasonable time before date eventually third heading as desirable to be included in a conventhey think that list of subjects mentioned under the proposed by Russia is of comprehensive nature, but in their opinion, to lead to any useful issue. gramme, if the discussion should take a form unlikely, generally right to abstain from partaking in the dission, British Government think it advisable to reserve In accepting, however, programme as a basis for discussider that subjects enumerated in programme may, tion of conference. tion of armament should be included in the deliberaguage of the Russian Government in the above sense, to guard herself against the conclusion that she is warfare, is not exhaustive enough, and they therefore Government note with satisfaction that the programme cussion of any of the subjects contained in the proas the whole, be freely discussed with advantage. British Government desire that the question of reduccommitted to such a discussion. be discussed at conference, which (while ?) she wishes regarding the laws and customs of maritime Further British Government con-Understanding lan-British

第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 七八 七九

二四

fixed for meeting of the conference other kindred subjects not at present mentioned in the list".

Principal Secretary of State for Foreign Affairs further told me that the British Government have already signified their approval of the proposed protocol.

Komura.

七八 明治三元年十一月八日 姚州務大臣宛(電報)

リ且充分通過ノ見込アル旨ヲ内話セリ右御参考迄

対シ任国政府ノ回答振回申ノ件

十一月九日 前八、四〇 本省着

4付代理次官ニ面会シ回答振ヲ問合ハセシニ壊国政府ハ対シ何等回答ニ接セサルニョリ十一月七日外務大臣旅行中シ往電第六〇号ヲ以テ及報告置シ後未タ当国政府ヨリ右ニ第二平和会議ノ件ニ付当国政府ノ意見ヲ確カムルコトニ関

In reply to the note from the Russian Minister to Japan, mentioned in my telegram No. 106 in continuation of the subject of the proposed Second Peace Conference, I sent him a note dated November 10th substantially as follows:--

Touching the question of the conclusion, by powers signatory to Hague Arbitration Convention, of Protocol allowing Powers not represented at the First Conference but invited to the Second, to adhere to the said Convention, the Imperial Government infer from the Russian note that in addition to the Powers represented at the last conference, only the South American Republics are to be invited to take part in the forthcoming meeting. If that inference is correct, the Imperial Government, upon being assured that the invitations to the proposed new Conference are limited and to be limited as above indicated, will withdraw their objection to the proposed protocol and signify their approval of the same.

In reference to the programme of the Conference, as outlined in the Russian note of May 4th the Imperial Government accept that project in principle as a basis of discussion. The programme as it stands 第三章 平和会議/議題及時期、各国ノ準備 七九

月初旬ニ開会スヘキ帝国共同豫算会ニ提出スヘキ手筈トナニ来年度豫算ニ東京大使館設立ニ関スル経費ヲ編入シ十二年来年度豫算ニ東京大使館設立ニ関スル経費ヲ編入シ十二年来年度豫算ニ東京大使館設立ニ関スル詳細ノ事項へ追テ調査ノ上回領収モシ際同政府ハ第二平和会議ノプログラムハ大体ニ於数ヶ月前露国政府ヨリ帝国政府へ提議モシト同様ノ議案ヲ

覚書要旨通知並右在欧大公使へ転電方訓令ノ件第二回萬国平和会議ニ関スル露国政府へノ回答 米国駐劄青木大使宛(電報)

Sent, Nov. 9, 1906, 5.20 p.m

Aoki, Washington

No. 121.

abstain prevent such a conjuncture, they reserve the right be able to contribute the weight of their influence to respects, take an undesirable course and in order to selves the possibility that deliberations may, in some the same time they are unable to conceal from themand to resolve satisfactorily all conflicting issues. At hope that it may be found possible divergent practices prevail. The Imperial Government widely varying views are embraces many important points, respecting which the subjects to be examined. belligerents, might with advantage be included among prominence especially respecting the rights and duties programme, but which have of late been brought to tions which are not specifically enumerated in the Government, they nevertheless believe that some quescharacter of the programme elaborated by the Russian Imperial Government fully recognize the extensive to any useful result. takes or promises to take a direction not likely to lead Imperial Government, in the interest of a more comof neutrals or correlatively the duties and rights of or withdraw from any discussion On the other hand while the entertained and equally In this conviction the to discuss freely which

which the meeting of the Conference other cognate subjects suggest thereafter but within a reasonable time before plete international understanding, reserve the right to Koshi and my telegram No. 106 to Zai-Futsu, Doku this telegram to Zai-Futsu, Doku, Zaiei-Taishi, adding that he is to 送第一二五号 Taishi Zairo-Koshi simply for their own information ニ於ケ 完全ナル国際協約ノ成立ヲ助クル為メ他ノ同種類ノ問題ニ 題ノ如キハ審議ニ附スヘキ項目ノ中ニ包含スルヲ有益ナリ ヲ他ノ一面ヨリ見レハ即チ交戦国ノ義務及権利ニ関スル問 近時顕著トナリタル諸問題殊ニ中立国ノ権利及ヒ義務、之 西亜帝国政府ノ調製ニ係ル議案ガ広汎ナル性質ヲ具備セル 政府ニ於テ認メタルトキハ帝国政府ハ該討議ニ参加セズ又 勢力ヲ用ヰルヲ得ムガ為メ何等討議ガ毫モ有益ノ結果ヲ奏 ヲ取ル場合ノアリ得ヘキコトヲモ認メサルヲ得ズ候帝国政 有之候得共同時ニ或関係ニ於テ討議ガ望マシカラザル傾向 ラレ且ツ満足ニ解決セラル 明治卅九年十一月十日発遣 終ニ臨ミ前述ノ次第ハ帝国政府ガ第二回平和会議ヲシテ成 シテ均シク整理ヲ要スト認ムルモノヲ今日以後開会迄ノ間 コトヲ全然認識スルト同時ニ特ニ右議案ニ載セラレザルモ 功ヲ収メシ ト信スルモノニ有之候帝国政府ハ右ノ確信ヲ持シ且ツ一層 The 中途ヨリ参加ヲ辞スルノ権ヲ留保致候尚ホ帝国政府ハ露 シメザルガ如キ傾向ヲ取リ又ハ取ラントスルコト л О ハ斯ル場合ニ立至ルコトヲ豫防スル 在本邦 答ノ件 理條約加盟方法ニ関スル露国政府提案ニ対シ回第二回萬国平和会議議題並ニ国際紛争平和的処 above for your own in their opinion equally call for adjustment. n 明治三九年十月十日 第二回平和会議参同ノ件 相当ノ時機ヲ以テ会議ニ提出スルノ権ヲ留保致 メンガ為メ尽力ヲ為スニ於テ他ノ諸大国ヨリ自 露国公使 、ヲ得ムコトヲ切望スルモノ 露国公使宛林外務大臣 information. Oho, I, ノ目的ヲ以テ臨機 transmit by mail 林 E Hayashi ŋ 大 Ro Taishi Transmit - ヲ帝国 臣 其 = 期待致候 分ナル保證ト 題ニ関シテハ世上ノ意見大ニ相分レ且ツ国際慣例モ均シ 帝国政府ハ欣然右議定費締結ニ関スル異議ヲ撤回シ之ニ 会議ニ代表セラレタル諸国以外ニ於テハ南米諸共和国ノミ 政府ハ前記貴翰ニ依リ次ノ会議ニ招待セラルヘキハ第一回 confidentially lent, exclusively for my perusal, the question of programme proposed by Russia. sequent interview with Mr. Elihu Root, I took advan-No. 100. In reference to my telegram 90. Hayashi 本大臣ハ兹ニ重テ閣下ニ向ヒ敬意ヲ表シ候 異 リ居候帝国政府 ハ異論アル一切 ノ 問題 ガ自由ニ討議 セ 前記議案ハ現ニ多クノ重要ナル問題ヲ包含致居候処此等問 ノ議案ニ関シテハ帝国政府ハ主義上之ヲ討議ノ一基礎トシ 後日ニ至リ変更セラル丶コトナキ旨ノ保證ヲ得ルニ於テハ 書ヲ同條約ニ調印セシ諸国間ニ締結スルノ問題ニ関シ帝国 紛争平和的処理條約ニ加盟スルヲ得セシムヘキ趣意ノ議定 第一回平和会議ニ代表セラレザリシモ第二回会議ニ招待 of correspondences between United States and Russia tage of favourable occasion in conversation to resume ラ分離セムトスルノ意志ヲ有スルモノニアラザルコトノ充 トスル所ニ有之候 テ承諾スル旨ヲ閣下ニ通知スルヲ得ルハ是亦本大臣ノ欣幸 シ 賛成ノ 意ヲ 表明可 致候 ニ招待セラルヘキ国ハ現ニ前述ノ通リ制限セラレ居リ且ツ ニ限ルコト、推定致候若シ此推定ニシテ其当ヲ得次ノ会議 ラルヘキ諸国ヲシテ蘭国政府へ通知ヲナスコトニ依リ国際 貴翰ヲ以テ御申越之趣致敬承候 以書簡致啓上候陳者第二回平和会議 本年五月四日付貴翰 中ニ列記 セラレタル第二回平和会議 <u>л</u> Tokio. 対シ任国政府ノ回答振報告ノ件 第二回萬国平和会議ニ関スル露国政府ノ提案ニ 明治三元年十月十日 シテ露西亜国政府ニ於テ之ヲ御諒承可相成ヲ Tokio, Nov. 17th 1906. 5,38 p.m. Washington,..... 林外務大臣宛(電報)米国駐箚青木大使ヨリ 関シ本年十月九日付 敬具 At a subcopies He ク 敓 セ

第三章

平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備

л 0

ーニネ

セ

ゝ

第三章

平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備

ハー

1 二七

June on the subject of proposed peace conference up to 7th adding there 第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 was further correspondence <u>^</u>

from Russian Ambassador which he has not yet

studied.

guay, States invited to second peace conference by Russia turned answer are: Corea, Ecuador, Nicaragua, Uruinvitation is Panama; States which have not yet cluded. There is a foot-note "State that has declined is enclosed. <u>ب</u> In a note of Baron Rosen of April 12th, list of Venezuela". Abyssinia, Corea and Panama are inю.

first, answering to the second note June 7th, he expressed lations of several States and condition of things estaagreement with Russian suggestion that political rethe liberty to advance other similar proposals. more fully in the second note. Baron Rosen expounding the proposed programme cated to Secretary of State April 3rd., April 12th, blished by treaties should not be discussed by all the questions contained in Russian proposal should Conference. Ņ Secretary of state reserved to the United States Russian proposals of programme were communi-United States Government consider that In replying to the the Б

should from the subjects of deliberations of the conshall determine of their own accord what questions ference persuaded that the nations in conference assembled as supplementary programme and United States are

favourable answer. communicated to British Government which returned of the United States to bring these two questions was Secretary of State also told me that the intention

lieving that European powers including Great Britain government to the proposal, United States firmly beproposal to bring the question for discussion. armament though acceding with good grace to the Britain. He then requested me to ascertain of Japanhas been reached between United States and great it seemed to me hardly likely that Japanese Governit prudent to say at once as my personal opinion that would not seriously entertain scheme of reduction of posal to bring up the questions. ese Government what they thought of American proment would have any objection if an understanding сл He asked me what would be attitude of Japanese I deemed

Aoki.

第二、且ツハ叉タ若シ露国ノ提供スルガ如キ議定書ノ締 結セラル、ニ於テハ之レガ為メ露国ヲシテ国際的地歩

ヲ有セサル諸国ニ招待ヲ発スル事ニ依リ紛端ヲ啓カシ

ムルノ恐レアルガ為メ

モノアルヲ防止スル為メ

第三章

平和会議ノ議題及時期、

各国ノ準備

ハニ

一三八

of contracts." upon use of force for ordinary public debt arising out ment among the Powers to observe some limitations ties of war could not be greatly decreased by agreeas an item of programme is "whether the probabiliarmament. Another subject suggested by United States consider the question of reduction or limitation of be included in programme, but in addition propose to

States intend to propose the two points above mentioned Powers. great Powers of Europe and could not be of United States. In spite of Russian attitude, Urited to take unfavourable attitude towards present proposal the question from proposed programme, but actually the first conference, has seen fit not only to exclude while loudly calling for disarmament in convoking much dissatisfaction with the action of Russia who without going over the whole subject again with those rested Powers was the result of understanding with the programme communicated by Russia to the answer to these proposals of United States was that (Nov. ?) 15th, he told me confidentially that Russian ω At an interview with Secretary of State Oct. Secretary of State manifested in conversation changed inte-

스 第二萬国平和会議開催ニ関シ米露両国政府ノ往 明治三九年十月六日 林外務大臣宛米国駐割青木大使ヨリ

復文書写送付ノ件 附屬書 右往復文書

結ノ弐点ニ関シ任国政府ノ執リタル処置ヲ開合ス可キ旨客 紛争平和的処理條約ニ加盟スル事ヲ得セシムル議定書ノ締 及ビ第一平和会議ニ参列セザリシモ第二平和会議ニハ露国 露国ノ提案ニ対シ帝国政府ノ同意スル事ヲ得ズト云ヘルハ 電中第一平和会議ニ参列セザリシ諸国ノ加盟云云ニ関スル 月十六日接到第一〇六号貴電来訓ノ趣承知致候然ルニ右貴 ニヨリテ招請セラレタル諸国ヲシテ千八百九十九年ノ国際 第二萬国平和会議開催ニ関シ露国政府ノ提供ニ係ル議題案第二萬国平和会議開催ニ関シ露国政府ノ提供ニ係ル議題案 第二〇号 第一、依リテ以テ韓国ノ海牙條約ノ加盟国タラントス 十二月十日接受 ル

一二九

平和会議ノ議題及時期、 木 各国ノ準備 周 蔵 印 トニ October tives Secretary of State, John Hay, natories of the Hague Convention of 1899. <u>ę</u> 21, the United 1904.Date States accredited to the Sigof circular instructions of to the Representa-

RUSSO AMERICAN CORRESPONDENCE.

外務大臣子爵

董 殿

第三章

在米

青

明治 卅九年十一月十九日 特命全権大使子爵 敬具

シタル以上帝国政府ニ於テ別ニ何等異議ヲ有ス可クモ思ハ シ カ ス N 有之候得共尚其説明旁々此段申進候 - $\hat{\boldsymbol{v}}$ 依頼相成候右ハ既ニ前顕往電第壱百号中ニ及具報候処ニ 提議ニ対シ有セラル、意見ヲ確メラレ度云々更ラニ本使 其通リ相答へ候処同長官ハ然ラバ何卒帝国政府 テハ本使一個ノ私見トシテ既ニ英国政府ニシテ同意ヲ表ル可キヲ確信スルモノナルガ故ニ此国務長官ノ質問ニ対 ルモ欧州諸国ノ実際真面目ニ之レヲ念トスルガ如キ事ナ ト云フノ故ヲ以テ好シ表面上之レニ賛同ノ意ヲ表スル 「ルニ本使ハ此兵備縮少ノ議ニ就テハ其ノ米国ノ提供 ザル旨申述べ候儀最モ機宜ニ適シタル回答振リカト思料 川ノ右米国 三係 ŀ

志ハ既ニ之ヲ英国政府ニ通牒シ其内諾ヲ得タル所ナル旨ヲ 内話シ語ヲ次デ右米国ノ提議ニ対スル帝国政府ノ態度ハ如 国務長官ハ更ラニ又タ右ノ弐案ヲ提出セントスル米国ノ意 ク其合議ニ依リ果シテ如何ナル問題ヲ以テ議題トス可 決定ス可キモノナリト考フ云々内話有之候 ナル可キ旨本使ニ質問有之候

(附屬書)

NOTES ON THE ACTION TAKEN BY RUSSIA

往復文書摘要録

(別紙乙号)

第二回萬国平和会議開催ニ関ッ米露両国政府

WITH REFERENCE TO THE CONFERENCE OF THE SECOND PEACE CONFERENCE

AND CONFERENCE RELATING TO

THE REVISION OF THE GE-

NEVA CONFERENCE

米国ノ見ル所

(ヲ以テスレバ第二会議ニ参列スル諸国ハ宜

キカ

シ

行全班ヲ一見スルニ便センガ為メ宮岡参事官ヲシテ作成 リ本使ノ承知シタル所ヲ綜合シ露国ノ執リタル動作ノ成 載シタル事実ト日露間ノ往復ニ関スル貴電ノ事実トニ依 追テ国務長官ガ内密本使ニ貸与シタル米露往復文書ニ記 セシメタル摘要録別紙乙号ノ通リニ有之御参照上多少ノ

便宜可有之カト存候ニ付併セテ差進候也

右ノ如ク別紙往復文書ニ拠レバ先般赤十字会議開催ノ次第 関スル米国政府ノ弐提案ニ対スル露国回答ノ趣意ヲ内密本 之通リ兵備縮少及ビ国債ノ徴収上債主国ノ実力使用制限ニ 相成候様希望致候其後本月十五日ニ至リ本使ハ重ネテ国務 態ノ経過ハ第二平和会議招集一件将来ノ発展ニ関シ参考ト 然ルニ該会議ハ既ニ終了シタルモ之ガ招集ニ聯係シタル事 Ξ 鬱ノ語気ヲ洩ラシ尙ホ米国ハ露国ノ態度如何ニ関スル事ナ ノ態度ヲ示スガ如キハ甚ダ心得難キ次第ナリ 精神ニ基キ今回米国ノ提議セル右ノ弐案ニ対シ却リテ反対 ヲ其議題案中ヨリ除キタルノミナラズ且ツ第一平和会議ノ リ盛カンニ兵備解除ヲ呼号シナガラ今回ハ雷ニ自ラ此問題 使ニ語リタル上更ラニ露国ハ第一平和会議ヲ提唱スルニ当 長官ト会見致候処同長官ハ前顕往電第壱百号三項ノ所報 ハ其他トノ間ニ於ケル往復顧末本使参考ノ為メ早便御郵示 可相成被存候ニ付赤十字会議ニ関シ帝国政府ト瑞西政府又 ク右ノ弐案ハ之ヲ第二平和会議ニ提出ス可キ積リナ 就テハ其間ニ幾許ノ魂胆アリタルモノナル哉ニ被相察候 トテ真個ニ憤 リ将又

及致候処同官ハ本使限リ内閲ニ供ストテ当初ヨリ去ル六月 未ダ十分準備シ居ラザリシモノ、如ク其回答振リ要ヲ得ザ 第九〇号電稟ノ通リニシテ国務長官ニ於テハ此問題ニ関シ セル照会アルモ右ハ未ダ同官ニ於テ考究ヲ経ザル所ナル旨 七日ニ至ル迄ニ本問題ニ関シ米露両国政府ノ間ニ往復シタ ニ付其後本月八日ノ会見ニ於テ好機ヲ捉ヘ再ビ此問題ニ言 接見日ヲ機会トシテ同官ト会談スル所アリ其結果ハ同日 文書ノ写ヲ貸与セラレ尚ホ其後ニ至リ露国大使ヨリ接収 モノ有之強テ窮問スルノ面白カラザルモノアルヲ看取候

右米露兩国政府往復文書ノ要綱ハ本月十六日第壱百号電信 差進候間御查閱相成候樣致度 ヲ以テ及報告置候得共尚ホ御参考ノ為メ其写別冊壱部内密

附言相成候

N

N

Ի 十字條約改正ノ事業ヲモ第二平和会議ノ事業中ニ包含セン シテ右文書ノ示メス所ニ拠レバ露国政府当初ノ希望ハ スル . ____ 在リタルモ此希望ノ貫徹ス可ラサルニ及ンデ更ラ 赤

何等

ニ赤十字会議及ビ第二平和会議開催ノ期ヲ切リニ急ギ赤十

カ趣意ノ伏在スルモノアルヲ察スルニ難ラスト存候

ザラン事ニ焦慮シタル

ノ形跡歴然タル

旨第一〇七号貴電ニ接シタルヲ以テ其翌々廿五日国務長官 之候処同月廿三日ニ至リ右ノ二疑問ハ本使所見ノ通リナル 之ヲ確知致置度存候ニ付客月廿日附第八八号電請ノ次第有 ナルヤ否ヤノ点ニ関シ本使ハ国務長官ト会談スル前ニ於テ

第三章

平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備

스

1 3 0

cated ference may become adhering parties. signatory to the original Acts of the Hague Conto consider the procedure by which States fare. It was also suggested that it may be desirable and inviolability of private property in naval warference, notably the rights and duties of neutrals, Conference of The Hague relegated to general topics which the Final Act of the First cussion; but the United States Government indiwith a categorical programme of subjects of disbe premature to couple this tentative invitation may be convoked to meet at The Hague. President suggests that Second Peace Conference as fitting subjects 第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 for consideration future con-It would non-∧ ≞ the

December 16, 1906. States accredited to the Signatories of The Hague Secretary Hay to the Representatives of the United Convention of 1899. Date of Circular Instructions of

has found expression. President considers that his has been received with general favor. of the United States to hold Second Conference The Hague Convention indicate that the proposition Replies so far received from the Signatories of No dissent

part in a new international peace conference which cation is to the effect that the Emperor of Russia Russia has no diplomatic relation. That communitatives of South American Governments with whom municated." Governments to whom similar proposals are comfavorable replies could be received from other could be "addresses to the General of proposal to take munication to be addressed by him to the Represencalled together at The Hague as soon as

October 12, 1905. Secretary Root in a personal letter of the Tsar. cating the reply of the President to the message enclosed to Baron Rosen a memorandum communi-

national Peace Conference. of the steps requisite to convene a second Inter-Emperor to again take upon himself the initiation President welcomes the offer of the Russian

Note:

November 17, 1905. latter's foreign relation. and Korea regarding the Treaty concluded between Japan administration of the

1 11 1

Hague. calling a renewed conference to assemble at The action of the Government of the Netherlands in The Hague, and the way left clear for the eventual control of the Permanent Administrative Council of ducted through the International Bureau under the the signatories of the Acts of 1899 may be conplished. The further interchange of views between task in this connection has been virtually accom-

- September 13, 1905. Baron Rosen presented a Memotion. potentiaries of Russia will lay before the Confersimilar proposal will be made by Russia. randum to President Roosevelt which could serve as a starting point for deliberaence at its future meeting a detailed programme could be secured from all other States to which a together at The Hague as soon as favorable replies new international conference which could be called the United States that the latter take part in a Russian Emperor proposes to the Government of in the sense that Pleni-
- October 5, 1905. tary Root in a personal letter, text of the com-Baron Rosen transmitted to Secre-

RUSSO-AMERICAN CORRESPONDENCE.

December 4, 1905. Russian Ambassador sent a memorandum to Secretary Swiss Government is "hardly justifiable". "Russian itrarily postponed by the Swiss Government under Cross Convention) "has been repeatedly and arbgreat Powers, before adopting a definite programme the Conference" (looking to the revision of the Red proposed revision of the Geneva Articles, the Mefollowing four points:" after a confidential exchange of views, upon the for the Second Peace Conference should Government therefore deem it essential that the various pretenses." and that the attitude of the morandum says that the "actual convocation of Root. Referring to the agree,

Convention with the Second Hague Conference? ۲ Is it advisable to combine revision of Geneva

Conference for revision of Geneva Articles? Ņ Or shall Swiss Government call a separate

Swiss Government to fix in the nearest possible deem it possible to take a collective step to induce ω If the latter view prevails do the great Powers

future a definite term for the assembling of the 第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 스

shall this conference also consider application of question be considered at Second Peace Conference. Red Cross Convention to sea warfare, or shall this Conference for the revision of the Geneva articles proposed Conference? If Switzerland is entitled to call a separate

Conference. of submitting the matter of the revision of the States against the Swiss Government and in favor manifestly to invoke the support of the United Geneva Convention to the deliberation of the Peace The object of this Russian memorandum was

December 13, 1905. Rosen a memorandum in answer to the above. Secretary Root sent to Baron

Second Hague glad to see an understanding reached by the parties Convention giving to their Hague Plenipotentiaries may be accomplished by the parties to the Geneva could be combined with the proceedings of the to the Geneva Convention by which revision thereof separate special powers to revise the Geneva Con-"The Government of the United States would be Conference. It is thought that this

the second part of May (new style) 1906. of the Geneva Convention at a date not later than Government to convene the Conference for revision

April 3, 1906. laws of wars on which did not sign the Convention relative to the July 1906, and that Russia invited those nations call The Hague Conference during the first half of the that the Russian Government in agreement with ernment of their adhesion to these Conventions. to the adaptation of the Geneva Convention to maritime warfare, to inform the Netherlands Gov-Government Baron Rosen informed Secretary Root of the Netherlands proposed to land or the Convention relative

the signatory Powers of the Acts of 1899. sion of non-signatories to the Convention relating to next Hague Conference. which his Government proposes to submit to the international arbitration, Russia was conferring with Ambassador enclosed a summary of the programme Baron Rosen said that with reference to the adhe-In the note conveying the above They are as follows: information Russian

tion regarding the peaceful settlement of interna-Amelioration of the provisions of the conven-第三章

Þ

general Conference." and at the same time act in harmony with the confer separately from the universal peace assembly vention so that these special plenipotentiaries could

March 22, 1906. The Russian Ambassador sent to ference. regard to the revision of the Geneva Convention; have adhered to it to give to their representatives the State Department Draft of ions sitting at the same time as the plenary which revision could be undertaken in special reunat the next perce Conference special powers with Geneva Convention of 1864 and the Powers that ment will invite the original Signatories of the ernment express the hope that the Swiss Govern-Minister in Berne. dressed to the Swiss Government by the Russian In this note the Russian Gova Note to be ad-Con-

ω at Geneva before the meeting of the Peace Conrevision of the Convention of 1864 may be effected Government may have already decided to convene ference, but in that event Russia urges the Swiss In this note Russia anticipates that the Swiss new conference at Geneva. In that case the

tion and the investigation committees are concerned. tional controversies as far as the court of Arbitra-

tions of 1899-renewal of one of them. usages of land warfare-among others, opening of hostilities, rights of neutrals on land, etc.; declara-2. Additions to the convention of the laws and

ports after the beginning of hostilities; rights and naval force; placing of torpedoes, etc.; transforalso to naval warfare, relative to land warfare which would be applicable Into this convention would be inserted provisions vis major of merchant vessels captured as prizes. shall be subjected in neutral ports; destruction by of contraband; rules to which belligerent vessels duties of neutrals at sea, among others the question merchant vessels in order to leave neutral or hostile property of belligerents at sea; mation of merchant vessels into war vessels; private bombardment of ports, cities, and villages by a special operations of naval warfare, such as the laws and usages of naval warfare, concerning the ယ့ Preparation of a convention regarding the period granted

tion to Geneva Convention of 1864. naval warfare of the principles of 第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 the <u>∧</u>

All political questions will be excluded

April 6, 1906. 1906. tions convened to meet at Rio Janeiro on July 21, as on account of the conference of American naassembling of the Peace Conference would, however, the Russian and the Dutch Governments for the the next Peace Conference. Plenipotentiaries to represent the United States at was the intention of the President to Russian Ambassador Secretary Root stated that it these governments are concerned that take part in nature, there would be action by the participating Governments. Besides June to complete its work for consideration and Red Cross Congress to be would manifestly not give sufficient time to the United States but to other American nations as well be embarrassing and inconvenient not only to the all these three important conferences at the same Such an early date as the first half of such as representation, etc. In answer to the above note of the other difficulties of The date suggested by held at Geneva in mid in so far as a practical appoint July

the first half as mentioned in his previous note. added that the date intended by Russia in her the meeting of the States-General. required by the Dutch Government in September for the Peace Conference its labors by that time, and the palace destined for that the Geneva Conference would have completed proposal was the second half of July 1906 and not Dutch Government. The latter Government believed at The Hague would be Baron Rosen

April 12, 1906. posed Peace Conference, which are essentially as done before, the Russian programme follows: Secretary Root expounding more fully than he had Baron Rosen addressed a note to for the pro-

the International Commissions of Inquiry. differences as regards the Court of Arbitration and relating to the peaceful adjustment of international Improvements to be made in the Convention

of those declarations having expired questions of neutrals of war on land-opening of hostilities, rights of Convention of 1899 relative to the laws and customs reviving it. Ņ Additions to be made to the provisions of on land, etc. Declarations of 1899. One

第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 스

ments. issued later by the Russian and the Dutch Governcence in advance of formal invitations to be jointly Secretary of State was to invite general acquiesthe notes such as the one just received by the of Russia in addressing time. The United States understand that the object to the interested Powers

its own need and experience counsel such a course". reserves consideration thereof, with liberty to adbe submitted to rences. for the Peaceful Adjustment of International Diffemitted to adhere to the Convention of The Hague the manner in which other Powers are to be peramong the original Signatories with reference to of views looking to the conclusion of an agreement vance other proposals of an allied character should The President welcomes the suggested comparison As regards the programme of subjects to conference the "United States

April ting of the Hague Conference at the wish of the second half of July was proposed as time of meehim from Count Lamsdorff, according to which the Secretary Root the text of a telegram received by ç, 1906. Baron Rosen communicated ð

ning of hostilities, from neutral or sion of merchant vessels into cruisers, (c) belligerents' also applicable to maritime warfare. war on land would be introduced that would be convention thus to be framed provisions relating to (e) rights and duties of neutrals at sea. In the granted to merchant ships for departure, after opeprivate property at sea, (d) length of time to be bombardment laying of torpedoes, etc., (b) converand customs of maritime warfare concerning (a) ω Framing of a convention relative to the laws enemies' ports,

1899 for adaptation to maritime principles of Geneva Convention of 1864. Additions to be made to the Convention of warfare of the

states, or condition of things established by treaties, cabinets come within the programme adopted by the several or in general with questions that did not directly should not deal with political relations of several Deliberations of the contemplated meeting

April 12, 1906.

Secretary Root, Baron Rosen stated that his Govern-In a second note addressed on this date to

第三章 平和会議, 議題及時期, 各国、準備 <11 ment suggested the month of July as the time of meeting of the proposed Conference simply because it seemed to be the most convenient time for Holland, but as the Government of the Netherlands found it possible to convene the conference at some other time, Russia was ready to postpone the conference until such time as would be acceptable to

all the interested powers.

April 12, 1899. of the States invited to participate in the proposed take part in the general deliberations at The Second three Conventions of The Hague before they can newly invited States will have to adhere to perfecting the provisions of the Act of 1899, ference is to be convoked for have not taken part in the Peace Conference of Conference, among which are several States that bassador. date to the Secretary of State by the Russian Amvention relating to the Peace Conference. International Differences, It is observed that if the forthcoming con-1906, A third note was addressed on this In this note Baron Rosen encloses a list As regards adhesion to the Con-Peaceful Adjustment of Article 60 the purpose of that Conthe the of

In the list enclosed in Baron Rosen's note, in which Bulgaria, Cuba, Ethiopia, Korea, Luxembourg and Montenegro are included, among the States invited to the Second Conference, the following footnotes appear:--

"State that has declined the invitation: Panama. States that have not yet returned an answer: Korea, Ecuador, Nicaragua, Uruguay, and Venezuela."

April 13, 1906. On this date Secretary Root addressed acknowledged, is apparently Baron Rosen's second instant". had the honor to receive your note of the 12th a note to Baron Rosen commencing with "I have to the attention of Mr. Root. relates to the question of adhesion. was brought Baron undoubtedly prepared at the State Department before agreeable to the United States. that any date after the 20th of September will be meeting of the Conference. note of April 12th-the one relating to the time of referring to that note but adverting to the declared Rosen's third note The note, the receipt of which is thus Mr. Root says in reply of April 12th, Therefore This note was without which

第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 八二

vention prescribes that the conditions of adhesion shall form the subject of a subsequent agreement among the signatories. In pursuance of that Article Russia proposes that on the opening of the forthcoming Conference the following Protocol be signed by the representatives of the original Signatory-States.

"The representatives at the Second Peace Conference of the States signatories of the convention of 1899 relative to the peaceful settlement of international disputes, duly authorized to that effect, have agreed that in case the States that were not represented at the First Peace Conference, but have been convoked to the present conference, should notify the Government of the Netherlands of their adhesion to the abovementioned convention they shall be forthwith considered as having acceded thereto."

As regards adhesion to the two other Conventions of 1899 Russia has addressed to the newlyinvited States "a request that they immediately forward to the Government of the Netherland their adhesion" to the same.

purpose of Russia announced in one of Baron Rosen's earlier notes to confer with the Signatories of the Convention of 1899 looking to the conclusion of an agreement on the subject of adhesion, Mr. Root suggests "whether the status of the nonadhering States ought not to be settled before the meeting of the congress, and whether such status may not be determined by exchange of notes annong the several Powers".

April 19, 1906. The note from the Secretary of State to the Russian Ambassador of this date addresses itself to what the Secretary calls "your second note of the 12th instant", which deals with the question of adhesion and is the third note of Baron Rosen of April 12th in the order given above. Baron Rosen's first notes of April 12th containing the programme is net answered by Secretary Root until June 7, 1906.

In reference to the Russian proposal regarding the manner of adhesion Secretary Root states in his note of April 19th that the United States understand that should the other Powers which took part in the Conference of 1899 signify their assent to the Russian proposal, the Representatives of the

第三章 平和会議,議題及時期,各国,準備 八II States to be newly admitted can go to the Second Conference without feeling uncertain whether they can take part in the Conference convoked. Under this view the United States considers the Russian proposal as fully meeting the suggestion contained in Mr. Root's note of April 13th.

vention.

- April 22nd, 1906. to the necessity of giving forthwith to the Governstructed to call the attention of the other Govern-Baron Rosen further states that he has been inditious settlement of the question of the participaher best efforts toward the most practical and expe-The Count adds that "in any case Russia will use Lamsdorff saying that the desire to permit newly to be in readiness to notify the same Government to the Second and Third Convention of 1899 and ment of the Netherlands notice of their adhesion ments, to which he transmitted Russia's invitation, tion of all the invited Powers in the Conference." from the outset is the basis of Russian proposal. invited Powers to participate in the Conference Root of the receipt of a telegram from Count of their adhesion to the First Convention as soon Baron Rosen informed Secretary
- To the 1st Note—Japanese Government will carefully study programme before expressing opinion.
- To the 2nd Note—Japanese Government object to the proposed Protocol, for the reason that (a) Powers thus admitted would be placed in special positions as regards good offices and mediation,
 (b) such invited Powers would have the right to name members of the Permanent Court of Arbitration.
- To the 3rd Note—The Japanese Government suggests the postponement of Conference until April or May 1907.

RUSSO-AMERICAN CORRESPONDENCE.

June 7, 1906. The note of the Secretary of State of this date answers the Russian Ambassador's first note of April 12th containing the programme. The United States Government agree "with the suggestions contained in the Russian note that the deliberations of the meeting should not deal with the political relations of the several States, or with the condition of things established by treaties, and that neither the solution of the questions brought up 第三章 平和会議ヽ議題及時期、各国丶準備 <11

> as they receive telegraphic advice from Russia as to the consent of all the Signatories of that Con-

RUSSO-JAPANESE CORRESPONDENCE

- May , 1906. (Facts contained under this heading came to the knowledge of Viscount Aoki on October 16, 1906).
- In the month of May 1906 three notes were received by the Japanese Minister for Foreign affairs from Russian Minister in Tokio.
- 1st Note—contained programme of Second Conference as proposed by Russia.

2nd Note-suggested conclusion among the signatories of the original Act of 1899, of a protocol according to which States not represented at the First Peace Conference but invited by Russia to the Second Conference, may adhere to the original Convention of The Hague merely by giving notice to the Government of The Netherlands.

3rd Note—related to the date of the meeting of the Conference.

Japanese Answers:--

for discussion, nor the order in which they are to be examined, nor the form to be given to the decisions reached, should be subject for determination in advance of the Conference." The United States Government also considers that all questions already proposed by Russia should be included in the programme. Secretary Root's note quotes the following from Count Mouravieff's memorandum of August 12th, 1898:

"The maintenance of general peace and a possible reduction of the excessive armaments which weigh down upon all nations present themselves, in the actual present situation of the world, as the ideal toward which should tend the efforts of all governments.

*

*

This conference will be, with the help of God, a happy augury for the century which is about to open. It will gather together in a powerful unit the efforts of all the powers which are sincerely desirous of making triumphant the conception of a universal peace. It will, at the same time, strengthen their mutual harmony by a

and the well-being of nations." and right, upon which rest the security of states common consideration of the principle of equity 第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 <u>∧</u>

could not be greatly decreased by an agreement subject which might well engage the attention of the use of force for the collection of ordinary among the Powers to observe some limitations upon the Conference is whether the probabilities of war opinion of the United States Government one other the reduction of limitation of armaments." In the Conference as one of the subjects of consideration, itself the liberty to propose to the Second Peace therefore, feels it to be its duty to reserve for present. a more deeply interested nation might hesitate to subject enables a nation to make suggestions which out that the very absence of especial interest in a parative security enjoyed by the United States points after alluding to the exceptional position of comof the Czar in calling the Peace Conference, and Drago Doctrine). public debts arising out of contracts. The note thus emphasizes the original intention "The Government of the United States, (The so-called

question for other reasons. Korea, Panama and Abyssinia were out of the on adhesion of South American Republics, and that to sign proposed Protocol would only have influence stated that the refusal of the Japanese Government

八三 明治三式年二月三六日 林外務大臣宛(電報) 仏国駐劄栗野大使ヨリ

第二回萬国平和会議ニ関スル露国政府ノ提案並 -右ニ対スル仏国政府ノ回答振報告ノ件

十一月二十七日後二、〇〇 本巴 省里 着発

林外務大臣 在仏 栗 野 大

使

青木宛貴電第一〇六号ニ関シ政務局長ノ語ル処左ノ通 第九七号

一層拡張サレ居ルヲ以テ仏国ハ之ヲ土台トシテ論議研

一、露国ノ「ぷろぐらむ」ハ前会議ノ決議ヨリモ其範囲

究スルコトニ同意シタリ目下ノ処該「ぷろぐらむ」ニ

附加若シクハ削除ヲ試ム可キ余地ヲ認メズ

二、「ぷろとこる」 ニ付テモ 仏国ハ露国 ノ提議ニ同意シ 第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 八三

八四

帝国政府モ米国々務卿

ノ所見

ノ 如ク 欧州諸国カ真面目

=

貴電第一〇〇号ニ関シ

RUSSO-JAPANESE CORRESPONDENCE. 一四二

- June in St. the Russian Minister for participate in the Second Peace Conference. Japanese Government the invitation for Korea to Motono that Russia has decided to address to the Petersburg, probably in early or mid-June, , 1906. At an interview which took place Foreign Affairs told Μ
- June 13, 1906. in Tokio saying in reply to his verbal inquiry, that ference. would be implied by representation at said Conthe rights or to fulfill any of the obligations which tion Korea is unable to claim for herself any of Korea, as in consequence of her international posithe Japanese Government decline the invitation for Affairs sent a verbal note to the Russian Minister The Japanese Minister for Foreign
- October entirely the programme proposed that majority of interested Powers have adopted for early reply as regards programme and saying the Japanese Minister for Foreign Affairs urging The Russian Minister in Tokio addressed a note to , 1906. (Before the 16th of October.) by Russia. He

外ニ無之様思ハルト タリ尤モ「あどみつしよん」ヲ与フ可キハ南米諸国以

「るのらる」 博士ノ内話:依レバ 「あどみつしよん」:不 立ツコトアルヤモ計ラレズト憂慮シ此ノ如キハ伊国ガ認容 同法王ガ将来ニ於テ伊国ニ対シ仲裁裁判人タルベキ位置よ 同意ナリシハ英国ニ非ズシテ独リ伊国ノミナリシト云フ蓋 シ伊国ハ羅馬法王ニ於テ調印国中ニ入ルヲ許サル、トキハ スルコト能ハザルヲ以テナリ 1

十一月三十日後一時三五分 第一二六号 八四 在米 青木大使 第二回萬国平和会議ニ軍備制限問題ヲ議題トナ スコトニ関スル帝国政府ノ意向申入方訓令ノ件 明治三式年二月三日 附 記 十一月廿九日準備委員会決議 米国駐劄青木大使宛(電報)林外務大臣ヨリ 大 臣

一四三

日上ヲ以テルート氏へ答ヘラレタシ 題ヲ平和会議ノ議題ト為スコトニハ毫モ異存ナキニ付其旨 軍備縮少又ハ制限問題ヲ考量スベシトハ思考セサルモ同問 第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 八五

機密

牙ニ開催ノ議ハ既ニ昨年十一月十三日ヲ以テ在本邦仏国公

露国皇帝陛下ノ発意ヲ以テ第二回萬国平

和会議ヲ和蘭国海

第二回萬国平和会議ニ関ス

N 件

> 四 四

丽 記

準備委員会決議

テハ帝国政府ニ於テ異議ヲ申立ザ 「軍備制限問題 ヲ 第二平和会議 2 ルヲ適当ト認ム 議題ト ナスコト L Ξ 関 シ

案、

公使ヨリ第二回平和会議開催ノ時期、会議ニ提出スベキ議 同ノ意ヲ通告致置候処其後本年五月九日ニ至リ在本邦露国 使ヨリ帝国政府ニ通牒有之当時右ニ対シ帝国政府ハ大体賛

並ニ国際紛争平和的処理ニ関スル千八百九十九年條約

加盟ノ方法ニ付三通ノ公文ヲ送附シ来リ候然ルニ右国際紛

三十九年十一月廿九日議決

都筑、秋山、(欄外附記) 大井、 山川、 倉知、 文 長岡、 安達諸氏出席

和会議ニ参同セサリシ諸国ニシテ第二回平和会議ニ招請セ 争平和的処理ニ関スル條約加盟ノ方法ナルモノハ第一回平

ラレタル節単ニ千八百九十九年ノ條約ニ加盟スル

事ヲ和蘭

八五 実取調ノ儀訓令ノ 露国政府ニ於テ同会議ニ韓国招請風説ニ 第二回萬国平和会議開催ニ関スル経過通知並ニ 明治三九年三月三日 件 韓林 国外 国駐劄長谷川 統監代理宛 関シ事

方法ヲ採用スル時ハ韓国トノ関係ニ於テ面倒ヲ惹起ス虞ナ

モノト看做スベシトノ事ニ有之候処若シ右ノ如キ簡単ナル 国政府ニ通告スルトキハ右諸国ハ直ニ該條約ニ加盟シタル

フ キ

コト故理論上面倒ヲ生ズベキ筈モ無之候得共好ンテ権謀 ニアラズ素ヨリ韓国ノ外交事務ハ総テ日本ニ於テ之ヲ行

機密送第七九号

在韓

長谷川統監代理

林

外

務

大

臣

條約ニ加盟スル諸国ハ加盟後周旋及居中調停ニ関シ特別

1

ト存候ニ付本年六月廿五日付ヲ以テ露国公使ニ対シ新ニ該 ヲ弄スル露国ニ対シテハ十分ノ警戒ヲ加フルコト必要ナリ

十二月三日付

蘭国政府ニ対スル通知ニ拠リ直ニ該條約ニ加盟シ得ルノ議

地位ヲ有スルニ至ルノミナラズ仲裁々判官指定ノ権ヲモ享

ナリ国際上重大ナル関係ヲ生スル次第ニ付単

Ξ

朩

去月十七日着電ノ青木在米大使ヨリノ電報ニ拠レバ同大

有スル事ト

テ右ニ対スル回答ヲ本大臣ニ送致シ其中前顕本大臣ノ異議

第一回平和会議ニ参与セスシテ第二回会議ニ招請セラレ

在本邦露国公使ハ本国政府 ハ同意シ難キ旨回答致置候

2

命ニ依リ去ル十月九日付ヲ以

以外ニ於テ第二回平和会議ニ招請セラルベキハ南米諸共和

本大臣ヨリ去月十日付ヲ以テ第一回会議ニ参列シタル諸 ニ招請セサル様ニ相見へ候得共尙意義明瞭ヲ欠キ居候ニ付

围

八六

明治三元年二月七日

林米 外国

務駐

場大臣宛 監約青木大使

я Ŋ

絶シ韓国

5

第

(三章

平和会議ノ議題及時期、

各国ノ準備

八六

未ダ回答セサル部類ノ内ニアリトノ事ニ有之尙

露国ガ第二回平和会議ニ招請ンタル諸国中「パナマ」ハ拒 伊国外務次官カ表ヲ示シ同代理公使ニ語リタル処ニ拠レ 本大臣及露国公使間ノ往復ハ前記ノ通リニ有之候処先是去 テハ帝国政府ハ欣然前顕異議ヲ撤回スヘキ旨説明致置候 国ノミニ限リ後日変更セラル、事ナキ旨ノ保證ヲ得ルニ於

十月廿四日付在伊国日下部臨時代理公使ノ電報ヲ見ルニ

ゝ

附屬書一

右談話要領(一)(二)

ドラゴ

ー ド クトリンニ

関ス

ル

「スコツト」 氏論説

一四五

スコトニ関シ米国務長官ト

ノ談話要領報告ノ件

第二回萬国平和会議ニ軍備制限問題ヲ議題トナ

他ノ理由ニ拠リ問題外ナリトノ言明有之韓国ハ第二回会議

ニシテ韓国、「パナマ」及ヒ「アビシニア」 等諸国ハ既ニ

トスル南米諸共和国ノ加盟ニノミ影響ヲ及ボスベキモ

1

得共前顕伊国及米国へノ通知へ毫モ疑ヲ容ル

、余地無之候

相成候様可

敬具

然御取計相成度致希望候右本件成行説明旁申進候 ニ付閣下ニ於テ相当ノ手段ヲ以テ右事実御確メ 韓国政府へ案内ヲ発シタリトハ容易ニ受取リ難キ次第ニ候 |ダル書翰ノ趣トハ相違致居候蓋シ露国ガ我邦ニ秘シ内密ニ シタルモノノ由ニ有之前記在本邦露国公使ガ本大臣ニ送リ ビシニア」及ヒ韓国ニ対シ第二回平和会議参列ノ案内ヲ発 付在米露国大使書翰ノ附表ニ拠レバ露国ハ 「パナマ」「ア 使ニ於テ米国国務卿ヨリ秘密ニ借受ケタル本年四月十二日

 $\boldsymbol{\mathcal{V}}$ ハ

第三章 平和会谈,议题及时期、各国ノ準備 八六	(附屬書一) ad 第二回萬国平和会議ニ於ケル軍備制限問題ニ関スル米国務長官ト青木大使トノ会談要領 fe (一) (一) On November 10th the Japanese Minister for Foreign th Affairs answered the note of the Russian Minister in th Tokio on the subject of the proposed Second Peace in Conference. The reply of the Imperial Government an is in the following sense. It	右ノ如ク米国政府へ軍備縮少ノ議ヲ提議スト云フモ以別信 たノ如ク米国政府へ軍備縮少ノ議ヲ提議スト云フモ以別信 た正義」ト題スル諸項ニ於テ或ル場合ニ戦争へ雷ニ正当ナ ルノミナラス名誉ヲ尊重スル国民ノ当サニ辞スへカラサル 所ナリト云と吾人ノ応サニ努ムへキ所へ光栄アル平和、正 所ナリト云と吾人ノ応サニ努ムへキ所へ光栄アル平和、正 明治三十九年十二月七日 在米 特命全権大使子爵 青 木 周 蔵(印) 4 外務大臣子爵 林 董慶	第二萬国平和会議開催ノ儀ニ関シ属次国務長官ト会談シク の 加顕末、客月十九日付機密公第二〇号信ヲ以テ及報告置候 市国政府モ国務長官所見ノ如ク欧洲諸国カ真面目ニ軍備 縮少又、制限問題ヲ考量ス、シトハ思料セサルモ同問題 ア平和会議ノ能題トナス事、毫モ異存ナキニ付云来 ラ平和会議ノ能題トナス事、毫モ異存ナキニ付云来 夏電第一二六号回答ニ接シ閲悉致候是ヨリ先キ第二平和会 貴電第一二六号回答ニ接シ閲悉致候是ヨリ先キ第二平和会 電第一二一号ト貴電第一二六号トノ趣意ヲ示ス為メ露国ニ対シ十一月十日貴大 国々務長官ニ於テ、襲三公妻ニ〇号ヲ以テ報告セシ如 テ之ヲ陳述シクルニ該意ヲ示ス為メ露国ニ対シ十一月十日貴大 百二一号ト貴電第一二六号トノ趣意ヲ宗合シテ別紙甲 テンヲルニが完下リ本月六日国務長官ニ面会之節ロ頭ニ テンヲホルニア、 第二二号ト 第二二号 第二二 第二二
一四七	adhesion of States not represented at the First Con- ference. With reference to the programme of the Conference as proposed by Russia in the note of May 4, 1906 of the Russian Minister in Tokio, the Japanese Govern- ment accepts the same in principle as the basis of discussion. The proposed programme includes many important subjects on which widely divergent views are entertained and on which practice greatly varies. It is the sincere hope of the Japanese Government	rence to the subject of the propos Protocol among the Signatory J rention of the Hague for the Pe of International Differences, the ent understands from the note of t that the South American Republic that the South American Republic tes which Russia intends to inv ace Conference besides the Powers ed at the First Peace Conference. understanding that the invitatio Conference are to be so limited th ent withdraws its objection and s of the proposed Protocol relatin	其意ニ任 セ之ヲ 交付致置候然 ルニ其後国務省ニ於 テハ之 其意ニ任 セ之ヲ 交付致置候然 ルニ其後国務省ニ於 テハ之 其意ニ任 セ之ヲ 交付致置候然 ルニ其後国務省ニ於 テハ之 非意ニ任 セ之ヲ 交付致置候然 ルニ其後国務省ニ於 テハー ない 「スコツト」 氏ノ論 説ハ御参考ノ価値 モ可有之ト テゴー、ドクトリン」ニ関シ 去十月発刊ノ北米評論ニ男 にのの本使 に 常知 一百号末段 「欧洲諸国カ真面目ニ軍備縮少又ハ 将又前顕貴電ニ依 レハ 「欧洲諸国カ真面目ニ軍備縮少又ハ 将又前顕貴電ニ依 レハ 「欧洲諸国カ真面目ニ軍備縮少又ハ 将又前顕貴電ニ依 レハ 「欧洲諸国カ真面目ニ軍備縮少又ハ が キント」 云 へ シトハ思考 セ ザル」 云 々 か 当 ス ペ シト 小 思 考 セ ザ ル 」 云 々 か ト う 二 の 号 中 ニ モ 及 報告 で が第 ニ ハ 無 之 候 二 付 み 前 か こ の そ に て 市 引 版 二 の 子 本 で か か う 二 の 子 市 部 供 貴 覧 候 が 第 ニ ハ 無 之 候 二 付 み 前 か こ の か 本 の か 本 の か た っ か か う 国 か 長 っ 新 か 言 見 う 述 へ ク ル と (1) し い て い か が 弟 に か か か こ の か 本 の か た っ か か う か れ か う か か う か ま か か い こ 本 か か 当 か か か か か か か か か か か か か か か か

第三章 平和会議/議題改時期、各国/準備 <六 that all conflicting issues may be freely discussed and satisfactory solution arrived at. Nevertheless the Imperial Government cannot dispel apprehension that such discussion might in some cases take undesirable direction. In order, therefore, to provide for such eventual possibilities the Japanese Government reserves the right to abstain or withdraw from any discussion not likely to lead to useful results.

appropriate for the examination and deliberation of Conference, such subjects as appear to them to be reasonable time serves the right to suggest hereafter but within a of international understanding on such subjects, re-The Japanese Government, believing in the efficacy correlatively, the duties and rights of belligerents. relating to the rights and duties of neutrals and example of such subjects would be the questions priately be included in the programme. One important ated in the Russian programme the Conference. become prominent of late years might very approbelieves that some questions which are not enumer-မှု the other in advance hand, the Japanese Government of the meeting of the but which have

program of the Conference as proposed by Russia, but reserves the right to abstain or withdraw from any discussion not likely to lead to useful results. The Japanese Government also reserves the right to suggest hereafter, but within a reasonable time in advance of the meeting of the Conference, such subjects as appear to it to be appropriate for examination and deliberation by the Conference.

The memorandum states, in addition, that the Japanese Government has no objection to the proposal of the United States Government to submit to the deliberations of the Conference the question of the reduction or limitation of armament.

(附屬書二)

氏ノ論説通報ノ件(ドラゴー・ドクトリン)ニ関スル「スコット」国債 ノ徴 収上ニ於 ケル債 主国ノ兵力使用 制限

INTERNATIONAL LAW AND THE DRAGO DOCTRINE.

BY GEORGE WINFIELD SCOTT, LL.B., PH.D., CARNEGIE INSTITUTION, WASHINGTON.

第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 八六

1回べ The above is the resume of the reply of the Japa-

nese Government to the Russian note. The Japanese Government has no objection to the proposal of the United States Government to submit to the deliberations of the forthcoming Conference the question of the reduction or limitation of armament.

(1) DEPARTMENT OF STATE

Washington.

Memorandum.

December 12, 1906.

On the 6th instant the Japanese Ambassador handed to the Secretary of State a memorandum giving the resume of the answer made by the Japanese Government on the 10th ultimo to the note of the Russian Minister in Tokyo on the subject of the proposed Second Peace Conference at The Hague.

The Japanese Government signifies its approval of the proposed protocol relating to the adhesion of states not represented at the First Conference; and accepts in principle as the basis of discussion the

On July 21st, the representatives of twenty-one American States convened at Rio de Janeiro for the third session of the International Conference of American States.

lasted from October 22nd, 1901, to January 22nd, of the Republics; third, a treaty for the arbitration by ten delegations and has since been ratified by six states invited to the Hague Conference); second, a co and the United States were the only American Convention of 1899 (it will be remembered that Mexidisputes: First, a protocol to adhere to the Hague arbitration and the peaceful settlement of international important agreements were formulated relative to 1902-just three months. At that Conference, three of "all claims for pecuniary loss or damage," which treaty of compulsory arbitration, which was signed 24th, 1905. five of the American states. It went into force March for five years from the date it sould be ratified by the United States. was afterwards ratified by six of the states, including The last Conference was held in Mexico City, and This treaty was to be operative

At the recent Conference at Rio de Janeiro, only

第三章 平和会議/議題及時期 各国/準備 八六 one new question relative to the modes for settling international disputes was scheduled for discussion. It read:

"A resolution recommending that the second Peace Conference at The Hague be requested to consider whether and, if at all, to what extent the use of force for the collection of public debts is admissible."

This question may be said to have had its origin in the war which Great Britain, Germany and Italy made against Venezuela, in 1902, to force the acknowledgement and payment of the pecuniary claims which their respective subjects held against Venezuela.

At that time, Dr. Luis Drago, Minister of Foreign Relations of the Argentine Republic, addressed a communication to the United States relative to the forcible collection by a foreign state of the public debt owned by its subjects. Dr. Drago seems to have expressed no douths about the legal right of creditor states to force the payment of those pecuniary claims which have their origin in the ownership of the bonds of a debtor state. He merely sought to have the United States adopt, as supplementary to its Monroe Doctrine policy, a further policy to the effect

requires subjects to exhaust the judicial remedies of the debtor-state before their state interposes to present their claims diplomatically. It was urged by Señor Calvo, for many years the distinguished Minister of the Argentine Republic at Paris, that this rule should be observed by the first-class Powers in their transactions with the Latin-American states.

consideration at Rio de Janeiro involved the submission to the next Hague Conference of a question of law, to which, it is respectfully submitted, there can

accorded the right to determine for itself when its considers itself aggrieved rights have been invaded; that every state authority; that, in consequence, to every developed no formal, superior judicial or administrative are afforded to another; that these rules have, as yet, which regulate their relations are supposed to afford are in legal theory equally independent; that the rules be but one answer. remedies to secure redress; that the use of force or in the given case it has exhausted all the peaceful decide the redress which it shall exact, and whether Law and Practice,-When it is recollected that states one the same general rights and obligations that enjoys the sole right to state is which

> ц Ц Ц

"that the public debt (of an American state) cannot occasion armed intervention, nor in any wise the actual occupation of the territory of American nations, by an European power."

lishing the yearnings, evidenced by that expression, might be feared, under the guise of "financial interventions," considerable European expression in favor of estabcountries on means the suppression of the Governments of the tion to make it effective; that territorial occupation collection of loans by force implies territorial occupasuddenly stimulated and gratified. Dr. Drago called attention to the fact that "the colonies which it is imposed"; that there was 'n South America; and that, he

Without commenting on the grounds, or lack of grounds, for such anxiety or on the wisdom of the proposal, attention is called to the difference between the proposition originally urged by Dr. Drago and the question formulated for discussion at Rio de Janeiro. Señor Drago proposed a question of policy for the Pan-American states.* The resolution under

*The Calvo Doctrine has to do with the principle of law, observed between the first-class Powers, which

reputable existence, and to protect themselves from states, like individuals, are entitled to maintain a extent, in law, an injury to the particular state; that and property of foreign subjects within its jurisdiction a consequence of this, every injury to the person persons and properties within its jurisdiction; that, as may settle their differences; that every state is, in itself both the conditions under which it is justified a matter of legal right, each state determines for tion of public debts is admissible," must be that, as at all, to what extent the use of force for the collocthat the answer to the question, "whether and, if rights-when these facts are recollected, it would seem to guard jealously every invasion of their international and property of their subjects that they are compelled intimately bound up in the maintenance of the persons reputation, their economic and social welfare, are so debilitation and destruction, that their dignity and that an injury to the subject of a state may be legally ascribed to the act of the state itself; legal theory, accorded complete sovereignty over the in using force, and the extent to which it shall go in war is a recognized legal remedy by which states is to that

第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備

八六

第三章 平和会議/議題及時期、各国/準備 八六 subjects by another state.

States have, from time to time, and generally, declined, for reasons of domestic expediency, to exercise their legal right to collect the public bonds of foreign states due their subjects, but they have never admitted that they did not have the right to do so.

It is the general practice of states in these matters to afford to their subjects only their unofficial good offices. They have desisted from giving further help: sometimes to encourage their subjects to invest their capital at home or in the colonies, sometimes because it was considered incompatible with the dignity of the state to allow itself to become a debt-collection agency for unprincipled speculators, sometimes for fear their motives might be misunderstood by sister states, and unforeseen international complications thereby raised.

But, as pointed out in the oft-cited circular of Lord Palmerston in 1848 to the British representatives in foreign states, "it might happen that the loss occasioned to British subjects by the nonpayment of interest upon loans made by them to foreign Govern-

doubted right to decide for themselves the fact whether they have sustained grievances, and to resort to war with Mexico for the redress thereof, and have a right, also, to levy the war severally or jointly."

Further, it should be noted that the International Arbitration Tribunals, which have held that they had no jurisdiction to receive and decide bond claims "in the absence of express language to that effect" in the treaty establishing the Tribunal, have expressed no doubt whatever as to the legal right of a state to press such claims for payment by any means which its own domestic and foreign policy might dictate. Such, for example, was the opinion of Sir Frederick Bruce, who acted as umpire in the arbitral settlement between the United States and Colombia under the Convention of February 10th, 1864.

It can probably be stated without fear of contradiction that no state has ever resorted to force to collect from another state the public debt due to its subjects, where the acknowlegement and payment of the debt was the sole subject of difference between them. Nations are not likely to make war for such a cause 第三章 平和会議/議題及時期, 各国/準備 八六

一五二

ments might become so great that it would be too high a price for the nation to pay.....and in such a state of things it might become the duty of the British Government to make these matters the subject of diplomatic negotiations."

The year before, in 1847, Lord Palmerston had taken occasion in Parliament to indicate the right of the British Government to make war against Spain for the recovery of the public debts due Brtiish subjects; and, in connection therewith, he stated: This is a question of expediency, and not a question of power; therefore, let no foreign country which has done wrong to British subjects deceive itself by a false impression either that the British nation or the British Parliament will forever remain patient under the wrong."

In declining, in December, 1861, to participate in the concerted action of Great Britain, France and Spain to force Mexico to settle the claims, including public debls, due their respective subjects, Mr. Seward, as Secretary of State, said: "The President does not feel himself at liberty to question, and he does not question, that the sovereigns represented have un-

alone. One day's war would cost more than the whole debt due.

called. of states as of individuals are not accurately compreof 1861 by France, Great Britain and Spain in Mexico, selfish reasons to which attention has already been tion toward debtor states, and this from the purely rule, creditor states have shown a considerate disposihended, it can be safely asserted that, as a general the real ones. However that may be, for the motives that the ostensible reasons for intervening were not civilized justice. In both cases, it has been alleged serious injuries through violence and the denial of at the hands of the delinquent states, repeated and the subjects of the intervening Powers had suffered, Britain and Italy in Venezuela. and the intervention of 1902 by sole cause for resorting to force, are the intervention ment of the public debt Perhaps the instances in which the deferred payhas been most nearly the In both instances, Germany, Great

Where the finances of states have become utterly deranged from various causes—such as the ravages of civil and foreign war, a corrupt, extravagant and

第三章 平和会議、議題及時期、各国、準備 八六 overmanned financial servise, conducted without proper means of accounting—it has frequently happened that the creditor states have been able, through diplomatic negotiation and pressure, to take over temporarily the administration of the finances of the county. This is what happened in Egypt in 1879, in Greece in 1898, and in San Domingo in 1904.

though it seemed to be admitted that this objection yet it was applicable to them merely because of the embraced within the description "all claims." And, been intended by the High Contracting Parties to be diplomatically presented and could not, therefore, have diction on the ground that the claims has not exception, the Tribunals have declined to take jurisdecide "all claims" against either state. tration Tribunal established by treaty to counsel of a creditor state to an International Arbidiplomatic negotiation, have of bonds, without having been the subject of prior special policy of would not be applicable to other than bond claims, narily pursued in these cases. In some instances claims, arising from non-payment non-interposition which states ordibeen presented by hear and With one been the

upon to decide whether the three blockading Powers had exhausted all pacific methods in their dispute with Venezuela, in order to prevent the employment of force"; in fact, it considered itself "absolutely incompetent to give a decision as to the character or nature of the military operations."

in force between the parties, not to any "obligation" relates to any "obligation" which might be subsisto conclude" at any time "new agreements, general arbitrate, the Signatory Powers should have "the right reservation was made that, "independently of existing to arbitrate imposed by The Hague Convention-beting under arbitration treaties that were at the time to arbitrate. The phrase "extending the obligation" or special, with a view of extending the obligation" general or special treaties, imposing the obligation" to language of Article XIX of that Convention, in which The Hague Convention in international law by the down by the Conference to make arbitration in any way obligatory were turned cause, unfortunately, there was none. Some have been misled as to the significance of All proposals

第三章 平和会談/ 議題及時期、各国/準備 八六

一五四

Effect of Arbitration Treaties,—It has been thought by some that the establishment of The Hague Arbitration Tribunal affected to some extent the rules of international law, by making it incumbent upon states to arbitrate their differences and not to resort to the use of force. This is a mistake. The obligation, or rathers the lack of obligation, to arbitrate remains the same, except possibly that there is an indefinite moral obligation imposed by the civilized public opinion of the world. And even international law is made up of more determinate stuff than this!

On the belief that The Hague Arbitration Convention of 1899 had "altered international law," it was urged by the counsel for Venezuela, Mr. Wayne Mac Veagh, in the Preferential Treatment case at The Hague, that "the question as to whether or not Great Britain, Germany and Italy are entitled to preferential or separate treatment in the payment of their claims against Venezuela" required the Tribunal to decide "whether the war (waged) was justified or not," and that this was "the whole marrow of the question" submitted for decision.

The Tribunal, however, held that it "was not called

the giving of any jurisdiction to the Tribunal it set up; it merely provided an arrangement for the arbitration of international disputes, and left each state free to decide whether in a given case it would invite, of if invited, would refuse the remedy of arbitration.

national excitement and feeling, the state should decide state has reserved for its own decision, whenever a for arbitration. Under each of the other treaties, the Court. Under none of the others is any definite quesa few give a jurisdiction-only a few make arbitration view of extending the obligation" to arbitrate, only fifty-odd treaties which have been signed "with a in any wise a certain and definite jurisdiction. Of the followed The Hague Conference shows the same that it was compatible with its "vital interests," "nawhich would ordinarily be a time of more or less ular question shall be arbitrated. question of difference shall arise, whether the partiction of international dispute unconditionally segregated for one state to summon another to the Arbitral obligatory. hesitancy on the part of nations to give to arbitration The "epidemic" of arbitration treaties which has Under none of the others is it If at such time, possible

第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 八六 tional honor,""independence" or "constitution" to arbitrate, then it might extend an invitation, or accept an invitation, to arbitrate.

To sum up, the present situation in law as regards the necessity to arbitrate international disputes instead of resorting to force is in no wise different, with the minor exceptions mentioned, from what it was before The Hague Conference.

Question at the Next Hague Conference,---The question at the next Hague Conference should be, it would seem: Are the civilized states so much in favor of peace that they are willing to agree, in order to make a positive but slight start in this direction, to set apart for settlement by arbitration a portion, however small, of the matters which give rise to international disputes ?

The giving of a definite and unconditional jurisdiction to arbitration would act as an entering wedge. Gradually, this jurisdiction might be extended, as the early writs in England extended the jurisdiction of the courts. Gradually, the states might be expected to discover that their "national honor" and "vital interests" are not jeopardized by referring their differences to the arbitrament of law. Gradually, states

an ordinarily calm state of the public mind, be considered a mere lawsuit.

If, then, the civilized public opinion of the world is so much in favor of peace that it is willing to venture a slight but positive step in the direction of the reign of law in the settlement of international differences, the question arises: What are the matters which are giving rise to international disputes that can, with safety to the "vital interests," "national honor," etc., of states be unconditionally segregated for this purpose?

sitions" in the note of Dr. Drago of December, 1902, examined and the sum due ascertained. "The propoarising from money disputes incident to the collection of public ting apart for peaceful settlement, at all times, of all disputes relative to the public debts due foreigners. tration mention some of the reasons why international described by Mr. Hay as "ably set forth," incidentally force till after the alleged debts have been judicially A strong argument might be presented for the set or, at least, tribunals might be given jurisdiction for deferring loaned by subjects to foreign the right to use debts arbiover

第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 八六

一五六

claims of unprincipled speculators, supported by merely which they should maintain, to lend their great powers unbecoming the high dignity and standards of justice the states. Gradually, states would consider that it is into the merits of the debt-a procedure unknown to alleged debtor, in advance of a judicial investigation Gradually, the attachment of the property of an judicial attitude of the arbitrators which is fundabe perfected, and that confidence in the fairness and crude arbitration arrangements of the present would nals in which they have confidence. national disputes to the dicision of international tribuand the society of which they are ex parte evidence. to the collection of the often falsely exaggerated the English common law-would cease as mental to the be expected to acquire the habit of submitting reign of law would come to exist. composed, might Gradually, the between inter-

To give to the Arbitration Tribunal a definite and unconditional jurisdiction, however small to begin with, would put it beyond the legal capacity of states to confound their "national honor," etc., in a time of necessarily keen public feeling, with what would, in

states must observe a decent require states to expend vast sums of money for the any particular time. He knows that modern conditions subject to the state's being in position to pay them civil suit. the right to give or withhold the usual remedies of his money to a sovereignty which is accorded by law and interest accordingly. necessities of the borrowing state, and exacts discounts resources of the country and the probability, greater money to a foreign state always takes into account the niary claims. not applicable to other classes of international pecuadvanced for a jurisdiction of this subject, which are their credit; and that, to accomplish this, the debtor development and maintenance of their various public law, the state is the sole judge of its ability to pay at without embarrassment to its existence; and that, in without delay." or less, that the obligations contracted will be good faith in their obligations. works; that, in the long run, all states must uphold Several He is aware that all debts of a state exist cogent arguments, Thus: "The capitalist who lends his He generally takes advantage of the He knows that he is loaning it would seem, can be He knows that the husbandry and keep fulfilled

八九 一五九	和会議ノ議題及時期、各国ノ準備(八八
***************************************	在露 本野公使 林
知ラシムヘント	一月十五日 午後六時発
アラサレハ定ムル事能ハス又定マリタル上ハ直チニ本官ニ定ニテ西欧諸国ニ派遣スル筈ニ付会開期日モ同人帰国後ニ	見込問合方ノ件第二回萬国平和会議開催期ニ関スル露国政府ノ
会議ニ関シ内相談ノ為メ近日マルテンスヲ凡ソ三週間ノ豫責冒負ニモニ関シオ日外絶ノ日ニ即名モタハ奴事省ニ平利	八八 明治四年二月玉日 露国駐劄本野公使宛(電報)
月子ケアレルポポーム	
林外務大臣 本 野 公 使	
一月十七日 前八、一〇 本省着	外務大臣子爵 林 董殿�����������������������������������
ノ件	
於テ「マルテンス」ヲ欧州諸国ニ派遣ノ旨報告第二国萬国平和会請其日れ合ノ為ラ富国退所ニ	明治三十九年十二月十四日
八九 明治学年1月末日 林外務大臣宛(電報)	御承知相成度此段回答申進候 敬具シ右様ノ通知ニ接セハ直ニ本官ニ相談可致旨申出候間右様
	ト無ク又宮中ニ於テモ同様ナル旨ヲ確信スト答ヘ今後共若
サシ	キ取調へ候処未々今日迄ノ所ニテハ何等通牒ニ接シタルコ
ノ日取リヲ承知シタキニ付其向キニ就キ内密問合電報アリ	御申越ノ趣了承致候右ノ專実ノ有無ニ関シ扑参政大臣ニ就
政府ハ土地遠隔ナル為委員派遣等ノ都合上可成速カニ大凡	ルヤノ疑アル旨本月三日付機密送第七九号貴信ヲ以テ縷々
第二平和会議ハ大凡何月頃召集セラルヘキ模様ナルヤ帝国	露国政府ハ韓国政府ニ対シ其参列ヲ求ムル為案内ヲ発シタ
第二号	露国皇帝陛下ノ発意ニ係ル第二回萬国平和会議開催ニ当リ
「祝智希子貨」ナキ、「「二月十2F拾叉」	
	•
第二回漢国平和会議『韓国招請ノ事実ナキ旨回』	apulsory collection of public debts;
±.	ference at The Hague to consider the question
八七 明治学先年三月六日 リ 韓国駐劄長谷川統監代理 ヨ	commend to the Governments represented therein that they consider the point of inviting the Second Peace
	What the Conference did do was formally "to re-
	tional law which it would seem impossible to question.
GEORGE WINFIELD SCOTT.	
are giving rise to disputes between states.	-
f a small portion of	
International Arbitration will be given an unreserved	the Conference at Rio de Ianeiro did well not to adont
	loss occasior
Conference with due regard to international law,	through a breach of promise is not so direct an injury
formulated for the consideration and action of the	his property; and that the loss of one's property
the question wi	he is accepting the promise of the state in return for
and present "the question" to the next Hague Con-	the transaction of buying the bonds of a foreign state
s the United States, will	i, and who are denied civilized justice; tha
It is generally expected that some American state.	perty, while within the jurisdiction of the state, are
lated for its consideration.	of a state to foreign subjects whose person and pro-
inite but it is probably an ir	has some points of difference from the legal relation
the Conference is	local relation of the delinement delator to his meditors
一五八	第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 八七

九三 1六1	第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 九二
	二月八日 前一一、四五 東京着
	国政府ノ意向報告ノ件第二回萬国平和会議開催期日及議題ニ関スル独
態度ニハ出デザルベシト思考セラル	九三 明治毕年三月七日 林外務大臣宛(電報)
政府ハ会議ニ於テ露国政府ト同一歩調ヲ執ルト云フガ如キ	
セラレタル場合ニハ或ハ其討議ニ与ラザルニ至ルベク独乙	
対シ敢テ賛同ノ意向ヲ有セズ若シ本問題ニシテ会議ニ提出	
ル由、独乙政府ハ武装縮少(ディスアーマメント)問題ニ	り辛ン(封きう个!3)、7 ノ桂枝 うゅっ 盆お兵 / 」
ニ露国ヨリ招待ヲ発スル際其「プログラム」ノ内ニ掲載ス	筑レノ也ほヲ乍リノ、アレ莨葉トキア印架印ノ独国政床ト内打合ヲナシ会議ニ広テ両国政东カ
ラバ可成速カニ露国政府ニ通牒シ之ヲ一括ノ上次回ノ会議	トロヨステ・J「ニューン ミミュン・ゴヨスティー キマ同氏へ同会議ノ議題及右ニ対スル露国政府ノ意
独乙政府ハ同意ヲ表シ若シ列国ニ於テ討議案提出ノ意向ア	ニ決定スへ
ル「プログラム」ノ範囲内ニ留メムトノ露国ノ主義ニ対シ	ハ目下次回平和会議開 会期日ノ件ニ
由、次回会議ニ於ケル議題ハ昨年露国ヨリ列国へ回送シタ	第六号
露国提示ニ対シ独乙政府及米国政府ハ巳ニ同意ヲ表シタル	在独 井上大使 林 大 臣
同会議開会ノ期日へ来ル五月末カ六月上旬頃ニナサムトノ	二月六日後二時四五分発
貴電第六号平和会議ノ件ニ関シ探知シタル結果左ノ通	ノ協議振内値方ノ件
第一七号	ニニ 男シ 「マルテ
↓ 林外務大臣 井 上 大 使	九二 明治四十年二月六日 独国駐劄井上大使宛(電報)
	軍備縮少主義ヲ以テ有名ナル Mr. Stead 頃日来当地ニ来
	公第八号四月二日接受
外務大臣子爵 林 董殿	見発表ノ件
在填臨時代理公使 西 源 四 郎(印)	林外務大臣宛
明治四十年一月廿四日	九一 明治早年一月三西日 ヨリ 奥国駐劄西臨時代理公使
シ趣間接ニ開及候間併テ為御参考及報告候 敬具	
ノ通商條約締結後ニ於テ開会スルヲ好機トスル旨ヲ談話セ	***************************************
及候又第二平和会議開会時期ニ関シ露国大使ハ目下日露間	
露独両大使之意向モ亦外務大臣ト略同様ノ意見ニ有之趣開	リ巴里倫敦維納羅馬ヘモ巡回ノ筈ト開ク
軍備縮少問題ニ付テへ実際ニ実行シ難キ主意ヲ述タル由又	当地来着目下当国政府ト交渉中ナリ同氏へ猶
ル墺国政府ノ意見トシテハ今尙発表スル事不能旨ヲ答へ且	為メ露国政府ノ委員トシテ「マルテンス次回、高国、君会論、関ニ国ニオ会論、
政府ニ派遣シ議案及開会時期等ニ付協議中ニ付本件ニ関ス	レ欠ヨノ嶌国戸田会義=粤ン象メ虫ニ文守ト
和会議ニ関シテハ目下露国政府ヨリ「マルテン」氏ヲ列強	林大臣 井上大使
スル意見書ヲ皇帝ニ拝呈セリ右ニ付当国外務大臣ハ第二平	四日 前七、三〇 東京着
ヲ陳述シタル後当国外務大臣ニモ右之主義ヲ面述シ此ニ関	廿三日 後五、一五 伯林
ノ議案ニ追加セントシ在当国英独露仏大使ニ面会シ其希望	
ニ依ルヲ義務トスルノ主義ヲ主張シ尙ホ此ヲ第二平和会議	各二司有国卒山会義昌崔丁今ノ冬
リ軍備縮少及締盟国間ニ於ケル争議ニ於テ仲裁々判之方法	九〇 明治学年一月二三日 林卜翁た豆豆 (重長)
九 一六〇	第三章 平和会议! 說題及時期、各国ノ準備 九〇

1六1

九八 一六三	第三章 平和会议!议题及时期、各国ノ準備 九七
ノ「プログラム」ニ対シ別ニ意見ナシト又曰ク頃日「マル	and, to the other foreign Powers good and correct
蘭国外務大臣曰ク当国ハ平和会議ヲ歓迎スルモノニテ露国	Allied Powers the Government entertain old cordial,
第七号	
林外務大臣 佐藤公使	speech, in alluding to foreign affairs, he declared that the general political situation instified conviction that
二月二十一日 前八、一〇 東京着	by German Emperor in person. In the course of his
	Tokio.
第二回萬国平和会議開催朝日及議題ニ関スル壬	Tokio, 9.10 a.m., 20/2/7.
九八 明治罕年二月二十日 楙外務大臣宛(電報)	
	会演説報告ノ件ニ関スル独乙皇帝ノ議
Inouye,	九七 明治毕年三月末日 林外務大臣宛 (電報)
First La Haye Conference,	
and humanity, in conjunction with results of the	******
ther develop international law in	大使公使ニ転電スル様取計ハルヘシ
I.a. Have Peace Conference which is to be called to	同之伯=リ
nment Emperor had accepted invitation to	2
America and of t	攻且ソ此既要ヲ電報セラレタン
relations. In virtue of the initiative of the United	重要議案 ニ 関スル任国政府ノ意見等 ニ 付 テハ 今後可成詳
- 平和会議ニ対スル任国政府ノ態度及同会議ニ付セラルヘキ第二五号	La Haye, 6.35 p.m., 18,2,07. Tokio. 12.56 p.m., 19,2,07.
在米 青木大使 材 大 臣	談話ノ件
1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1	第二回萬国平和会議開催日取ニ関シ「マルテンス」
	九五 明治毕年二月大日 林外務大臣宛(電報)
東、広重5川かりま	****
第二回答詞る 口会義を引会義! 直受義を言うく	ク・アルテンス」ト当地ニなデ打合ヲナシタルヨシ
九六 明治罕年1月六日 株国註割青木大吏范 (電報)	1、1、1、1、11、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1
	会議ニ関シ獠メ協議ヲナス目的ニテ同氏ハ既ニ一週間前巴
	府ノミナラズ仏・英・墺・伊及ビ和蘭政府ヘモ次回ノ平和
Sato.	既ニ往電第七号ヲ以テ報告ノ如ク「マルテンス」ハ独乙政
after visiting Rome and Vienna.	往電第壺七号
ts to be back	第一八号
ppened during first few days of	林外務大臣 井上大使
factory, his private opinion is that Peace Conference	前四、五〇本省着
pe, which have been	
No. b. In the interview rebruary 18th, de Maruns	欧州各国歴訪ノ件 スイン語界 低い 良ンノ 才全 こえ
Tokio.	第二可萬国卒和会義捐准一周スル丁合ノ為メ
Hayashi,	九四明治平年三月八日株外務大五宛(電報)
九五 九六	第三章 平和会议ノ议题及时期、各国ノ准储 九四

-

,

	二月廿八日 後 七、二〇 本省着二月廿七日 後一〇、五〇 巴里発報告ノ件
ル由	第二回萬国平和会議「マルテンス」協議振ニ付一〇二 明治學年1月二七日 林外務大臣宛(電報)
オルベク右ハ蘭国政府ヨリ其内公然ノ案内ヲ各国ニ送附スンタルコトナキモ 只英国政府ヨリ、露国ノ提議ニ対シ何等修正ヲ提出ニ依レハ各国政府ヨリハ露国ノ提議ニ対シ何等修正ヲ提出開約4回政府ハ之ヲ賛成スルカ或ハ別ニ同様ノ提議ヲスヘンシ米国政府ハ之ヲ賛成スルカ或ハ別ニ同様ノ提議ヲスヘンシス国政府ハ之ヲ賛成スルカ或ハ別ニ同様ノ提議ヲスヘンシス国政府ハ之ヲ賛成スルカ或ハ別ニ同様ノ提議ヲスヘシシス国政府ニジタルニイ同件ニ	未夕確定セス又同会議ハ多分六月初旬開カルヘキ筈ナリニ上ルヲ希望シ居ルモ英国自ラ進テ之ヲ提議スルト否トハヘシ又軍備制限ノ件ニ関シテハ英国ハ依然本問題ノ同会議、シ右出席委員ハ未定ナリ該訓令確定次第之ヲ本官ニ内示スニ附シ其上ニテ同会出席委員ニ訓令ヲ加フルコト、ナルヘ
二十二日帰来のル趣ナリシア	同会議ノ 議案ハ目下取調委員コ於テ 調査中右済次第閣議レタリ 日英国外務大臣ニ面会セルニ同大臣ハ左ノ通リ本官ニ語ラー日英国外務大臣ニ面会セルニ同大臣ハ左ノ通リ本官ニ語ラーが 人 使 林外務大臣
第二一号 採外務大臣 栗 野 犬 使	
スル英国政府ノ意向報告ノ件第二回萬国平和会議議題並同会議開催期日ニ関 第二回萬国平和会議議題並同会議開催期日ニ関	100 明治学年二月二大日 独国駐割井上大使ヨリ換ノ件
	用セズ
提出スルノ無益ナルヲ信シ到底各国一様ニ協定シ得ヘ系ラ白上マ、三尊:丘くニ	ルコトハ追テ「マルテンス」ト意見ヲ交換セシ上取極ムル
ニ対シ絶対的反対ノ主義ヲ固守スルニヘアラサルモ其方去ル旨ヲ当国ヘ通報シタル趣ナリ又独乙政府ハ武裝滅縮問題	第六号
昨年露国ヨリ各国へ送リタル回文ノ「プログラム」ニ止ム提出スルノ意志ナキ旨ヲ回答スルト同時ニ該会議ノ議題ハ	二月廿二日 前六、三〇 東京着
縮ノ問題ヲ提出スルヤ否ヤヲ問合セクルニ右問題乙政府ハ先般露国政府ヘ外交文書ヲ以テ平和会議一七号平和会議ノ件ニ関シ尙其後探知シクル処ニ	向報告ノ件 第二回萬国平和会議議題ニ関スル任国政府ノ意 林外務大臣宛(電報) 東国
第二回号 林外務大臣 井 上 大 使	AND
三月 一 日 前八、二五 本省着二月二十八日 後二、四五 伯林発	差支ナキョラ客、量キタリテンス」ニ向ヒ来ル六月ノ初メニ海牙ニ該会議ヲ開クコト
	第三章 平和会议!议题及时期、各国!準備 九九 一

一六五

第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備

101

一次七

平和会議ニ対スル当国政府ノ態度及同会議ニ附セラルベキ 言ヲ附シ且曰ク蘭国政府ハ頃日露国ノデ、マルテンス氏ノ 認メ居ラザルベカラス唯巧ニ列強ノ間ニ介立シ能フ限リ不 重要議案ニ関スル意見等ヲ尋問セシモ御承知ノ如ク和蘭国 備ヲ為スベシト答ヘタリト拙者之ヲ謝シタル後貴訓ヲ体シ ル 案ニ変更ヲ来スカ如キコトアルベキヤヲ開込マレタルコト 附セラルベキ重要議案ニ付テハ最初ヨリ露国提案ニ同意ヲ 筈ナク外務大臣ハ拙者ニ答フルニ蘭国ハ平和会議ヲ歓迎 国ニ先テ異様ノ態度ヲ示シ若クハ特殊ノ意見ヲ発表スベキ 是レ努ムルハ当国ニ取テ策ノ上乗ナルモノナレバ決シテ各 偏不党ノ態度ヲ守リ何レノ国ノ感情ヲモ害ハサラムコトヲ ン 無之ヤト問ヒシニ無之ト答へ但若シ萬一之アル節ニハソハ リ因テ拙者ハ同大臣ニ向ヒ何レノ国カノ提議ニ由テ露国原 表シ置キタル外別ニ意見ノ述ブベキナシトノコトヲ以テセ 地ト定メラレタルハ蘭国政府ノ光栄トスル所ナリ又会議ニ ル 弾丸黒子ノ小国仮縦ヤ異見アルニモセヨ之ヲ主張シ之ヲ 丶コトニ対シ |合ニ対シ来ル六月初日ニ当海牙ニ第二回平和会議ヲ開カ ノミナラズ一度 ナラズ二度マテモ 当海牙 ヲ以 テ 会議 聊カ異存アルコトナク欣テ之ヲ迎フルノ準 1 ス

第三章 平和会議ノ議題及時期、 各国ノ準備 - 0四 好個 直 敬承即チ同日ハ幸ヒ当国外務大臣ノ面会日ニ当レルヲ以テ 成ルベク詳細ニ御報告可致且其概要ヲ電報可致旨貴訓 議ニ附セラルベキ重要ノ議案ニ関スル意見等ニ就テハ今後 使ヨリ転電ニ接シ平和会議ニ対スル当国政府ノ態度及同会 又本月二十日貴大臣ヨリ青木大使宛二十五号訓電ヲ小村大 ニ同大臣ヲ訪ヒタルニ先ツ同大臣ヨリロヲ開キ今日ハ 1 報告ヲ閣下ニ与フルヲ得ルハ欣嬉ノ至リナリトノ緒 ン趣

支ナキ限リ内示セラレンコトヲ請フ旨ヲ述ベタレトモ差向 意ヲ謝シ尚ホ此外日本国政府ノ参考ト相成ベキ事アラバ差 示アランコトヲ望マル、旨兼テヨリ本野公使ヨリ拙者(マ ヲ以テ貴国政府ニテハ略々開会期日ノ見当定マラバ速ニ内 路遠ク各般ノ準備及参会者ノ旅行ニモ多分ノ日数ヲ要スル ヲ閣下ニ内示スル所以ノモノハ貴国ハ会場ノ地ヲ距ルコ 三日間ニ開会ノ運ニ至ルベシト思考ス而シテ今殊更ラニ之 上難キモ余一個ノ私見トシテハ平和会議ハ来ル六月ノ初二 ルテンス氏自称)ニ内談アリシカ為メナリト依テ拙者其好 承知ノ筈ト存候 キ別ニ申上クヘキコトナシト告ク相別レタリ右面会ノ要点 今日迄ノ結果顔 い本月十八日付ヲ以テ閣下へ電報ニ及ヒ置キタレ ル満足ニシテ素ヨリ確然若クハ公然ト バ疾ク御 ハ ŀ 申

No. 5. any objection. The questions as to limitation of armabeen instructed by their Government to meet him. many and Spanish Ambassador in Rome? who have and said he consulted with U.S. Ambassador in Gerour representatives during his tour he answered 'no' consulted on the matter of his mission with any of present them gress as an extra programme but in what form to ment and doctrine of Drago will be placed before Conthat all Powers accepted Russian programme without Japanese delegate in Holland in June 上句 he said consultation. After expressing hope for added that if Japanese Government desire to take with him anywhere Tokio. I saw is not yet decided. I asked whether out of Petersburg he should be pleased Martens who is here on his tour ? arrival of He he of

ム

ク拙者先日ヨリ平和会議ニ対スル各国政府ノ態度ヲ審ニ ハ拙者ヲ客房ノ一隅ニ誘ヒ声ヲ潜メ告ケテ曰ク御承知ノ如

キ同

氏

カ為メ諸大国ノ首都ヲ訪ヒ当路者ノ意見ヲ叩キ試タル

力 セ

Received 1/3/7. 9 a.m. 機密第四号 ニ面会シー応ノ挨拶及社交談ニ少シク時ヲ移セシト _ の四

シ同僚外交官ヲ招待セル際拙者モ其席ニ列リマルテンス氏 公使チェリコッフ氏ハマルテンス氏紹介ノ為メ茶話会ヲ催 歴訪ノ末本月十七日当地ニ来着翌十八日ニハ当国駐劄露国 タル露国外務省参議官デ、マルテンス氏ハ伯林巴里倫敦 本件ニ付各国ノ態度ヲ問諦メムトシテ露国ヨリ 話要旨並ニ蘭国政府ノ意嚮報告ノ件 第二回平和会議ニ関ス ル件 (\rightarrow) 四月四日接受 、派遣セラ 7 ν

第二回萬国平和会議ニ対スル 明治罕年二月二大日 林蘭 外国 介務大臣宛

「マルテンス」談 y

Kusakabe.

(though he deems

to see our representative in Vienna,

一大大

it quite superfluous.)

前同件

<u>e</u>

明治罕年二月二六日

林外務大臣宛(電報) 公使ヨリ 伊国駐劄日下部臨時代理

第三章

平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備

101

0四

Rome, 28/2/7. 3.15 p.m.

Hayashi,

1 六九	第三章 平利会议ノ议题及时期、各国ノ准備 一〇六
右談話中外務大臣 ノ 来訪有之候ヲ以 テ 須臾ニシテ相辞シ	マルテンス氏曰ク敢テ露国ガ申入レタルニ非ズ其事ハ西班
式ニ就テハ未ダ決定セズ云々	ニ至レリト果シテ然ルカ
ドクトリンニ関スル問題ハ番外トシテ提出セラルベシ其形	レラレ西国政府ハ当府駐劄大使ニ訓令シテ貴官ト会見スル
デサルムマンニハ非ズリミテーションノ問題ト	表者ヲシテ貴官ト会見セシメラレ度旨
迎ヘラレクレバ右ヲ根拠トシテ討議スルコト、ナルベク而	貴官同国迄旅行スル時日無之ヲ以テ蘭伊墺ノ三首府ノ一ニ
処露国政府カ嚢ニ列国ニ提出シタル議案ハ何等ノ故障ナク	小官曰ク新聞紙ノ報道ニ由レバ露国政府ハ西国政府ニ対シ
依テ小官ハ更ニ第二回平和会議準備ノ模様ニ付相尋ネタル	之候
ベシ云々	ネテ小官ヨリ政府ニ電報セラルヽニ於テハ尤モ仕合セナリ
訓令サヘアラハ自分ハ喜ンデ維納ニ於ル我代表者ト交渉ス	電報アリ度旨小村男爵及在蘭日本代表者ニ依頼シタルガ重
ニ他処ニ於テ会見スルノ必要モナカルベシ左リ乍ラ政府ノ	月上旬ト内定セリ日本ハ遠隔ナレハ右ノ趣キヲ本国政府ニ
シ云々 然シ露都ニハ本野公使駐在セラル、次第ナレバ殊	レントスル第二回平和会議ニ談及候処氏ハ開会ノ期日ハ六
ローマハ明日出発スル筈且朝九時ヨリ午後四時半迄寸暇ナ	其旅館ニ訪問シ互ニ其久闊ヲ叙シ懇談相試タル上将ニ開カ
シメントノ 希望 アラバ 只今 ノ 処維納ニ於テスルノ外ナシ	シ候同博士ハ小官露国在勤中ノ旧知己ニ有之候ヲ以テ氏ヲ
本政府ガ露都以外ノ地ニ於テ其代表者ヲシテ小官ニ会見セ	ノ途次当ローマ府ニ来着三日程滞在ノ上維約ニ向ケ出発致
見クリ仏国ニテハ栗野氏病気トカニテ遂ニ面会セズ若シ日	博士マルテンス第二回平和会議ノ要務ヲ帯ヒ欧州諸強歴訪
タルニマルテンス氏ハ否ト返答アリ独逸ニテハ井上大使ヲ	機密第四号四月十二日接受
殊ニ氏ノ使命ノ事項ニ関シ会談セラレタル事アリヤト尋ネ	ト会見ノ件
同大使ト面談シタリ云々 小官ハ重ネテ同氏ニ我代表者ト	第二回萬国平和会議ニ関シ「マルテンス」博士
モ駐独大使ヲシテ小官ト会見スルヲ訓令シタレバ伯林ニテ	
牙政府ニ於テ「イニシアチブ」ヲ取リタルナリ又米国政府	した 月台計手に目当日 伊国駐劄日下部臨時代理公使
	仰村其翌十九日ニハ皇帝陛下及和蘭親王殿下ヨリ
大使公使ニ転電アリタシ	八日午前直チニ皇帝陛下及皇太后陛下ニ
トナキャ分リ得ル丈御探知ノ上電報アリタシ右在仏墺伊各	· マルテンス
ル事項ノ外任国政府トノ間ニ尙他ノ事項ヲモ協議シタルコ	林 董骏
ル趣ノ伽	在蘭(特命全権公使)佐 藤 愛 麿(印)
マルテンスハ欧洲各国ヲ歴訪シ平和会議ニ関スル各国政府	明治四十年二月二十八日
	下存候右為報告此段得貴意候 敵具
	り即日第七号ヲ以テ其大要電報ニ及ビ置候間疾ク :
林大臣	コトヲ青ヒタレニト海大豆へとヲ若セレヲリ
三月二日前一一、〇〇	来スコトアラバ御差支無之艮リ帝国政府ノ参考乞ニ御勺示問子ニヨアドラッ第一背目延昇ノ寛臣未ノノ滝見ニ豕夏ラ
転電方訓令ノ件	写一 量国女
ンス」トノ協議内容探報方並『右在仏墺伊各大第二回真臣刊禾仝龍』長ゞ在目政兄二・ドバラ	▶ ▶ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■
葛国△ 口///義=周ン壬国文子ト コマレ 石区2位	以テ更ラニ外務大臣ニ向ヒ左
一〇五 明治四年三月二日 三次にた 本の発ノ日 本の発ノ日 ・ 、 に、 、 にないた ・ 村大使宛 (電報)	レンコトヲ請求スベシトノ風聞ヲ耳ニセシコ
务大王王	国ハ次回ノ平和会議ニ向テ蘭国
	シト附言セリ
	ヲ以テ在東京蘭国公使ニ電報シテ以テ貴国ニ案内ヲ通スヘ
ト 低語 スルモノアリタルヤニ 聞及	担任ニ屬シ貴国ハ遠隔ノ地
御陪食仰付ケラル、等優遇至ラザル所ナク右へ殆ド異例	国政府ニ向テ
一六八	第三章 平和会议!让战退及时期,各国!准備 一〇五

141 011	第三章 平和会议ノ议题及时期、各国ノ準備 一〇九
三月六日 後四、五〇 本 省 着三月五日 後八、四〇 マドリッド発答ノ件	向回答ノ件 第二回萬国平和会議議題ニ対スル任国政府ノ意 一〇九 明治罕年至月3日 林外務大臣宛(電報)
林外務大臣宛(電報) 使ヨリ 西国駐劄市来臨時代理	
~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~	リ斯ハ吾人ガ海牙会議ニ於テ為サムト欲スル所ナリト
臨ミ各国ト之ヲ研究スヘシト 今日 ≡ リゼニズフル仏国ノ 憲長ヲ確言フル削ィフ 其場合 =	キ誤謬ナカラシメムニハ思フコトヲ有ノ儘ニ明言スルニ在ハ将来ニ於ケル失望ハ益々大ナルモノタルベシ故ニ此ノ如
- いっけい / 四, は山, 西方 / 10、ルヘシ英国ガ提議スヘキ兵力制限ノ問題カ如シズ他国ョリノ提議ニ付テモ無論研	ノ如キ空想ヲ世人ニ懐カシムルコト益々深カラシムルトキ和ノ基礎ヲ確立スル如キハ到底希待スベカラズ而モ若シ斯
ハ何処迄モ露国ノ提案ヲ基トシテ論議セントスシメタルニ前記拙電第九七号ノ趣旨ヲ繰返スノ	ニ人道ニ貢献スルコト頗ル大カラズ戦時ニ関スル規則類ノ
ノ次第モ有之タルニヨリ本日更ニ政務局次長ニ就キ間接ニホ御承知ノコト、存ス其後小村大使宛貴電第一〇号御訓令	力制限等ニ関スル大問題ヲモ議決スル如キ空想ヲ世人ニ懐会合シテ 或程度迄世 ノ利益ヲ合議 スルコトニ止 メシメ 兵
海牙会議ニ関スル仏国ノ意向ハ昨年拙電第九七号ニ依リ略第二七号	ナルコトヲ列挙訤撃シ終ニ結論シテ曰ク海牙会議ハ学者ガルベキ乎ト論ジ其他英国主唱 ノ 議論ハー々自家撞着 ノ 説
務大臣	確認スル今日ニ於テ之ヲ論議スルモ果シテ如何ナル結果ア人ガ兵力制限ハ到底各国多数ノ同意ヲ得ルコト能ハザルヲ
三月五日後四、五〇本省着三月四日後八、五〇巴里発	ナスト雖モ又此儀ニ与カルコトニハ同意スベシ乍
ニ登ルベシ独仏墺伊露五国ノ如キ右ノ議論ヲ以テ不要ノコトナシト説キ尤モ兵力制限ハ英国ノ望ム如ク海牙会議ノ議	三月三日 前五、二〇 本省着
許シ能ハザルハー	件
説ヲ述ベタリ「タン」記者ハ兵力制限ハ天下	国政府
シ三月三日「タン」所聞へ辻説=於テ之ヲ狡攣シ之=対シ海牙会議=関連シテ発表シタル英国主唱ノ兵力制限説=対第二三号	一〇七 明治罕年三月三日 林外務大臣宛(電報)
林外務大臣 栗 野 大 使	
三月五日 後二、一五 東京着	外務大臣子爵 林 董殿
制限案ニ対スル仏国新聞論調報告ノ件第二国直国平系会調『勇国政所』!排出ノ軍領	二月二日
二日記目と口ミ後:正目女子「1是日」	右不取敢及具報置候 敬具
一〇八 明治学年三月3日 林下菊大五花(電歌)	ルモノ、如ク何等実際ノ効果ヲ来ス者ニ非ズト断言致シ候
	チヴェノスタ侯等ハ平和
11 シラ 古聖台 ~ 名官会 一五支 ニラー 月、 江 !	定シ居ラズト申居り候嘗テ外傍大豆タリシ突爵プリネッチ『浄光』走2一「哥"値、ナタ苑プ呂目長っ翌重っヲタ充
頁協	上、、、系、は、よいなご」 サイルとしょう
ニ関シ平和会議ノ 期日ト軍備制限問題ノ	
第一八号	候伊国ノ態度ニ関シテハ未タ確報申上グル迄ニ至ラズ候へ
林外務大臣 小村大 使	去リ候同夕露国大使館ニ於テ晩餐夜会有之小生モ之ニ列シ
	第三章 平和会议ノ议题及时期、各国ノ準備 一〇七

1 4 11	第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 一一二
機密四月十五日接受	
伊各国使臣トノ会談要領報告ノ件第二回萬国平和会議マルテンス博士欧州巡回駐	
林外務大臣宛な使ヨリア帝臨時代	外務大臣子爵 林 董殿
主リーニ お話手た	在西 臨時代理公使 市 来 政 方(印)
******	明治四十年三月五日
議シタルコトナキモノト認ム	右申進候 敬具
関スル重要事項ノ外当国政府トノ間ニ尚ホ他ノ事項ヲモ協	之候
キ内密ニ探知セシ所ニ依レバ同人ハ平和会議日付及議案ニ	十五号ノ御訓令ニ従ヒ本日概要不取敢電報致置候次第ニ有
帝ニ内謁見ス依テ同人及露国大使並ニ当国外務当局者ニ就	石 ハ 在倫敦小村大使経由 ノ 在華盛頓青木大使宛貴電第二
「マルテンス」 三月二日当地ニ著 シ外務大臣ト会見シ猶皇	事
経英貴電第一〇号ニ関シ	三、平和会議ニ南米諸国ノ参会ヲ可成丈容易ナラシムル
第二二号	リテ主張セラレタル主義ナリ
林外務大臣 西代 理 公 使	「ドン、ルイス、フェルナンデス、 ドラゴ」 氏ニ依
三月六日 前六、二〇 東京着三月五日 後一、〇〇 維納発	因ニ云フ本案ハ曾テ亜爾 然丁国 ノ外 務 大臣タリシト
講内容探報ノ件	
第二回萬国平和会議ニ関スル「マルテンス」協	或ル主義ヲ設クルノ方法アリヤ否ヤヲ議題トスル
『シーム』)』 林外務大臣宛(電報	11、他国ニ対スル債権行使ニ関シ武力ヲ使用スル上ニ於
一一二 明治早年三月五日 東国航衛西代理公使ヨリ	一、軍備制限ヲ議案ニ附セラレン事ヲ賛成スル事
題ニ付セラレンコトヲ発義セリト	<b>変及司会議ニ府セラルベキ議案ニ関スル司国政府ノ意見ヲ</b>
又西班牙政府へ別ニ同国政府ノ意見トシテ左ノ三ヵ條ヲ議	昨日外務次官へ面会致シ平和会議ニ関スル西班牙政府ノ態
ル事	機密第三号四月十五日接受
四、中立国ノ権利義務ニ関スル海戦ノ法規慣例ヲ編纂ス	手交セル覚書要旨報告ノ件
完備セシムル事	度並会議議題ニ関シ同国政府「マルテンス」ニ
ネヴァ	第二回萬国平和会議開催ニ対スル西国政府ノ熊
完備セシムル事	-1-1-1
戦ノ法規	一月 明治羿手言見 使ヨリ 西国駐劄市来臨時代理公
條約ヲ修正スル事	
一、仲裁々判及ビ国際審査委員ニ関スル千八百九十九年	
ニ賛同スルコト	四、平和会議ニ南米諸国ノ参会ヲ可成容易ナラシムルコト
西班牙政府ハ露国政府ヨリ建議シタル左ノ四ヵ條ノ議題	チ「ドラゴ主義」ナリ
ヘラレタリ即チ左ノ如シ	或ル主義ヲ設クルノ方法アリヤ否ヤヲ議題トスルコト即
ニ大略左ノ條件ヲ伝達セリトテ右ニ関スル覚書ヲ小官へ与	三、他国ニ対スル債権行使ニ関シ武力ヲ使用スル上ニ於テ
ニ於ケル羅馬駐劄我大使ニ訓令ヲ発シ該地ニ滞在中ノ同氏	二、軍備制限ヲ議案ニ附セラルヘキヲ賛成スルコト
依リ来訪セザルトノ事故我政府ハ平和会議ニ関シ伊国宮廷	ニ参同スル
聞カントテ各国ニ巡回シ居ルモ馬徳里ハ斯ク遠隔ニ居ルニ	一、西班牙政府ハ平和会議ニ対スル露国政府ノ建議案四ヶ
海牙平和会議ニ提出スル議案ヲ構成セン為メ各国ノ意見ヲ	青木大使宛貴電第二五号ニ関シ
テハ過般来「マルタン」氏露国政府ノ命令ヲ受ケテ次回ノ	第三号
聞クコトヲ得バ幸ナル旨及談話候処同次官曰ク該問題ニ付	林外務大臣 市来代理公使
1 4 11	第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 ———
同 集合シ 外 此 益 ~ 発達スベキハ仲裁條約ナルベシ自分ハ始シメテ伊 ニ関シテハ米国之ヲ提出説明スルナランカ(アルジェンチ事故本件ニ就テハ態度ヲ英国ト共ニスルナランカドラゴ説 二回程主義ニ於テ之ヲ賛成スル旨ヲ議会ニ於テ公言シ居ル 制限問題ハ多分英国ニ依リ提出セラル 年ノ赤十字会議ニ於テ自己カ有シタル経験ヨリ生シタル杞 別 モ シ E 5 小 ベシ南米諸国ノ例之ナリ而 シテ今回ノ平和 会議ニ依 リテ ニ尤関係アル二三国間ニーノ條約ヲ締結スルコソ簡便ナ Ξ 受ケラレタ 1 三月二日英大使来訪有之雑談ノ末平和会議 当国ニ於クル大使公使等ト会談シタル次第ヲ略記供御参考 項ニ就テ談話シタルモノ、如ク無之ヲ信シ候今左ニ小官 憂 Ի 或ル事項ニ 又当国駐劄アルジェンチン公使カ欧州ノ数強国ヲ団結 ンス博士ニ協議ニ及ビタリトノ内話モ有之候 1 命ヲ帯ビ 1 ラ 7 一欧州ノ数 アリ 国ト 公使ハ軍備制限ヲ一般ニ適用スルハ頗 欧州 テ会議ヲ支配セントノ計画有之昨年ノ赤十字会議 ノ意嚮ヲ探 ŀ 官ハ露国ハ四十七ヶ国ニ対シテ案内ヲ発シ置 ノ作約ヲ締結シタル以来今日ニ於テアルジエンチン 訓令セラレタリト返事セラレ候 = 一人トシテ参列セシムルナラントノ話ニ有之候余ハ v ニ出テク ノ内意ニ出テタルナラントノ説ハ顔ル茫然トシテ偶々 一談話中伊国外務大臣ハ伊露通商條約ノ談判ニ関シマ 伊国回訪ノ遅延ニ対スル謝意ヲ伊国皇帝ニ伝奏スルノ勅 ノ使命ヲ有シクルモノニ無之ト被察候同博士ハ露国皇帝 サリシ次第ニ有之候処同博士ハ議案ニ関スル事項ノ外特 ル ・相尋ネ 人トシテ参列セシムルナラントノ話ニ有之候余ハ同公シマ依頼シ置ケリ猶同国政府ハ多分ドラゴ博士ヲ委員 フ上 西国大使同様第二会議ノ議案日付等ニ テンス博士ノ来伊ニ関シテハ小官ハ終始其ノ探索ヲ怠 有スル仲裁條約ハ実ニ十八個ニ達セリト 「ブロック」ヲ作リ之ニ対シタレ Ŋ ノ五強国ハ団結シテ窃カニ他国委員ヲ凌カ **タリトノ**説有之又左ニ記載スル如クルザッチ博士 ルヲ探知シタレハ自分ハ南米諸邦十八 ハ写一部 ル議ニヤト相尋ネ候処単ニド 関シテ平和会議 ルニ無之哉ト被察候兎ニ角唯今迄ノ処特別 Ŋ ヶ 第三章 第三章 ル次第ナラン尤何レノ会議ニ於テモ ルニ同公使ハ多分軍費制限問題ニ関 国ニ向ツテマルテンス氏ヲ巡回 ヲ貴官ニ送ルベシ云々小官ハ氏ノ厚 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 平和会議ノ議題及時期、 ||二於ケル他国ノ意見ヲ支配セン公使カ欧州ノ数強国ヲ団結シテ ベシ伊国外相 ル困難ナ ラ ハ欧州委員 各国ノ ,ゴ 説 就テ交渉ノ命ヲ 1 話及候処 ロセン 云へリ 干 名ノ委員ヲ , 準備 -ント ナカ レハ 团 2 メ 関 回結ヲ作 シテ諸 Ŋ ハ已 ハ驚愕 ニ於テ v 「意ヲ 国ト 直 ノ挙 · ラ 僅 軍備 ジ 事 H I I I I II N 力 テ ル 阼 強 諸 N 接 1 テ --力 当国著名 員 格段ノ結果アリタリト 希望ニ過キサルナラン勿論種々ノ打合ヲ為シタルナランモ 次ニ小官ハ前回平和会議ノ委員タリシ瑞典公使ヲ訪問 迎 見シタル議ニヤト相尋ネ候ニ依リ単ニ旧知己ト チ氏ト 政 ス 平和会議ヲ目シテ政治的事業ニ関係ナキ法学者ノ会合ト 氏委員タルベシ同 = ノ意見ヲ尋ネタルニマルテンス氏ハ頗ル世才ニ長 ナ 百 Ŋ 1 当国駐劄公使筆頭アルジェンチン公使曰ク自分ハ本国政 如 べ 会談シタルノミ欧州ニ於ケル我代表者ハ誰レ 同 命ニ依リマルテンス氏ト会見シタル次第ナル 同四日小官ハ西班牙大使ヲ往訪シタリ同大使 本ノ行動ヲ批評スルコトアル 国ヲシテ調停容喙ノ余裕アラシメント 丆 宣 Э 1 ン 日 ニ説キ欧州列強巡回 ハアルジェンチン政府カ議案ヲ起草シ提出ス可キヲ依頼シ ク本国政府ヲ代表シテ同博士ト協議ニ及ヒタルモノナ ノ委員ハ間接ニ此 篤ナ モノナレバ法理ニ精通 (タルコトヲ辞シタリ多分丁抹駐在公使ハンマー 富ミ自己ヲ紹介スルニ務ム キヲ保セズ云々懇話アリタリ 方弁明ス .様ノ談話ヲ致候小官カ日本ヲ代表シテマル ŀ 同氏ラ 府ニモ上申シ 認セラレ 命ニ依リドラゴ説ニ関シテマルテンス氏ト会見シタリ ク有之候 シト相答候処同大使ハ少シク怪愣ノ思ヲナシ ノ條項アリテ二国カ砲火相見ント |戦公布ノ時日ト 公使ノ同国提出 크 余 レハ余ハ之ヲ本国政府ニ電報シ 打合ヲ為シタルニ止マリ他ニ特ニ伊国外相ト -ナシト信 IJ ハ健康上公宴ニ 知己ト ル依頼ニ ハ小官親交ノ間柄ニ有之候テ常ニ 往訪シ懇談ニ及ヒ候氏日 ノ学者ニシ 、ル処アリ タリ今回 「ズ同 ナ リ 度シトノ希望ナル ンタリ云々 応 シ 入 交戦開始ノ期日ト 点ニ於テ日露戦争ニ於ケル 日希国公使来訪日 ノ事真ナル Iマ ル 臨ムコトハ好マサ テ目下無職ノ国務大臣ナル 、嘗テ司法大臣 ト云フコト Ŋ 其ノ公宴ニ列シタリ往年グ モ思ハレス云々 リ自分ノ行動 テンス氏ノ巡回又其目的ヲ有ス セ ル同人コソ適任ナラン已ニ本国

タリ本国政府 ヨリ

) 右議案

氏 府

ハ大ニ本国政府ニ於

N テ

ルノ学者ナレハ多分露国皇帝

ケ名

耆心

\$

氏

ニ出テ勲章テモ貰ハント

ノ

又自分ハ今回

タリ

· シ 事

÷

アリ自分

ナ ゝ ショ

ルド I ハ 委 ルベシ玉々

バテンス氏

ト会

シテ

訪

問

\$

カ略英大使

F 1

ン

本国政

府

モ

刃

ルモ

ノカ

ノ N 同大使ノ如

ベシ

マ

N

テンス

協議 博士

シ タ 八此 --

DU

「ノ間ニー定、

ノ期間ヲ置 期間

ク次回会議

ノ議案中

-N 等

スルノ際此

1

前他三

・ノ噂アリ

而シテ露国

旅順夜襲ノ日

七五

由ニテ外務大臣之懇

ラ

ッド

ス

ኑ

ク

往来致

シ居リ

候

-----ッ

議員ル

ザ

Y

シ モ

マ

 $\mathcal{N}$ 

テ

2

ス氏

----

第三章 平和会议!问题反时期、各国!準備 一一五	三月八日 前一一、一五 本省着	(1)		通知ノ件並ニ「マルテンス」意見報告ノ件(一) パー・第二回萬国平和会議議題ニ関シ任国政府ノ意向 「マル	当月7日 林外務大臣宛(電報) 第一		&c., &c., &c.,	for Fo	シテ	Henry Crofton Lowther 百全: H.B.M's Chargé d'Affaires. 方針:	my highest consideration. 不意	re, to renew to Your Excellency the assurance of	I avail myself of this opportunity. Monsieur le Mi- 議案	ion of the Imperial Japanese	to requ	ment in regard to the question, and I accordingly
144	シ - 得 :	ヨリモ子吉民ヲ奏スレコト延トンお篇『文》分:量ヨ友属情ラ	<b>獣ノ是義ニサノミニ是ニ子</b>	ルテンス」氏ガ当地ニ於テ第二平和会議ニ関ン発表セ	一三号 西路時代趙公復	ト海に可 日前七、二〇本省着 日後一、二〇維也納発	1	- <i>2</i> タリ	<b>ハ伊国ハ英国側ノ意見ナリト外務当局者ヨリ間接ニ</b> 開	方針並ニ兵備問題ハ独乙ト歩調ヲ共ニスル筈又同問題ニ関国全権委員メレイシン本官ニ内記セリ又一般会譚ニ関スル	提議ヲナスハ議事ノ進行ヲ妨グル憂アリト	議案へ豫メ列国ノ同意ヲ得テ提出スルヲ必要ト	議案ハ可成実行シ得ベキ結果ヲ有スルモノニ限ル依テ露国	第二平和会議ニ対スル墺国政府ノ態度へ同会議ニ重ヲ措キ	四号	林外務大臣西臨時代理公使

	見ス(同記事ニ対スル質問ノ答)乍去予ノ意見トシテハ該
	タ最近ニ於ケル英首相ノ軍備制限説ニ関スル新聞ノ記事ヲ
外務大臣子爵	ニ付キ最モ改正ヲ要ス列国多ク此カ改良ニ賛成ス又予ハ未半ノ国をノタチまッ渋治ニ国毎治ニクヨろ出身多ノルニド
在	明、再务/ 凸在吉を渋帯と目散舌をたたて出妻多々た三気(英国全権委員) 案アリシタメ此ヲ撤回セリ現在 ノ仲裁み
明治四十年三	
右及報告候 敬具	止 ニ 在 リ 右
<b>交渉ヲ為サンコト</b>	ト云フニ過キス
終ノ地トス因テ当	寧ロ此方法ニ由リ或ハ戦争ヲ開ク場合ヲ多少制限シ得ル者
キ種々ノ問題ヲ提	前述ノ注意ハ此ヲ以テ常ニ開戦ヲ豫防シ得ルト云フニ非ス
ノ結果ヲ奏セサル	及最近日露間戦争等モ避クルコトヲ得タルカト思考ス尤モ
ク此ニ賛成スルハ	ヲシテ如此敏活ノ行動ヲ為シ得ルコトトセバ或ハ西米戦争
決スルニ至ラス故	員ノ議決モ亦タ数時間ニシテ確定スルコトヲ得若シ同委員
外尙二十ヶ国ヲ追	デ若シ現昜即毎ヒ=於テ即時ニ審査ヲナスコトヲ得バ該委"不爭其罰査"ニズシジジ医「ニ犯ノ・エエエエ」署件ノ女ヨニン
主義ニアリ今回会	- un 属牛/ ロチーハ 女此場合ハ 可成
セス其要旨ハ軍備	審議セシムルコトトナシ
題ヲ提議セシモ成	モ亦タ頗ル激動シ遂ニ両国政府ハ本件ヲ萬国調
件ヲ付セザル可ラ	此場合ニ当テハ当事国ノ新聞ハ多ク論調ヲ高メ当時英露両
問題ヲ会議ニ付ス	述姿員会ハ已ニ Hull 事件ニ関シ好キ成績ヲ表ハシタリ如
単モ中立者 クル者	
トナレハ両国間ニ	* 別計: 話につい作 = 1
第一会議ニ際シ萬	「国ノ多数ハ之レニ司意ヲ表スルノ頃キナシ
平和ニ関スル問題	五、Tribunal d'arbitrage obligatoir ノ問題ニ関シテハ参
テ露国政府ハ第二	
	手続ヲ為スニ非ラザレバ討議ニ附シ難ク殊ニ其結果ノ如
・ノ	四、Doctrine Drago モ亦米国政府ヨリ露国ニ対シ公然ノ
テ第二	当ノ方法ヲ案出シ該問題ヲ会議ニ附セントス
予い第二平和会議	国ノ同意ヲ得ルヲ必要トス思フニ早晩英国ハ右ニ関シ適
、考右ノ労	豫メ英国政府ヨリ露国ハ公然通知シ露国ハ之レニ関シ列
*************************************	ダ確タル意見ヲ発表セズ又之ヲ会議ニ附セントスルニハ
北京着	尤モ露国ハ現ニ戦後特別ノ場合ニアルガ故本件ニ関シ未
= 正序	間ノ感情ヲ損シ延テ本会議ニ影響ヲ及ボスガ如キ憂ナシ
	但シ之ヲ会議ニ附スルコトヲ拒絶セズ又タ之ガ為メ列国
- <b>.</b>	三、軍備制限説ニ関シテハ多数ノ国ハ実行ノ見込ヲ有セズ
1 第二平和	正ヲ要スル件ニ就テハ列国多ク之レニ同意ス
	二、現在ノ仲裁々判ノ方法ヲ軽便且ツ敏活ニ行動スル様改
	敏活ナラシメナバ将来開戦ノ場合ヲモ多少制限シ得ベシ
	「ハル」事件ニ関シ好結果ヲ与ヘ若シ之ガ応用ヲ猶ホ一層

明治罕年三月七日 林外務大臣宛 一七八

Y

ーー六

一、Commission International d'enquête ノ如キモ既ニ

第三章

平和会議ノ謎題及時期、各国ノ準備

ーー六

ロ報ノ件

和会議ニ関スル「マ ルテンス」氏ノ意 四月十九日接受

**眉シ四日間滞在中同会議ニ付同博士カ発表セ** 11.1 上事要領訳出左ニ相掲候 既ニ電報ヲ以テ報告ニ及置候得トモ尚為御 関シ欧州列国政府間ニ下協議ヲ纒ムル準備 ヨリ派遣セラレシ「マルテンス」博士ハ本

同ニ紛争起リシ際ハ自他双方相互ニ激昂スト 回題第二戦時ニ関スル規定ノ改訂トス且予ハ 紀二平和会議ヲ主張シ其議案ヲ大別セバ第一 磁ヲ 纒 ムル準備ヲ目的トス已ニ一ヶ年前ニ於 4議開催ニ対スル各国感情ノ良好ナルコト 者ハ可成虚心平意此ニ対セサル可カラス前 萬国調査委員会設立ノ必要ヲ提議セリ如何 第二平和会議ニ関シ露国政府ト列強トノ間 和会議へ第一ヨリモ良結果ヲ奏スルコト疑 ヲ

ルハ豫期ス可カラサル処ナリ因テ実際ハ何等 ^ ル者ト認ム第一平和会議ニ於テモ実行シ難 1会議ニ参列スル国ハ第一会議ニ列セシ国ノ 当国政府ハ露国政府ノ提議ニ就キ友誼的ニ 、提議セシ実例アリ予ノ任務ハ維納ヲ以テ最 道加シ且会議ハ全会一致スルニ非サレハ議 備縮少ニアラス将来此カ拡張ヲ制限スルノ トヲ希望スルニ在リ 故ニ如此問題ニ対シ四十七ヶ国代表者カ悉 成 ラス襲キニ露国ハ第一平和会議ニ於テ此問 スルコトニ反対セス但シ如此討議ハ或ル條 効セサリショリ再ヒ此ヲ提議スルヲ欲

一七九

-三月七日

在墺臨時代理公使

西

源

四

郎 (印)

林

董殿

第三章

平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備

第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 

--七 第二回萬国平和会議ノ副議長ニ関スル「アルゼンチ ン」共和国政府ノ希望及議題ニッキ任国政府ノ意向 明治毕年三月九日 米国駐劄青木大使宛(電報)林外務大臣ヨリ

問合並右在英大使へ転電方訓令ノ件

Sent March 9 1907 5-40 p.m.

Acki Washington

ment wished to know views of the Japanese Governd'Affaires also stated that a similar communication in view of importance of Argentine. ment on the subject. must be settled by general agreement British Govern-British Chargé d'Affaires added that as such a matter had also been adressed to United States Government, that Argentine Representative should be Vice President of the Hague Conference would be chosen from South that Argentine Government thought one Vice President d'Affaires saying that Argentine Minister in London had No. 35 I have received note from British Chargé quiry I should be glad to know (1) if question America and that Argentine Government considered informed Principal Secretary of State for Foreign Affairs Before replying to above en-British Chargé ç

Hayashi

Tokio.

No. 30. March 7th, in reply to questions concerning forthcoming Peace Conference in The Hague, Minister for consider every proposal of the Conference and coopewere prepared to support. ment were well aware as to what proposals they gramme had been examined in detail and the Governworked out by the Russian Government. This proin virtue of an exhaustive programme which had been had accepted invitation to take part in the Conference Foreign Affairs stated that the German Government rate with good will in its task. In the Budget Committee of the Reichstag Germany would seriously

the programme and it was not yet certain in what tion of disarmament had not as yet been included in maritime law would be discussed at the Conference whether the question of development of international or not was still a matter of consideration. Vice-Minister for Foreign Affairs remarked that The ques-

明治学年三月十日

林外務大臣宛(電報)米国駐劄青木大使ヨリ

意向回答ノ件

第二回萬国平和会議ノ議題ニ対スル任国政府ノ

manner, and if the question at all, would be treated

一 八 〇

about the date of meeting of the Conference. also like to ascertain if anything definite is ments to the original Project have been made. has been made the subject of discussion or any amendascertain whether the programme of the Conference I wish you would sound Government with a view to in the above sense, and apart from the foregoing quiries of the Government to which you are accredited dents to be chosen. You will accordingly make enhas taken place regarding the number of Vice Presiject of international discussion and (2) if any discussion Presidency of the Conference has been made the sub-I should known

ructions. Transmit the above to Baron Komura as my inst-

一 八 明治学年三月九日 林外務大臣宛(電報)独国駐劄井上大使ヨリ

説明報告ノ件 第二回萬国平和会議ニ関スル独国外相及次官ノ

Berlin, March 9, 1907. 7:10 p.m.

Rec'd,

č 10,

3

3:15

p.m.

三 月 十 十 日 日 — 一 九 第二回萬国平和会議参列独乙国代表者決定ノ件 明治罕年三月十日 林外務大臣宛(電報)独国駐劄井上大使ヨリ

前後 四一、、 三三〇五 本伯 省林 着発

井

上 大

使

第三一号 林外務大臣

ノ当時外務大臣タリシ人ナリ ニ選定セラレタル旨発表アリ同氏ハ先年青木公使当国駐劄

スタイン」男爵ハ海牙平和会議ニ於ケル独乙ノ筆頭代表者 在土耳古国独乙全権大使「マルシャル、フォン、ビーベル

第三章

Inouye.

Hayashi

R'd. Tokio, March 11th 1907. 6.00 a.m.

Washington,

Tokio.

平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 一九九

No. 26, In reference to Your telegram 25.

--八 一

Secretary

第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 

Second Hague Conference. question to deliberation of Special Commission of the favour of the scheme, and are disposed to put their respective public opinion, have been more in tain and United States of America, pecially naval forces. On the other hand, Great Brified opposition garding the question. refrained from publicly announcing her position reof State told me that France most emphatically signito reduction of armament, more Germany has thus far in deference to the 8

The delegation will comprise six or seven in all. ex-ambassadors, assisted by experts and secretaries. U. S. A. intend to appoint as Plenipotentiaries three The conference is expected to meet in June.

seems to have given up his hope of arriving at an international agreement on limitation of armament. launching of Dreadnaught, the President of U.S.A. German Ambassador to U. S. A. told me that since

Root in a few days, In reference to your telegram 35, I shall see Mr.

Aoki.

ースニ

明治罕年三月二日 林外務大臣宛大使ヨリ

第二回萬国平和会議: 士協議内容報告ノ件 関スル「マルテンス」博

二平和会議ハ露国ノ提出ニ関スル議案ニ基ツキ討議スルコ 会見ヲ与ヘサリシガ同日午後官衙ニ訪問シ司法大臣ノ死去 ヲ以テ制限スルヤ如何ナル規定ヲ設クルヤ明細ニ之ヲ議案 所ナシ、軍費制限ノ問題ハ提出セラルヘキモ如何ナル方法 モノモナシ、各案ニ対スル伊国政府ノ意見ハ何等決定スル トニ有之伊国ハ右議案ニ対シ何等ノ反対モナク又附加フル 等ニ就テ尋ネタル後平和会議ニ話及致シ候処同大臣ニハ第 ニ対スル弔詞ヲ述ベ将ニ死ニ頻セントスル大蔵大臣ノ容体 トノ事ニ有之候外務大臣ハ種々ノ差支アリタル為メ昨日迄 ト申シ書記官長ハ自分ハ一向知ラザルコト故大臣ニ尋ネヨ スル処ナシト申シ居リマルテンス氏ハ僅ニ遊歴シタルノミ ノ席ニテマルテンスト会見シタルニ止マリ次官ハ何等決定 務省書記官長及外務次官ト会談シタルニ右二人ハ僅ニ饗宴 マルテンス博士ノ来伊ニ関シテハ前信具報及置候処其後外 機密第八号 -記載スルヲ要スヘシ是等ノ形式実体トモ未ダ何等確定ス 四月廿二日接受

榜大臣	外務大臣子爵 林 董殿
三月十五日 前九、一〇 本省着倫敦発	在伊 臨時代理大使 日下部三九郎(印)
府ノ意向回答ノ件	明治四十年三月十一日
「堂並ニ同会	右及具報候 敬具
萬国平和会議副議長ニ関スル亜爾然丁	ルモノナシト推察致候
111 明治學年三月畫日 林外務大臣宛(電報)	事件ノ交渉ヲ重
te . ا	, 、第二、、戸、マノニノ、専二、サ国ト等に主、ノノ意見ニテ別ニ新シキ専モ聞キ得ス候
	便及諸公使其他トモ会談ヲ遂
相談シタル形跡ナキモノ丶如シ	シテ勲章位カ目的ナラント冷評致シ居り候
ス」ト当外務大臣トノ間ニハ右議案ニ関スルモノ丶外別ニ	要モナキモノノ如ク彼ハ一個
平和会議ニ対スル伊国政府ノ意向未グ決定セズ「マルテン	レ宴後大使ノ談話ニ依ルニマルテンス氏ノ使命ニハ何等特
第七号	合セノ為ナリト返答致候去ル五日墺国大使館ノ晩餐ニ招カ
林外務大臣 日下部代理公使	メノミナルヤト相尋ネ候ニ大臣ハ重ニ制限問題ニ関スル打
三月十二日前六、東京着	小官ハマルテンス氏ノ使命ハ右ノ議案ニ関スル打合セノ為
後二、三〇	逸政府ト交渉スルノ必要アリタル為メナラント申サレ候猶
「マルテンス」トノ協議ニ関スル報告ノ件	ニ行キタルヤト尋ネタルニ多分墺外相ト会見ノ結果再ヒ独
第二回萬国平和会議ニ関スル任国政府ノ意向及	又同大臣ニ何故ニマルテンス博士ハ豫定ヲ変シテ再ヒ伯林
	*
1111 月台44年前十日 公吏ヨリ 伊国駐劄日下部臨時代理	ル処ナシ、ドラゴ説ハ到底討議 スルノ 価値 ナカル ベシ云

平和会議ノ議題及時期、 各国ノ準備 

第三章

一八三

	(註) 別紙見当ラズ 千九百七年三月二十日「ベルン」ニ於テ	<ul> <li>1:1、 明治早年三月三十日 国際平和事務局長ョリ</li> <li>第二回萬国平和会議ニ対スル第十五回字内平和会議(ミラン)ノ希望票決通知ノ件</li> <li>国際平和事務局長</li> <li>フレデリック、ベイエル(?)</li> <li>日本帝国外務大臣閣下</li> <li>以書翰致啓上候陳へ第二回海牙萬国平和会議ノ事業ニ関シ</li> <li>千九百六年九月十五日ヨリ二十二日マテ伊国「ミラン」市</li> <li>二、 第二回海牙萬国平和会議ノ事業ニ関シ</li> <li>一、 「</li> <li>日本帝国外務大臣閣下</li> <li>以書朝政府上候陳へ第二回海牙萬国平和会議ノ事業ニ関シ</li> <li>二、 (?)</li> <li>日本帝国外務大臣閣下</li> <li>二、 (?)</li> <li>二、 (?)</li></ul>	第三章 平和会議、議題及時期、各国ノ準備 11四 貴電第三五号 ニ 関シ 今十四日 「グレー」氏 ニ 面 会 セル ニ 同 大臣 ハ 「ア ルゼンチン」 ヨリ 提議ノ 件 ハ 同国 ヨリ 米国 ヘモ 通告ノ 旨 魚知 セルニ 付 之 ニ 対 スル 米国 政府ノ 三 筒 テ レ ク ル 所 ナ ク 其 他 貴 電 中 ノ 御 下 間 ニ ス マ 本 考 ニ ハ ナ カリ シ 旨 語 ラ レ ク リ 又 気 長 間 題 副 会 長 数 等 ハ 未 ク 閣 第二回 明治 早 年 三 月 i 玉 日 体 外 務 大 臣 征 第二回 萬 国 平 和 会議 ニ 於 ケ ル 軍 備 制限 ニ 関 ス ル 任 国 政 府 ノ 態 度 報告 ノ 件 任 国 政 府 ノ 態 度 報告 ノ 件 大 島 代 理 公 使 第 市 制 税 二、五 〇 東 京 着 レ ア 和 会議 ニ 付 ス ル コ ト ニ ハ 賛否 ノ 説 ヺ 述 べ ズ 緘黙 ノ 態 度 ヲ 取 ル ナ ラ ン
於クル軍備制	一二八 明治毕年三月三六日 林竹勞大豆花(電報)	<ul> <li>1二七 明治早年三月三十日 露回距割本野公使ヨリ</li> <li>第二回萬国平和会議開催期日及軍備制限案ニ関シ露国外相談話ノ件</li> <li>第二平和会議ニ関シ三月二十日露国外務大臣ハ軍備制限案ニ関第七六号</li> <li>第二平和会議ニ関シ三月二十日露国外務大臣ハ軍備制限案ニ関加、其間ニ挾マリテ頗ル困難ノ位置ニアリ而シ此問題ガ如何ニ決定スルヲ問ハズ開会期日ハ新暦六月一日ト定メ近 日ノ内公然ノ案内ヲ各国政府ニ出スベキ積リナリト話シタ</li> </ul>	「二五 明治毕年三月支日 解国批判本野公使ョリ         「二五 明治毕年三月支日 解国北判本野公使ョリ           第二回萬国平和会議開催期日並ニ軍備制限案ニ 関シ英露両国交渉ノ旨報告ノ件         第二百萬国平和会議開催期日並ニ軍備制限案ニ 関シ英露両国交渉ノ旨報告ノ件           三月十五日 前一一、四五 本省着           本野 公 使           第六九号           平和会議開会ノ期日ニ付三月十五日「マルテンス」ラ訪し           開合セタル所未タ確定へセザレトモ多分六月十五日頃迄ノ           ウ軍備制限ノ問題ニ関シ英露ノ協議未タ整へボルニアリ本           小美国政府ニ於テハ既ニ公然宣言シタルニ同大使ノ説ニテ           小人順序等ニ付相当ノ協議継マリ次第開会           シー・デー週間内ニハ英国政府ヨリ右ニ付カ串出スへキ害           ノ由

第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 「二六 「二七 「二八 外務大臣ノ談話ノ件」

一八五

惟ス抑モ此兵備縮少ノ問題ニ関シ最モ反対ノ意見ヲ	第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 一三〇ヲ手交シ其回答ヲ求メ候処本月廿二日ニ至リ別紙乙号写ノ
ニ於テ独リ之ニ故障ヲ唱フルカ如キコトハナカルヘシト若シ他ノ各国ニ於テ本件ヲ討議スルコトニ同意セバ独逸	因テ去ル十三日国務長官ニ面会別紙甲号写ノ通リナル覚書合スヘキ旨本月九日第三十五号貴電来訓ノ趣承知致候
セラル、ヤ未タ訓示ニ接セサレバ断言シ難キモ察スルニ	第有之タル趣ヲ以テ右ニ関シ示定ノ件々任国政府ニ就キ問
自分ハ此議ニ関シ本国政府ニ於テ果シテ如何ノ意向ヲ有	y
関スル其本国政府ノ意向ヲ問質シ候処同大使ハ	国平和会議副議長選定ニ関スル「アルゼンチン」国ノ希望
付其後本使ハ独逸大使ヲ訪問シ参考迄ニ右兵備縮少ノ議ニ	チン国公使ノ英国外務卿
右ハ英国政府ニ於テモ同意ヲ表セル所ナリ云々相答へ候ニ	
二回平和会議ニ提出シ其委員会ノ	一 三月廿二日付米国々務卿回答 11 三月十三日付米国々務卿回答
『米国ニ於テハ国民ノ輿論モアルコト故此議ハ是非	一 三手十三日寸青木大吏照
フルヘキヤ否 ヤハ判知シ	『イヤノ牛『アルセンチン』 公使申出ノ 儀=付米国政府へ
ハ何分ニモ独逸ノ痛ク反対セル所ナルヲ以テ初メヨリ	会議副議長ノ選定方ニ付在
入セラルベキヤ否ヤヲ問ヒタルニ同長官ハ右兵備制限ノ問 十門私 / 加計7124 ダオノリン ? !!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!	<b>「三〇</b> 明治学年三月二五日 林外務大臣宛
出閉重を風説ずと突见言で見ってな「プログラム・コー軍」」ノ問題ニ言及シ夫ノ兵備編少又ハ制限ノ議ニ関シデハ	
石国務長官ニ面会ノ折本使ハ第二回平和会議「プログ	
間委細右ニテ御承知相成度候	AOSI,
テ及報告候得共尚御参照迄ニ右別紙甲、乙丙号封中差進候	CONSIDEL ADD TO LEDON'S AS NOTE DY THE THEFT CONTENENCE.
н	Subject
sent (presented ?) and says that tendency of the Powers	Tokio.
thinks that it is evident that the subject will be pre-	Hayashi,
be brought before the cor	R'd. Tokio, March 24th 1907. 0.40 p.m.
ussions as to whether subject of an	Washington,
dated November 19th. Secretary of State says there	ニ関スル任国政府ノ意向回答ノ件
100 dated November 16th and my Kimitsu-shin No. 20	第二回萬国平和会議ノ会長及副会長議長並議題
gramme has been reported in my	二九 明治四十年三月二古日 林外務大臣宛 (電報)
or right to propose reduction or limitation or sima- ment Answer to Russia from II S A on the subject	
Britain to the proposal of Russia was with reservation	
to the original project except that assent of Great	ル事トナシタキ希望ナリ
not aware of any amendment has been (?) introduced	ハ本問題ヲ諸強国全権委員ヨリ成レル調査会ノ審議ニ付ス
in June. Regarding programme, Secretary of State is	中ナリ又若シ英国政府ニ於テ愈々右権利ヲ行使スル場合ニ
Russia will contain that date or some other date early	ノ権利ヲ保留スル旨ヲ記入スルコトニ関シ目下露国ト交渉
receive the conference by June 1st. There seems to be general understanding that formal invitations from	会ノ通知書中ニ英国ハ軍事費制限問題ヲ同会議ニ提出スル
ov't, intimated that it would be ready	リ露国ヨリ列国ニ向ケ発スヘキ平
will be determined by the Gov't. of Netherlands. Ne-	往電第壱五号ニ関シ昨二十一日英国外務大臣ハ左ノ通本官
dent. They have rather assumed that those positions	第二五号
part in the question of president, vice P	林外務大臣 小村大使
our telegram 35: M	三月廿三日 前五、三〇 本省着倫敦発
一八六	第三章 平和会议ノ问题及时期、各国ノ准備 一二九

議題トナスノ議ニ反対ノ意見ヲ表シタルノ事実ニ徴シテ クシテ行フヘカラサル所以ヲ陳ベ之ヲ第二回平和会議ノ 見ニ依リクルモノカ其社説ニ於テ兵備縮少ノ実際云フベ 唱ト共ニ該問題提出ノ議起レルニ当リ仏国海軍大臣ハ之 Ŋ 意見発表ノ後ニ於テ仏国政府ノ機関紙ト目セラル、「ル、 スルモノハ仏国政府ニシテ右ハ嚢ニ第二回平和会議ノ提 モ推知セラルヽナリ云々 ニ反対ノ意見ヲ発表シタルコトアリ又右海軍大臣ノ反対 ン」ハ政府ノ意ヲ承ケタルモノカ或ハ又独自一個ノ意 第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 - E0

相答へ候ニ付本使ハ仏国政府ニ於テ既ニ右様ノ意向ヲ有ス セ カ為メナリヤ将タ又タ独逸国民ノ輿論兵備縮少ノ議ニ反対 所以ノモノハ果シテ右ノ如キ仏国政府ノ意向ヲ看取シタル グラム」中ニハ兵備縮少ノ問題ヲ含マサル旨ヲ公言シタル 独逸外務大臣ハ其国ノ議会ニ於テ第二回平和会議ノ「プロ ノ態度ニ出デザルベカラサル儀ト思惟スル次第ナルカ襲 ルニ於テハ独逸政府ハ其仏国トノ関係上自然ニ非兵備縮少 ナリトシタル事情有之儀ニャ否ャ及反問候処独逸大使ハ外 務大臣カ右ノ如キ言明ヲ為シタル理由ハ果シテ那辺ニ存ス ルモノアリテ為メニ政府ハ右ノ如キ言明ヲ必要又ハ便利 -

(附屬書一)

青木大使照会

Confidential. PROMEMORIA HANDED BY VISCOUNT AOKI TO SECRETARY ROOT ON MARCH 13, 1907.

tion from United States by the Argentine Government. delegates. President to be chosen from among South American it proper that her Plenipotentiary should be the Vicethe forthcoming Hague Conference will be chosen tine Government thinks one of the Vice Presidents of Secretary of State for Foreign Affairs that the Argen-Minister in London has informed the British Principal Japanese The Japanese Government would be glad to know The British Government has communicated to the has been adressed to the Government of South America and that Argentine considers Government It is understood that a similar communicathe fact that the Argentine the

Ð

Confidential.

My dear Viscount Aoki:

With regard

to the questions of the memorandum

Firstly: Whether the question of the Presidency of the Second Peace Conference has been considered

by the Powers.

第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備

L EO

those positions would be determined by the Govern-

建造セルヲ見テ斯ル怖ルヘキ兇器ノ現出スルニ於テハ世界 息セラレタルコトアル旨談話致申候 ノ平和ハ扨措キ兵備縮少問題ノ前途モ知ルヘキナリ云々嘆 テ行フヘカラサルモノニシテ現ニ大統領ルーズヴエル ノ如キモ先年英国ニ於テ巨大ノ戦艦「ドレッドノート」ヲ ルヤ承知セス要スルニ此兵備縮少ノ問題ハ実際言フヘクシ ト氏

一八八

其後本使ハ重テ国務長官ニ面会シ話次復ビ兵備縮少ノ問題 付セラル、コトトナルヘシ云々懇話致申候 而シテ其提出セラレタル上ハ多分該会議分科委員ノ調査ニ 痛ク反対スル所ナル ニ及ヒタルニ同長官ハ矢張リ前言ヲ繰返シ其問題ハ独逸ノ モ米国政府ハ是非共此議ヲ提出スヘク

反対ト云ヒ独逸ハ仏国政府ニ於テ最モ反対スル所ナリ 要之右兵備縮少ノ議ニ関シテハ米国政府ハ独逸ニ於テ最 ヒ両者ノ間ニ於テ意向相違有之申候 ト云 モ

右御参考迄不取敢及報告候 敬具

明治四十年三月廿五日

外務大臣子爵 在米 特命全権大使子爵 林 董殿 青 木 周 蔵 印

Secondly: Whether the number of Vice Presidents to be chosen has likewise been discussed.

Thirdly: whether any amendment has been introduced to has been made the subject of discussion and Whether the program of the Conference

been fixed as the date of the meeting бť the

Fourthly: Whether any particular day in June has

the original project, and

Conference.

(附屬書二)

米国々務卿回答

DEPARTMENT OF STATE,

WASHINGTON.

March 22, 1907.

questions of the Presidency or Vice Presidency of The

questions, we have taken no part in the

and second

which you left with me last week: as to

the first

Hague

Conference.

We

have rather assumed that

一八九

第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 1三〇

ment which entertains the Conference. At the First Conference, there was but one Vice President, and I think that both the President and Vice President were Dutch.

As to the fourth question, no day has yet been fixed as to the date of the meeting of the Conference, but the Netherlands Government has intimated that it would be ready to receive the Conference by the first of June, and there seems to be a general understanding that the formal invitation from Russia will contain that date, or some other date early in June.

As to the third question, the program of the Conference has been made the subject of a great deal of discussion. I am not aware that any amendment has been introduced to the original project, except that Great Britain's assent to the program proposed by Russia was with reservation of the right to propose to the Conference the subject of reduction or limitation of armaments. The answer of the United States to Russia accepted all the subjects which Russia proposed to include in the program, but reserved the right to propose to the Conference two further subject: one, the limitation of armaments, and the other, the use of force for the collection of ordinary contract

第二回萬国平和会義ノ権定期日及義題修正ノ如一三一 明治早年三月三日 蘭国駐劄佐藤公使宛(電報)

訓令ノ件何速報方任国政府ニ要請並右在露公使ニ転電方第二回萬国平和会議ノ確定期日及議題修正ノ如

Sent March 30 1907 5-40 p.m.

Sato, The Hague.

Europe, ment have not received any official intimation of the No. 4. convenient passenger steamers and the impossibility necessary time of transit, the infrequent departure of of being appointed from among officials already in Japanese Delegates will be sent from Japan instead nounces that June 1st has been fixed as the date. ference, date of the meeting of the forthcoming Peace Con-Minister for Foreign Affairs that the Japanese Governdifficult, if not practically impossible, for the Japanese of obtaining steamer accommodation without booking You will explain that on this occasion most of the Delegates proceeding from Japan to reach The Hague considerable time in advance, it will be extremely You are instructed to inform the Netherlands and you will say that having in view the although the public press confidently an-

debts from a Government to the citizens of another Government.

一九〇

Japan, you will remember, reserved, generally, the right to propose further subjects within a reasonable time before the meeting of the Conference.

There has been much discussion of the question whether the subject of armament should be brought before the Conference. Mr. de Martens, the Russian publicist, has visited all the European capitals and discussed the subject with the respective governments. I think it is quite evident that the subject will be presented, and the general tendency of the Powers is to favor the same course which was followed at the first Conference; that is, the reference of the subject to a Committee to consider and report. In that case, further action would, of course, be shaped largely by the report of the Committee.

With high regards, I am, Always faithfully yours, (Signed) Elihu Root.

His Excellency Viscount Aoki, Ambassador of Japan.

the definitive programme before the meeting of the tentative only and that they would be informed of stood that the programme proposed by and you will add that Japanese Government undergramme of the Conference as finally agreed upon, ference are to communicate to the Powers the proin giving notice of the date of meeting of the Conare unaware whether the Netherlands Government You will further state that the Japanese Government of the date when the Conference is to be convened. ment are given at least two months previous notice at the appointed time, point out that the Japanese Government will wish to any modifications have been introduced, and you will general discussion, but they are not informed whether that the draft project has been made the subject of Conference. Russian project. what, if any, modifications have been made to the know before giving final instructions to their Delegates. The Japanese Government are informed unless the Japanese Govern-Russia was

Transmit the above to the Japanese Minister at St. Petersburg for his own information.

Hayashi

.

第三章

平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備

第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 一三二	三三 一九二
11   明治罕年三月三十日 林外務大臣宛(電報)	Hayashi, Tokio
~題及開催期	No. 11. Dutch Minister for Foreign Affairs told me
	cipating necessary allowance of time
The Hague, 9.15 p.m., 31/3/07. Received, 11.20 a.m., 1/4/07.	delegates from distant countries, he inquired Russian Government of the date, but as yet he has received
Hayashi,	no answer from them. He thinks however that from
-	all indications it will be neither earlier than June 1st.
No. 10. Kegaroing your telegram No. 4 will keeglapu reply fully after seeing Dutch Minister for Foreign	nor later than June 15th; yet to my question whe-
s Tuesday afternoor	lace
you that Secretary General of the Foreign Affairs	not answer positively yes or no, although
told me to-day that no official intimation about date	thinks it will. He promised me to telegraph the
etc. has yet been received from Russian Government.	in Japan as soon as
Sato,	odification, if any, to original Rus
	programme who be communicated in advance to the Powers by Russia.
三三 明治罕年四月二日	Sato.
前同件(二)	•
The Hague, April Znd. 1907 5.25 p.m. Tokio. ,, 3rd. ,, 10.45 a.m.	
一三四 明治罕年四月三日 萬国駐劄佐藤公使ョリ	且ツ帝国政府ノ承知セルトコロニテハ露国ヨリ提出セラレ
司件(三)	案タルニ過キスシテ何レ開会ニ先テ確
4	ハ該草案ハ広ク討議=附セラレタル由ナレドモ之=対シテ議案ノ通知ヲ受クヘシト心得居リタルカ閏クトコロニ依レ
去月三十日附第四号貴電ヲ以テ第二回平和会議開催ノ期日	レタルヤ否ヤニ付テハ帝国政府ニ
上ニ報道セラル、ト進モ帝国政府ニ於テハ之ニ関ン未タ可ニ付キ右ハ六月一日ト決定セラレタル旨確実ラシク新聞紙	
知ニ接セザル旨ヲ蘭国外務大臣ニ告ケ且ツ今	フルニ先チ之ヲ承知センコトヲ希
ノ平和会議ニ列坐スベキ帝国ノ委員ハ多クハ現ニ欧洲ニ在	ヲ当国外務大臣へ申入ルベキ旨ヲ訓示セラレタリ
ル所ノ官吏中 ヨリ 任命 セラルコトナク 特ニ本邦ヨリ 派遣	依テ去三十日夜直ニ蘮国外務大臣ニ一書ヲ寄セ面会ヲ請求
セラルベキ筈ナルヲ以テ其渡航ニ長日月ヲ要候処相当ナル	セシニ惟ニ三十一日ハ日曜日一日ハエスター祭日ヲ以テナ
繁ナラサルカ故ニ久シキ	ルベク去ル二日午後二時半外務省ニテ拙者ヲ接見スヘキ旨
テ平和会議開催ニ先チ帝国政府ニ於テ少クトモニヶ月ノ豫約スルニ非ラサレン復乗ノ復ラ똖ルコト不同能ニ鏖シ旁以	然ルニ恰好シ去ル三十一日当国外務省総務長官本官ヲ来訪ノ回答ニ接シタリ
ル帝国	ニ付キ其機ヲ利シ
ハ開会期日迄ニ海牙ニ到達スルコト実際不可能ニ屬セサル	タルニ平和会議開会期日ハ勿論其他ノ事柄ニ付テモ未タ露
劇画女舟まり 亥Ar義昌豊 / 男子 / 勇治 ペレト ちょ亥Ar義 マデモ極メテ困難ナル ペキコトヲ同大臣ニ説明スヘキ旨又	日髙十寺寛言ヲ以テ引下ヽ最告゠及ご置タリ国政府ヨリ何等公然ノ通知無之旨相答候ニ付其旨不取敢同
討議ニ附セラルベキ確定議案ヲモ同国政府ヨ	昨二日豫約ノ時間ニ外務省へ出頭外務大臣ニ面会貴電ノ旨
知セラルベキ積ナルヤ否帝国政府ニ於テ一向承知シ居ラス	趣ヲ告ケ且ツ必要ノ説明ヲモ加ヘ候処同大臣ノ答ニハ実ハ
第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 一三四	1 九三

、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、	受候=付夫レトハナク試=当国外務大臣=向テ開会ノ期ロ の或へ伊国ヲシテ右=関シ居仲調訂ノ任=当ラシメント ハ或へ伊国ヲシテ右=関シ居仲調訂ノ任=当ラシメント ハ或へ伊国ヲシテ右=関シ居仲調訂ノ任=当ラシメント ルモノ、如ク当地新聞へ報道セリ 「三、明治罕年内月六日 壊国駐割西臨時代理公使ヨ 第二一号 平和会議=関シ最近露国ノ通告=対スル奥国新聞論調 第二一号 平和会議=関シ最近露国ノ通告=対スル当地新聞ノ意響ヲ がんテ日本へ同盟国クル英国案ノ軍備制限説=へ同意ト ザルモノト認ム現=同案賛成者ノ内=列セザルヲ以テ明会ノ期日 下日本が起メザリシ点へ或へ日露開戦=際い
ントセ 三、英国ガ軍備制限案ヲ主張スル主限へ独逸ノ海 使 リ 定 で 、英国ガ軍備制限案ヲ主張スル主限へ独逸ノ海 定 定 、英国ガ軍備制限案ヲ主張スル主限へ独逸ノ海 に 、英国ガ軍備制限案ヲ主張スル主限へ独逸ノ海 に 、英国ガ軍備制限案ヲ主張スル主限へ独逸ノ海 に 、英国ガ軍備制限案ヲ主張スル主限へ独逸ノ海 シトセ に 、英国ガ軍備制限案ヲ主張スル主限へ独逸ノ海 に 、英国ガ軍備制限案ヲ主張スル主限へ独逸ノ海 に 、英国ガ軍備制限案ヲ主張スル主限へ独逸ノ海 に 、英国ガ軍備制限案ヲ主張スル主限へ独逸ノ海 に 、英国ガ軍備制限案ヲ主張スル主限へ独逸ノ海 に 、英国ガ軍備制限案ヲ主張スル主限へ独逸ノ海 に 、 、英国ガ軍備制限案ヲ主張スル主限へ独逸ノ海 に 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、	キレトハナク       キレトハナク       第二回       第二
レテリ レテリ レテリ レテリ レテリ レテリ こ、英国ガ軍備制限案ヲ主張スル主限へ独逸ノ海軍 第フ シトセ 三、英国ガ軍備制限案ヲ主張スル主限へ独逸ノ海軍 第フ レベ止ヲ得ズ或へ此際へタヾ兵力制限ノ為メ尽力 レベ止ヲ得ズ或へ此際へタヾ兵力制限ノ為メ尽力 シーニセ 第二平和会議ニ関スル列国ノ態度ニ付墺国新 第二平和会議ニ関スル列国ノ態度ニ付墺国新 第二平和会議ニ関スル列国ノ態度ニ付墺国新	
同意セ 三、英国ガ軍備制限案ヲ主張スル主眼ハ独逸ノ海軍 「意志・ 「二七 明治学年四月七日 「第一 「二七 明治学年四月七日 「二七 「二七 「二七 「二七 「二七 「二七 「二七 「二七	
ントセ 三、英国ガ軍備制限案ヲ主張スル主眼ハ独逸ノ海軍 電三を 第ヲ ここと 明治学年四月七日 第二平和会議ニ関スル列国ノ態度ニ付墺国新 「三七 明治学年四月七日 第二平和会議ニ関スル列国ノ態度ニ付墺国新 「三七 明治学年四月七日 本及ビ大陸ノ友邦タル 「三七 明治学年四月七日 本及ビ大陸ノ友邦タル 「三七 明治学年四月七日 本及ビ大陸ノ友邦タル 「三七 明治学年四月七日 本及ビ大陸ノ友邦タル 「三七 明治学年四月七日 本及ビ大陸ノ友邦タル 「三七 明治学年四月七日 本 の、朱国の臨時代理公	<ul> <li>キレトハナク試ニ当国外務大臣ニ向テ開会ノ</li> <li>キレトハナク試ニ当国外務大臣ニ向テ開会ノ</li> <li>キレトハナク試ニ当国外務大臣第二回</li> <li>第四シテ右ニ関シ居仲調訂ノ任ニ当ラシメン</li> <li>第二回萬国平和会議議題ニ関スル壊国新聞調調</li> <li>二回萬国平和会議議題ニ関スル壊国新聞論調</li> <li>二回萬国平和会議議題ニ関スル壊国新聞論調</li> <li>二回萬国子和会議議題ニ関スル壊国新聞論調</li> <li>二回萬国子和会議議題ニ関スル壊国新聞論調</li> <li>二回萬国子和会議議題ニ関スル壊国新聞論調</li> <li>二回萬国子和会議議題ニ関スル壊国新聞論調</li> <li>二回萬国子和会議議題ニリカシア</li> <li>二回第二回第二回第二回</li> <li>二回第二回第二回第二回</li> <li>二回第二回第二回第二回</li> <li>二回第二回第二回第二回</li> <li>二回第二回第二回</li> <li>二回第二回第二回</li> <li>二回第二回第二回</li> <li>二回第二回</li> <li>二回第二回</li> <li>二回第二回</li> <li>二回第二回</li> <li>二回第二回</li> <li>二回第二回</li> <li>二回第二回</li> <li>二回第二回</li> <li>二回第二回</li> <li>二回</li> <li>二二</li> <li>二二&lt;</li></ul>
<ul> <li>メントセ</li> <li>三七</li> <li>明治學年四月七日</li> <li>壊国が軍備制限案ヲ主張スル主限ハ独逸ノ海軍</li> <li>ご、英国ガ軍備制限案ヲ主張スル主限ハ独逸ノ海軍</li> <li>へ、法国、「「「」」」」</li> <li>二三七</li> <li>明治學年四月七日</li> <li>「「」」」</li> <li>「二三七</li> <li>明治學年四月七日</li> <li>「「」」」</li> <li>「二三七</li> <li>「」」</li> <li>「二三七</li> <li>「」」</li> <li>「二三七</li> <li>「」」</li> <li>「」」</li> <li>「二三七</li> <li>「」」</li> <li>「」」</li> <li>「二三七</li> <li>「」」</li> <li>「」</li> <li>「」」</li> <l< td=""><td>★レトハナク試ニ当国外務大臣ニ向テ開会ノ カク当地新聞ハ報道セリ コラシテ右ニ関シ居仲調訂ノ任ニ当ラシメン 告ノ件(二) 後 ↓、三〇 維也納発 前 ↓ ↓、三〇 維也納発 前 ↓ ↓、三〇 維也納発 西臨時代理公使 第大臣 西福時代理公使 第大臣 西福時代理公使 「一」、三〇 本省着 商国ガ露国ノ通告ニ対スル 奥国新聞論調 二回萬国平和会議議題ニ関スル 奥国新聞論調 での一」、三〇 本省 着 発 一」、三〇 本省 着 発 一」、三〇 本省 着 発 四臨時代理公使</td></l<></ul>	★レトハナク試ニ当国外務大臣ニ向テ開会ノ カク当地新聞ハ報道セリ コラシテ右ニ関シ居仲調訂ノ任ニ当ラシメン 告ノ件(二) 後 ↓、三〇 維也納発 前 ↓ ↓、三〇 維也納発 前 ↓ ↓、三〇 維也納発 西臨時代理公使 第大臣 西福時代理公使 第大臣 西福時代理公使 「一」、三〇 本省着 商国ガ露国ノ通告ニ対スル 奥国新聞論調 二回萬国平和会議議題ニ関スル 奥国新聞論調 での一」、三〇 本省 着 発 一」、三〇 本省 着 発 一」、三〇 本省 着 発 四臨時代理公使
<ul> <li>ノ意嚮ヲ</li> <li>ノ意嚮ヲ</li> <li>ノ意嚮ヲ</li> <li>ノ意嚮ヲ</li> <li>ニ、英国ガ軍備制限案ヲ主張スル主限ハ独逸ノ海軍</li> <li>ントセ</li> <li>三、英国ガ軍備制限案ヲ主張スル主限ハ独逸ノ海軍</li> <li>ンドセ</li> <li>二、英国ガ軍備制限案ヲ主張スル主限ハ独逸ノ海軍</li> <li>ノ主義ヲ議事録ニ掲グルヲ以テ満足シ了ラントス</li> <li>ノ主義ヲ議事録ニ掲グルヲ以テ満足シ了ラントス</li> </ul>	<ul> <li>ニ 関シ長近露国ノ通告ニ対スル当地新聞ノ資</li> <li>ニ 国 アシテ右ニ関シ居仲調訂ノ任ニ当ラシメン</li> <li>ニ 回 萬 国 平和会議議題ニ関スル 壊国新聞論調</li> <li>ニ 回 萬 国 平和会議議題ニ関スル 壊国新聞論調</li> <li>ニ 回 萬 国 平和会議議題ニ関スル 壊国新聞論調</li> <li>ニ 回 萬 国 ア和会議議題ニ関スル 壊国新聞論調</li> <li>ご 回 本 省 着</li> <li>ニ 回 本 省 着</li> <li>ニ 回 本 省 着</li> <li>ニ 回 本 省 着</li> </ul>
トセ ヨリ 日 二、英国ガ軍備制限案コ 主張スルキノ 同県、 米国の極東ノ同盟タル日本及ビ大陸ノ友邦タル 五、英国の極東ノ同盟タル日本及ビ大陸ノ友邦タル 五、英国の極東ノ同盟タル日本及ビ大陸ノ友邦タル 五、英国の極東ノ同盟タル日本及ビ大陸ノ友邦タル 五、英国が軍備制限案コ 書明限スルモ何等失フ所ナシト レバ止ヲ得ズ或へ此際へタッ兵力制限ノ為メ尽力 ノ主義ヲ議事録ニ揚グルヲ以テ満足シ了ラントス	務大臣 明治罕年四月六日 明治罕年四月六日 明治罕年四月六日 明治罕年四月六日 明治罕年四月六日 期治罕年四月六日 第二回萬国平和会議議題ニ関スル墺国新聞論調 二回萬国平和会議議題ニ関スル墺国新聞論調 二回萬国平和会議議題ニ関スル墺国新聞論調
<ul> <li>レバ止ヲ得ズ或ハ此際ハタヾ兵力制限ノ為メ尽力</li> <li>レバ止ヲ得ズ或ハ此際ハタヾ兵力制限ノ為メ尽力</li> <li>マルガ放自ラ之レヲ制限スルモ何等失フ所ナシト</li> <li>エ、英国ガ軍備制限案ラ主張スル主限ハ独逸ノ海軍</li> </ul>	<ul> <li>□ 二、三〇 本省着</li> <li>二、三〇 本省着</li> <li>二、三〇 本省着</li> </ul>
調 ヨリ制限案ニ賛成ヲ得ザル上尙ホ独露墺ノ反対ニ ビス英国ハ極東ノ同盟クル日本及ビ大陸ノ友邦タル アルガ放自ラ之レヲ制限スルモ何等失フ所ナシト アルガ放自ラ之レヲ制限スルモ何等失フ所ナシト 三、英国ガ軍備制限案ヲ主張スル主限ハ独逸ノ海軍	こ付夫レトハナク試ニ当国外務大臣ニ向テ開会ノ ハ伊国ヲシテ右ニ関シ居仲調訂ノ任ニ当ラシメン ハ伊国ヲシテ右ニ関シ居仲調訂ノ任ニ当ラシメン ハ伊国ヲシテ右ニ関シ居仲調訂ノ任ニ当ラシメン 第二回萬国平和会議議題ニ関スル墺国新聞論調 第二回萬国平和会議議題ニ関スル墺国新聞論調
調 五、英国ハ極東ノ同盟クル日本及ビ大陸ノ友邦タルビー 三、英国ガ軍備制限案ヲ主張スル主限ハ独逸ノ海軍 ガルガ故自ラ之レヲ制限スルモ何等失フ所ナシト デルガ故自ラ之レヲ制限スルモ何等失フ所ナシト シトセ 三、英国ガ軍備制限案ヲ主張スル主限ハ独逸ノ海軍	ニイ 明治四年四月六日 墺国駐割西臨時代理公使 第二回萬国平和会議議題ニ関スル墺国新聞論調 第二回萬国平和会議議題ニ関スル墺国新聞論調
) 関係アル等ノ理由ニヨリ英国案ニ賛成セシニ過ギ公使ヨリ 四、米国ハ有力ナル陸軍ヲ有セズ又西班牙ハ英国トザルガ故自ラ之レヲ制限スルモ何等失フ所ナシトヨントセ 三、英国ガ軍備制限案ヲ主張スル主眼ハ独逸ノ海軍	三六 明治學年四月六日 株外務大臣宛(電報) ハ伊国ヲシテ右ニ関シ居仲調訂ノ任ニ当ラシメン ハ伊国ヲシテ右ニ関シ居仲調訂ノ任ニ当ラシメン ハ伊国ヲシテ右ニ関シ居仲調訂ノ任ニ当ラシメン
四、米国へ有力ナル陸軍ヲ有セズ又西班牙へ英国トザルガ故自ラ之レヲ制限スルモ何等失フ所ナシトロニ、英国ガ軍備制限案ヲ主張スル主眼へ独逸ノ海軍	- 付夫レトハナク試ニ当国外務大臣ニ向テ開会ノ
ドレド女目ラス 暗ニ牽制セント 三、英国ガ軍備制	ノ、如ク当地新聞へ報道セリ ニ付夫レトハナク試ニ当国外務大臣ニ向テ開会ノ
メントセーニ、英国ガ軍備制	- ヘロク白地所引へ最直とりへ伊国ヲシテ右ニ関シ居仲調訂ノ任ニ当ラシメンハ伊国ヲシテ右ニ関シ居仲調訂ノ任ニ当ラシメン
	ニ付夫レトハナク試ニ当国外務大臣ニ向テ開会ノ
	ニ付夫レトハナク試ニ当国外務大臣ニ向テ開会ノ
S会ノ期日 │ 国各×態度ヲ異ニスルガ故今回独宰相ガ伊外相ト会見セル	
被見	シク参列ヲ拒ムベキ形勢ニテ頗ル困難ヲ感シ居ルヤニ被目
	ニ参列スルヲ拒ムヘク之ヲ上ボセサレバ英米両
第一九号	制限問題
リ ト	記者ニ語リタリトイフ所ニヨレバ夫ノ英国ノ主唱セリトイ
氏某新聞 四月三日 前六、一〇 本 省 着	紙上ニ散見スルニ露国ノマルチン氏某新
後一、三〇 維也納	後同十五日以前ナルベシト思ハル云々
月一日以	会議ノ開会
	日
·····································	向テ回章ヲ発送スベシ要スルニ覇国政府ノ受寺へフ・ニン・ニオイ・・ ニー 観日 しょう ディー・シーン
	ノ加ヘラルベキ場合ニヘソハ開会ニ先チ露国政府ヨラハオブ日ゴヨシ介急な影用ヨクハニーブシ語シ谊
シバーを 外務大臣子薫 材 董殿	
	・、いた目・にないけい、 日本かい・ロス・・・ ~電報シ貴国政府へ御通知ニ可及ニ付夫レ丈ケへ御安
明治四十年四月三日	
トモ未ダ 信ヲ以テ及御報告候次第ニ候 敬具	ヲ決定シテ之ヲ通知アリタシト申遣ハシ置キタレトモ未ど
開会期日 ハスト答ヘラレ候依テ右会見ノ要旨ヲ摘ミ昨日第十一号電	付キ頃日露国政府ニ向ケテ其趣ヲ申入レ可成速ニ開会期ロ
ハ勿論ニ 分ハ開会セラルペシト思ヒ居ルモ其有無ヲ断言スルコト能	其他南米諸国委員ノ渡航ニハ幾多ノ時日ヲ要スルハ勿論ニ
- 貴国清国 セラレタルモノト見做シ可然ヤト問試ミタルニ同大臣ハ自	ル、コト、セバ地球ノ反対方面ニ位スル諸国即チ貴国清国
	先達テヨリ御話モアリ愈ヨ六月一日ヨリ平和会議開催セラ
十備 一三五 一九四	第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 一三

教授ナリシカ現ニ陸軍省法務局長クリ国際法米国陸軍法	本年六月十五日和蘭国海牙ニ於テ開催セラルヘキ第二回萬
University ニ遊ヒテ法律 ヲ学ヒ曾 テ陸軍大学校国際法	公第二九号 五月十日接受
Weet Point 陸軍士官学校ヲ卒業シタル後 Columbian	ノ件
Davis	第二回萬国平和会議参列ノ米国全権及随員任命
五、陸軍少将(Brigadier General)George Breckenridge	<b>一三九</b> 明治罕年四月七日 林外務大臣宛
Diplomacy in the International Development of Eu-	
公使ヲ経 テ現ニ海牙ニ公使タリ著 ス所 A, History of	
Rochester 大学総長ナリシカ後国務次官トナリ瑞西駐在	
IC David Jayne Hill	egarding the matter.
カ現ニ Arkansas 弁護士会長タリ	Newspapers report Cores was invited to the Con-
三、U.M.Rose 弁護士ニシテ曾テ米国弁護士会長ナリシ	Court of the U.S. accompany as an assistant legal
二、前駐仏大使 Gen. Horace Porter	Solicitor above named, the reporter of Sup
一、前駐英大使 Joseph Hodges Choate	admiral; there is a secretary attached to Commission;
シテ米国ヲ代表スル権限アリ右全権委員へ	potentiary including one brigadier-general one rear-
処今回ノ全権委員ハ七名ニシテ各自其委任状ヲ帯有シ共同	g four are calle
就キ右代表委員ノ編制及資格等公然ト無ク問合ハサシメ候	U. S. Ambassador to France;
即日宮岡参事官ヲ国務省ニ遣ハシ同省法律事務官 Scott ニ	Choste former II S. Ambassador to Great Britain
1 - 1 - 4 - 4 - 1 - 5	the rank Ambassador Extraordinary".
, устинети, яге япилогизед то sign ит из репатт, аннови	オス手幸伯の荷里
the second	
of the Commission jointly represent U. S	ハ更ニ新ニ海牙ニ於テ公然表示セラレントスルニアリ云々
following composition of delegation: seven	逸ノ意見モ亦タ此ト均シ然ラハ則チ三帝国ノ親密ナル関係・
the delegation as expert in international law shows	フルニアルノミ且出ニ関フル露国ノ通閥ニ由レン原国及独
Solicitor State Department who is to	レニアンアミ王と三国ペン家国ノ百志ニヨンハヨ
The announcement coupled with private information	利己目的ノ観念ヲ去テ一二実際的有利ナル方針ニ向ハント
of II S delegates to The Harrie has been announced	ノ主意ニ基ク総テノ動議ヲ援助セントス故ニ墺国ノ態度ハ
10k10. No. 33. In reference to vour teleoram 25: nersonnal	ユヘ墺国ハ最初ヨリ実行ノ見込ナキ問題ヲ除クノ外ハ前述
Hayashi,	ニ不係博愛主義ニ著大ナル影
R'd. Tokio, April 14th 1907, 11.30 a.m.	<b>斜末ナハ小問匙ノ詐謗二丁ハニ 過キス 乍去平和会譲ニ 放デ</b>
Washington,	田ミーン「夏」「後」の「「夏」、「夏」にはいた。」
セノ件	ノトセベ今回ノ平和会議=於ケル仕事ハ露国議案ノ内薑=
並同会議:韓国招請ノ新聞記事ニ対シ真否問合	ニ於ケル各海上主権者ニシテ海上法規ノ激変ニ反対スルモ
第二回萬国平和会議ニ参列ノ米国委員任命通知	成スル者ト推測スルコトヲ得若シ果シテ如此欧洲並ニ極東
一三八 明治毕年四月古日 林外務大臣(電報)	<b>ク日本ハ海上ニ於ケル規定追加ニ反対スル英国ノ意見ニ賛</b>
小小小小小米国注 <b>劄青木大</b> 吏	セシ主義ニ由レハ英国ハ今尙其所見ヲ変更スルヲ好マス又
******	題:対シテハ特殊ノ態度ヲ示セリ今回日英両国政府ノ発表
	千八百九十九年ノ平和会議ニ於テ英国ハ海上法ニ関スル問
外務大臣子爵 林 董殿	<b>揭候</b>
在壞 臨時代理公使 西 源 四 郎(印)	府ノ態度ヲ示セシモノト相認候間要領訳出為御参考左ニ相
明治四十年四月七日	ムデン、ブラット」(本月六日) 論説へ右ニ関 スル 当国政
】 九 六	第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 一三八

一九七

国平和会議ニ参列ノ為メ米国代表委員及其随員任命アリタ

第三章

平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備

一三九

-----

規ニ関シ数種ノ著書アリ

一九六

一四一 一九九	第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 一四〇
ルニ同宰相ハ全然同意ノ旨ヲ宜明セラレタリ	襄ニ英国政府ハ本問題ヲ諸大国代表者ノ委員会ニ付セムト
本大臣先般独逸帝国宰相ニ面会ノ折前記考案ニ付談話シタ	止マルニ至ルヘシ
付スルコト	同ヲ得サレハ同提案ハ遂ニ一ノ高尙ナル希望ノ発表タルニ
五、右議決ヲ経タル事項ハ追テ之ヲ諸大国間ノ直接談判ニ	ノ主義トシテ賛成スル所ナレトモ之ニ関シ豫メ諸大国ノ賛
ノトスルコト	軍備制限若ハ縮少問題ニ関スル英国政府ノ提案ハ伊国政府
ノス	(訳文)伊国外務大臣ヨリ伊国代理公使ニ宛タル電訓要領
ことくレイ 田倉 アリッスレイ 奈氏アゴミノニ 日子 トローク	スル「チトニー」外相ノ電訓写手交ノ件
ニ関スル議决ハ単ニ本問題ヲ以テ諸大国ノ	二回萬国平和会議ニ軍
ノ諸問題ヲ議了シタル後最先ニ之	
三、本問題ハ露国提案中ニ記載セサルモノナルニ因リ同提	
ヲモ併セテ具体的ニ記載スルコト	
ノミナラス本問題ノ解決ヲ容易ナラシムヘキ諸般ノ細目	
二、右通知書ヲ発スルニ当リテハ本問題ノ大体ヲ陳述スル	ヲ受ケタルコトナシ
提出スルヲ得ヘキコト	貴電三三号末段ニ関シ帝国政府ノ承知セル限リ韓国ハ招待
スル皆ヲ豫メ自余諸国ニ通知スルニ於テハ之ヲ同会議ニ	第四六号
数国ニ於テ本問題ヲ	在米 青木大使 大臣
軍備制限問題ハ露国提案中ニ記載セサルモノナリト	四月十五日発
	ニ関シ回答ノ件
こ不正正天に之言、川戸、名 ごつ見長き交話に い	第二回萬国平和会議ニ韓国政府招請ノ新聞記事
テハ尹国政府ハ左記ノ頂字ニ衣リテ本問題ヲ処理セム	一四〇 明治叶年四月五日 米国駐劄青木大使宛(電報)
スル旨ヲ宣言シタルガ右英国政府発案ノ成効セサル湯合ニ	) 月amiten 林外務大臣 =
	此班列ニ加ハリタルモノト知ラル
	テ真ノ武官ナリ即チ軍事上ノ専門知識ヲ有スル委員トシテ
	又右委員中陸海軍ノ将官各一名ハ孰レモ相当官ニハ非スシ
外務大臣子爵 林 董殿	
特命全権大使子爵 青木周蔵 (印)	
在米	
即澄四十年四月十七日	sent the Govern
	er Plenipotentiary to serve as a m
	the Hague ナル文句アリ而シテ他四名 ノ委任状ニハ単ニ
右大要既ニ本月十三日往電第三三号ヲ以テ申進置候処尙御	of the United States at the Conference to be held at
United States, 1902 著者)	ber of the Commission to represent the Government
les Henry Butler (The Treaty-Making Power of the	rank of Ambassador Extraordinary to serve as a mem-
三、国際法専門委員補助トシテ米国大審院報告書記 Char-	ル委任状ニハ Commissioner Plenipotentiary with the
(Cases of International Law 著者)	右七名ノ全権委員ハ之ヲ二段ノ階級ニ分チ初三名ノ帯有セ
法科大学長現任国務省法律事務官 James Brown Scott	全米会議ニ於テハ米国政府委員長タリ
expert in International Law)トシテ前ノ Illinois 大学	トナリテ参列シ客年伯刺西爾国首府ニ開カレタル第三回
二、国際法専門委員(Legal member of Commission,	米博覧会総裁トナリ第二回全米会議ニハ米国政府ノ委員
墺米国大使館書記官クリシ Chandler Hale	曾テ亜爾然丁及巴奈馬公使タリ先年 Buffalo ニ開設ノ全
一、書記トシテ Maine 洲選出上院議員ノ男ニシテ會テ在	や、William Insco Buchanan
随員	六、海軍大学校長海軍少将 Charles Stillman Sperry
1 九八	第三章 平和会议!议题及时期、各国

首相ノ論文ヲ掲載シタルハ其発端ニ於ケル成功ト云フベキ 後大要左ノ如ク陳述セリ 試 ミ 冒頭先 ヅ 自由党機関雑誌 「国民」ガ 其初号紙上ニ英国三月三日紙上ニ於テ英国首相ノ論説ニ対シ忌憚ナク評論ヲ モ首相ノ言説ニ対シテハ論議スベキモノアリト喝破シタル there ment. ciliatory Minister for Foreign Affairs upon his eminently 之ヲ本大臣ニ報告セラルヘシ 貴官ハ内密 ン 当国外務省ノ鼓吹ヲ受クルト称セラル、「ル The 相い何ニ拠リテ以テ軍備制限ニ関スル協定ハ既ニ一八九 論者自身ノ言質ニ牴触セサルモノナキヲ如何セン先ツ首 必スヤ之ニ対シテ一驚ヲ喫スルコトナカルベシ吾人ノ見 吾人へ平素「サー、ヘンリー、カムベル、 問ス「ビューロー」公ガ吾人ハ鉄砲タルカ将タ鉄鎚タル モ亦之レヲ結ブコトヲ得ベキ皆断言スルニ至リタルヤ借 九年ニ於テ之ヲ結ブコトヲ得タルモノニシテ今日ニ於テ ル所ニテハ英国首相ノ所論中一言一句タリトモ事実又ハ 所論ニ対シ忌憚ナク是非ノ評論ヲ加フルモ氏ノ寛容ナル ノ性格ニ対シ最モ誠実ナル敬意ヲ有スルモノニシテ今其 海牙第二平和会議ニ提出セムトスル「チットーニ」閣下 ニ付同閣下ニ同情ヲ表ス同案ハ諸国ノ終ニ一致スルヲ得 出ニ係ル方案ハ最モ穏当ニシテ調和的ナル者ト思考スル 国政府ハ該案ニ対シ賛同ノ意ヲ表スヘシ」 ルニ至ルヘキ基礎ヲ形成スルモノニシテ若シ他日同案ヲ 「林子爵ハ軍備制限問題ニ関シ 「チット ・意思ヲ実行シ得ヘキ情勢ノ発生シタル場合ニ於テハ帝 四 二 is no present prospect of a general accord among 註 第二回萬国平和会議ニ軍備縮少案提出方法ニ関 ズ Imperial Government congratulate the Italian Although the Imperial Government fear that ル伊国政府ノ考案ニ対スル回答ノ件 propositions respecting limitation of arma-右ニ対スル回答ノ試案トシテ当初立案セラレ 明治罕年四月七日 ルモノ左ノ通 ニ本書ヲ林子爵ニ読聞カセ其意見ヲ徴シタル上 伊林 国外 自代理公使宛 I バンナー ۔ ب ้า 閣下 Ŋ シレハ con-マンレ 1 提 Ŗ 成ノ意見ヲ発表スル所アリ今左ニ重立テル二三新聞紙ニ就 公第三六号 キ 又「サー、 Ŋ 其所論 ノ 要領 ヲ報告ニ及ブベク候外交上 ノ 問題ニ就テ 四三 ノ件

三章 平和会議ノ議題及時期、 谷国ノ準備 

一海牙会議以来諸国民ハ此ノ利害及ヒ情慾ノ為

テ

現

-

第

第

テ固ヨリ不必要ナリト看做スモ此儀ニ与ルコトハ敢テ辞 -実ニ氏ノ希望スルカ如ク同会議ハ右ニ関スル討議ヲ為ス セザルベシ然シ世人カ軍備制限ノ一事ハ列国多数ノ反対 至ル ベク現ニ露、 独、仏、伊、墺諸国ハ右ノ討議ヲ以

何等カノ変動ヲ生シタルコトアリヤ近代ノ世界ハ皆経済 カヲ択ハサルヘカラズトノ形容ヲ下セル此地球上ニ於テ

上ノ利害及ヒ政治上ノ情慾ニ依リ支配セラル、モノニシ

海牙会議ヲ以テ其成行上和戦如何ヲ決スルニ至ル 重味ヲ有スルモノト考フルモノナケレハナリ リ然リ之レニ対シテハ疑ヲ容ル、ノ余地ナシ蓋シ何人モ 制限ニ関シ討議スル ヘンリー、カムベル、バンナー モ何等ノ危険ナキ旨ヲ宣言スル所ア マン」ハ軍備 カ如キ

現実トヲ比較シ見バ英国政府ノ責任アル首長カ如何 奪ノ慾望ヲ抱カシムルニハ不足ナルモノ)ヨリ成立スル 謹慎ナル確信ヲ抱持セルカヲ知ルニ足ラン モノトスレバ然リト答フルコトヲ得ベシ此ノ ノ富ノ程度住民ノ生計ヲ支フルニ足レルモ敵手ヲシテ略 其大演説中ニ於テ述ヘタルカ如キ幸福ナル島嶼(即チ其 ノアリヤ若シ現世界ニシテ「ワルデック、 其ノ内何レカハ回避スルコトヲ得ヘカリシト言ヒ得ルモ メ左右スル所トナレリ英杜戦争ト云ヒ日露戦争ト モロッコ事件ト云と皆其以後ニ発生セルモノニシテ今 ルーソウ」カ 如 ク理想ト 云ヒ将 三不

in principle as an eventual mode of procedure. have no objection to Monsieur Tittoni's propositions the Powers on that important subject, they would 第三章

平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備

|四||

四三

100

英国ノ軍備制限計画ニ 明治宫子年四月三十日 対スル仏国新聞論調続報 林外務大臣主 北野大使ヨリ

五月廿八日接受

外概ネ萬日一齊ニ右軍備制限説ヲ駁撃シ之レニ対シテ不賛 実トナリタルヲ以テ当国新聞紙ハ社会党臭味ノ分ヲ除クノ 討議ニ附スルノ意思ヲ有スルコト最早葢フベカラザルノ事 処去月始メ英国首相「サー、 八月十二日付公第八七号信ヲ以テ委曲具申ノ次第モ有之候 スルニ及ビ英国政府カ来ル第二回平和会議ニ於テ本問題ヲ ーマン」ガ自由党機関雑誌上ニ於テ 公然軍備制限説ヲ発表 英国ノ軍備縮少計画ニ対スル当国側 ヘンリー、カム ノ意見ニ関シテハ客年 ベル、バンナ

HOH

三日ノ 平素排独親英主義ヲ以テ知ラル、 紙上ニ於テ 「英国及ビ海牙会議」ト題シ先ツ ٦ ル シ ェ クルレ へ三月 「ル

驚ク所

ナシ仏国政府ガ独乙ト同ジク拒絶ノ態度ヲ取リ

Ŋ

亦理アリ

ŀ

云フベシ

吾人

第三章

平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備

四三

ハ英独両国新聞紙ノ論戦ヲ見テ其ノ徒労ナルヲ思ヒ

テ 楽天主義ニ耳ヲ傾ケ易ク之レカ為メ油断ヲ生スルノ虞ア モノハ特ニ仏国ニ取リテ国難タル所以ハ仏国ニテハ兎角 チ誇負者流ナリト謂ハザルベカラズ何ノ途平和論者ナル シテ世間ノ事物ハ文字通リニ行ハルヽモノト思考セバ即 害ノ衝突ヨリ発生スベキモノナルコトヲ認識シ得サル IJ シテ最近十年間ノ歴史ヲ了解セス又将来二三者ノ専意 平和論者ハ愚直者流ナルカ将タ誇負者流ナリ若シ彼等 E 限問題ヲ論議シタ テ敢テ其為ス所ニ放任セシモ同会議ニシテ果シテ軍備 分ノ損失ヲ加フヘキコトヲ モ N ル リモ一層不良トナルヘキャ断ジテ疑フ所ナシ ニハ相違ナキモ是レ以上ニハ嘱望スルコトヲ得ズ而カ ヲ以テナリ終ニ臨ミ吾人ハ飽マテ再言スペシ海牙ニ於 トセバ即チ愚直者流ナリト謂ハサルヘカラズ又彼等ニ 生シタル戦争ハ今後ハ多数者ノ経済的情慾及物質的利 之カ為メ空想ヲ誘導シテ仏国人ハ国民的気力上更ニ幾 ハ国際法ニ関スル事業ヲ為スニ止マリ是レスラ有益ナ ル暁ニハ国際関係ハ之カ為メ却テ以 前 モ э -

下ニ討議セラルヘキモノナルヤヲ知ラント欲スル 提起スルニ意アルコトヲ知ルニ及ヒ全然之レヲ拒絶スル **露国政府ハ此点ニ付キ極メテ自由寛容ノ主義ヲ採レリ同** 発スル毎ニ国際間ノ不協益々大トナルノ観アリ ル ノ挙ニ出デズ却テ其議題トナルノ暁ニハ如何ナル條件ノ 表白シ之カ為メ「マルテンス」博士ヲ西欧諸国ニ派遣 ルニ至レリ右ハ同博士カ本紙記者ニ向ヒ「吾人ハ軍備 「サー、ヘンリー、カムベル、バンナー ハ元来軍備制限問題ヲ以テ未ダ討議ノ時機ニ達セサ ト認メタルモ英米両国カ海牙会議ニ於テ本問題ヲ ル警告モ畢竟徒労ニ屬シ刻下其声 マン」カ相互 ノ希望 1

ルモノ ト被 潕 ルモノ 政府 ス ヲ ニ相愛セヨト述ヘタ

是 問題スラ之レヲ討議スルニ対シ敢テ不同意ヲ表セ セント欲スルニ外ナラス」ト言ヘルニヨリテ明ナリ露 本問題ノ討議ヲ希望スル諸国カ果シテ如  $\overline{\nu}$ 如何ナル意見ヲ有スルヤ詳ニ之レヲ知ランコト 即チ海牙会議ニ於ケル事業ノ秩序及ヒ効果ヲ確実 「何ナル サル ヲ 欲

右「ル

Ŋ

ン」社説ハ其筋ヨリノ鼓吹ヲ受ケ

Ŋ

敢テ之レニ加ハラス又海牙会議ニ対シテハ寛容ノ念ヲ以

制

政府 代 能 カ豫 日モ亦発生スヘキモノト考フルカ故ニ独乙ノ如キ陸軍国 認メ居レリ実ニ吾人ハ昨日実現シタルコトアル戦争ハ明 フベキ筋アルヲ見ズ伯林ニ於テハ巴里及聖比特堡ニ於ケ ニシテ止マラサリシモ今回ノ事件ニ付テハ 何等非難ヲ加 乙外交政略ノ公明ヲ缺クルヲ見テ恨事トシタルコト 於テ列国協定 ノ 見込 アリトハ信シ居 ラズ 従来吾人ハ独 制限問題ノ如キ現在解決スルヲ得サル N 加ハザ ト同ジク欧洲現時ノ文化ハ之レヲ譬ヘハ今猶ホ銅鉄時 ニ圞シ黄金時代ノ如キ到底之レヲ期待シ得サルモノ こ見ル所亦之レニ異ナラズシテ是レ以上ニ望 メ自己ヲ拘束スルカ如キ協定ヲ喜ハサルヲ見テ敢テ ル ベシ独逸ハ露仏墺三国ト同ジク軍備制限問題 モ ノト認メ 、地歩ヲ占 テル ムコ · 一 再 国 ł = x モ ŀ -

挙駁撃シタル後チ左ノ如ク結論セリ テ 又ハ国家聯合体ニ対シテモ何等ノ威嚇タルモノニアラズト  $\sim$ 海牙会議ハ彼ノ「マルテンス」氏カ巴里ニ於テ言ヒタ 其理由ヲ詳説セルニ対シーメ自家撞着ノ説ナルコト ルニ対シ冷評ヲ加ヘ又首相カ英国ノ海軍力ハ何レノ国家 ハ凡 議ハ戦時法規ノ制定ヲ以テ満足スベキモノニシテ是レス 得 牙会議ニ於テ為サント欲スル所ナリ ¥ カランカ其失望モ亦之ニ比例シテ益々大ナルモノアルベシ萬一世人ヲシテ此ノ如キ空想ヲ抱カシムルコト益々深 ノ基礎ヲ確立スルカ如キハ到底之レヲ期待スベカラズ若 ラ既ニ人道ニ貢献スルコト頗ル大ナルモノアリ世界平和 N 力 如ク其性質ヲ学者カ会合シテ或ル程度迄世ノ利益ヲ計ニカ会爵ハ很ノ「マルテンス」氏カ巴里ニ於テ言ヒタル 故ニ此ノ如キ誤解ナカラシムルニ足ルベキ唯一ノ方法 2ルカ如キ空想ヲ世人ニ抱カシムベカラズ要スルニ此会 モノタルニ止メシメ軍備制限ニ関スル大問題ヲ議決 テ有ノ儘ヲ明言スルニ在リテ是レ即チ吾人カ特ニ · ヲ 列 2

陳述スル所アリ 三号ヲ以テ其要領貴聞ニ達シ置タルニヨリ疾ニ御了承ノ義 察時節柄御参考ニモ相成ランカト思考シ三月四日往電第二 ル平和論者」ナル題目ノ下ニ更ニ仏国カ英国ノ軍備制限説 同意ヲ表スルコト能ハサル事由ヲ説明シテ大要左ノ 存候尚ホ「ル、タン」ハ三月十五日ノ紙上ニ於テ「愚ナ 如

於テ之レ

ヲ討議スルモ果シテ如何ナル効果アルベキャ

トナルノ見込ナキヲ看破シ居 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備

v

ル今日ニ

一四三

ニョリ国際協約

第三章

コ英国首相ガ英国ハ先ヅ自国ノ海軍力ヲ制限

シタリト言

ŀ

-

ル

 $\nu$ 

露国政府カ海牙会議原案中ヨリ軍備制限問題ヲ除外シ タル以来物議囂々トシテ続出シ該理想信仰者ノ一人タ ノ智巧ハ日ト共ニ益々明白トナレリ本問題ノ提起セラ Ŋ 1

外務大臣子爵 林 董殿

二〇五

在仏 特命全権大使 栗野 慎一郎(印)

明治四十年四月廿日

明旁及具報候 敬具石英国ノ軍備制限提議ニ関スル当国新開論調一班往電ノ説

国目 者ノ所説ニ帰服スルニ先チ独英両国ノ地位ト英国首相及 外ニ偽平和論者ヲ生スルニ至ルベシ故ニ我輿論ハ平和論 橫行 着スベキヤ疑ヲ容レザルナリ ルヲ要ス果シテ然ラバ仏国ニ取リ緊要適実ナル結果ニ 独乙新聞論調トヲ比較対照シテ以テ周到ナル考察ヲ遂ク 的ヲ達スルノ手段トセラル、ノ虞アリテ真平和主義者ノ シ当国ニ於テハ其唱導ハ容易ク成功ヲ告ケテ主ニ他ノ目 ノ甚シキモノナリ我カ共和政治ノ性質ニ照ラシ将又言論 疑ヲ容レサルモ之ニ対シ余リ空想ヲ抱クカ如キハ不謹慎 仏国ニ関シテハ固ヨリ英国提議ニ参同ヲ辞セ y ノ状態ニ鑑ムルトキハ平和主義ノ唱導ハ他ノ何 モ仏国ニ取リ最モ危険ナリト謂ハサルベカラス蓋 サ ルヘキ v 到 1 7

コトヲ許サヽル旨ノ表明ヲ為シ居レリ異ロ同音ニ独逸ハ其海軍拡張ニ対シ何等ノ制限ヲ加フル

「サー、 泥スルモノト 如キハ断シテ之ヲ許サ、ル旨ノ意ヲ明ニシ又独乙ハ「ビ 独逸政府ハ機会アル毎ニ其聯隊及艦船ノ数ヲ制限スルカ ラル、ニ至ル日蓋シ遠キニ在リト云ハサルベカラス従来 国ニテハ全ク無視セラル、ニヨリ是等ノ国々ニモ適用セ モ亦大ニ其然ルヲ認ムルモ如何セン此一大勢力モ大陸某 今日ニ於テハ最早一大勢力トナルニ至レリト云ヘリ吾人 ハ其後一八九八年ニ於テハ夢想タモ及ハサル 際争議ヲ仲裁其他ノ平和的手段ニヨリテ解決スルノ観念 ス又氏ハ世人カ平和ヲ希望スルノ念慮大ニ鞏固ヲ加 スルコトヲ得サルカト発問セルモ惜ムラクハ未タ本問 アラバ直ニ他国ニ対シ一撃ヲ 加ヘントス 殊ニ 「ビュー 化 スマーク」及「ウイルヘルム」第二世ノ為メ漸々普国風ニ 討議ヨリシテ如何ナル危険発生スルニ至ル IJ μ カ将タ鉄鎚タラサルベカラストノ言ヲ開キタル今日ニ当 他ノ欧州大陸諸国ハ独乙ト同盟関係ニ在 ー」公ノ口ヨリシテ此地球上ニ於テハ吾人ハ鉄砲タル セラレテ侵略的国民トナリ常ニ其武備ヲ整へ機会ダニ ヘンリー」ハ海牙会議 ·認メラ ñ ハ何故軍備制限問題ヲ討 n ヘキカヲ知 程度ニ達シ ト否トヲ 、国 問 ラ 題

第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 一四三

モアラズ苟モ海牙会議ニ関スル問題起ル毎ニ独乙新聞ハ独乙ニテハ固ヨリ英国首相ノ論文ニ対シ賛成ヲ表スベクヲ熟知シ居レリ

 $\nu$ 「サー、 限説れ正ニ英国自由党政府カ海牙会議ニ於テ取ラント Ŋ 海軍力ヲシテ現状維持ノ状態ニ在ラシムルノ益アル ノ暁ニハ自国ニ取リテハ軍事費減少ノ利アルト共ニ他国 国民ハ何ノ途其海軍力ノ優勢ナルヲ確信シ軍備制限 固ヨリ保守党ノ激烈ナル反対ヲ招キタルモ世人ノ豫想シ シタル自由党政綱ニ従ヒタルモノナリ此政略ニ対シテハ ル態度ヲ宣言セルモノニシテ右ハ全ク総撰挙ノ際ニ表明 ルカ如ク英国公衆ヲ激昻セシムルニ至ラザリキ蓋シ英 ヘンリー、 カムベル、バンナーマン」ノ軍備制 低実行 Ξ ス ŀ

ナル題目ノ下ニ大要左ノ如キ比較的温和ナル論評ヲ加へ居ル、デ、デバー」モ亦三月三日ノ紙上「英国ト軍備制限」平素論議ノ着実穏健ヲ以テ知ラル、中立新聞「ジュールナ知ルベキノミ

所 タル成功ヲ賞讃スルト共ニ海牙会議ガ此論文ニヨリテ得ル ション」ト改題シタル初刊ニ於テ英国首相ノ論文ヲ掲載シ タン」ト同ジク 自由党機関雑誌 「スピーカー」 カ 「ネー モノヲ数学的ニ説明シタル後チ大要左ノ如キ評論ヲ下セリ こく結果鮮少ナルベシト揶揄シ首相ノ所謂軍備費削減ナル 場合ニ干戈ニ訴ヘントシタルコトアル某国ノ決心ニ対シ 運動ノ為メ熱心ニ尽力シタル誠意ハ何人モ之レヲ疑フ所 数ノ同感者ヲ得ルノ望ナシ蓋シ将来貴国カ久シク平和的 現今ノ状態ニテハ首相ノ議論モ遺憾ナガラ大陸ニ於テ多 国ハ欧洲大陸諸国トハ大ニ其事情ヲ異ニス 影響ヲ及ボシタルコトアルハ人ノ知ル所ナリ然レトモ英 海軍力ノ点ニ於テ大ニ優勢ナルガ故ニ一二ノ軍艦建造ヲ ナク又此運動ハ既ニ多少ノ効果ヲ奏シ現ニ或ル重要ナル ル 軍費削減ノ如 ニ帰着スルモ其実際ヲ云ヘバ直チニ減少ト称スルヲ得ベ クニ及ハズ要スルニ英国首相ノ議論ハ結局軍備制限問題 一両年見合スガ如キハ殆ント歯牙ニ掛クルニ足ラス又陸 、モ国防力ハ却テ増スモノトスレハ是レ亦左マテ重ヲ措 先例ハ是等諸国ニ取リテ適切ナラサルモノアリ英国 キモ其実陸軍大臣ノ言ニヨレバ費用ヲ減ズ ルヲ以テ英国 5

二〇四

第三章

平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備

一四三

キャ寧ロ疑

ハシク英国政府ハ

心ナラスモ言句ノ末節ニ拘

a C	of which the main points are as follows:
<u> </u>	npire made a speach on Geri
prac	n Office Chancello
fact	he course of debate at the Reichstag A
suco	No. 44.
no k	Tokio.
to s	Hayashi,
just	Received 11.10 a.m., 2/5/07.
	20 20 20
so	朝岳 ノ伯 (一)(二)
exai	「「「相ノ軍備
at t	一四七 明治罕年至月1日 林外務大臣宛(電報)
beer Stat	
iere	
the	Komura.
inco	
prac	of Austria and Germany
Hag	bog hoop (2) with from a miner to the
A	ment, they have not
proi	林外務大臣 在填 西代 理 公 使
that	四月二十七日 前 四、二〇 本省着
Seci	伊国政府軍備縮少案撤回
No.	ト目にらて行きないてした。材外羽大臣ダ(電索)
	一四五明治罕年四月二六日使ヨリ、東国の夏夏、東京の大学の東京の東京の東京の東京の東京の東京の東京の東京の東京の東京の東京の東京の東京の
Hav	~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~
	Komura.
	Appeal; Sir Einest Satow, Lord Keay, formerly Go- vernor Bomhay. President British Academy : Sir Henry
	Sir Edward Fry, formerly Lord Justice
	h Plenipotentiaries to the Hague Conferer
	Tokio.
「八 生	Kec'd b.50 a.m., 24/4/0/. Hayashi,
込ナ	
協ノ	第二回萬国平和 <b>会議</b> 参列英国委員氏名報告ノ件
今回	
第二	一四四 明合早年3月14日の英国駐劄小村大使ヨリ

一四五 一四六

ニロオ

第二三号

_ 四四

第三章

平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備

其後変更スル所ナシ ノ方法ヲ案出シ独墺露政府ニ内協議ヲ試ミシモ成功ノ見 回英伊両帝会合前ニ於テ伊国政府ハ 兵力制限案ニ関シ妥 ナキガ故後遂ニ之ヲ撤回セリ右ニ関スル当国政府ノ態度

四六 折衷提議ヲ英国政府ニ通報済ノ旨並ニ伊国政府 英国政府提案軍備制限問題ニ対スル伊国政府ノ 明治罕年四月三大日 林外務大臣宛(電報)英国駐劄小村大使ヨリ

London,.....

ノ抗議撤回ノ旨報告ノ件

ayashi, Tokio. R'd. Tokio, April 28th 1907. 1.25 a.m.

o. 39. opose to at although British Gov't have reserved right to cretary of State for Foreign Affairs of the purport your telegram No. I have informed April 26th the Principal the Conference the question of limitation 29. and he has informed me

ates actical realization does not exist Chancellor had no litical situation of the different States would be ference in the geographical, economical, military and en formulated and England. Spain and the United rence. e question of limitation of armaments at the Contside this programme Powers have been engaged actical results, Chancellor referred to the fact that After alluding to Russian programme for the Second Conference; on the contrary there is danger pes that anything would come out of discussion at ctory solution of this question and possibility of its ccessful in finding such means. stifiable and suitable to remove these differences and amine the question. cision arrived at was that Powers should carefully considering whether it was not expedient to discuss gue Peace Conference as one being likely to secure serve as a basis for an agreement Chancellor had the Conference. knowledge whether other Governments were more but had found no means which in view of great have reserved right to bring up this question Such a programme has however not yet At the First Conference the only German Government had done So long as satisthat

ニロセ

第三章

平和会議ノ議題及時期、

各国ノ準備

一四七

二〇九

註 別紙省略

外務大臣子爵 在独特命全権大使 林 董殿 井上勝之助(印)

明治四十年五月二日

敬具 場一般ノ喝采ヲ博シ当国諸新聞紙モ其所説ヲ是認シ欧洲他 度ノ理由ヲ説明シ且本件ニシテ他日該会議ニ提出セラレタ 去ル四月三十日独逸帝国議会ニ於テ本年度外務省豫算討議 公第三八号 御参考該演説 筆記原文 別紙 ヲ以 テ及御送付候 此段申進候 列国ニ対シテモ好感動ヲ与ヘタル状況ニ有之候ニ付テハ為 N 和会議ニ於ケル軍備縮少問題ニ対スル独逸ノ不賛成ナル態 処右演説中同公ガ目下世上ノ一問題タル「ハーゲ」第二回平 ノ際帝国大宰相「ビューロー」公ガ外交上ノ関係ニ付為シ タル演説ノ要旨ハ翌五月一日不取敢電報ヲ以テ達貴聞置候 トキハ独逸ハ其議事ニ賛同セサル旨ノ意志等ヲ発表ッ議 六月十二日接受

ノ件 大宰相「ビュロー」公独逸帝国議会ニ於テ演説

一四八 明治罕年至月二日 林外務大臣宛

between Italy and England were not only compatible

as an international courtesy and friendly relations

safe partner of the allied. Meeting was quite natural meeting between the King of England and the King national interests and to her special situation. Should however anything practical ensue from a disany that Italy was only to be considered now as of Italy saying that news papers had lately reported cellor then made some remark in regard to recent correspond to preservation of her peace, to her own then she would carefully examine whether it would cussion of the question of limitation of armament would be but impracticable if be frank in saying that she could not take part in her for maintaining this instrument Germany would both technically and morally and nobody can blame has preserved itself as a good instrument of peace strength nor will she do so in future. Her armament that of Germany; she had never misused her military believe that other Powers take a similar attitude as warlike or other selfish motives. He had reason to that Germany was the disturber of peace from some attitude in this special question it would be alleged questioned if it was to be feared that by the reserved discussion which according to her conviction not objectionable. an un-Chan-

understanding were loyal to her friends and allies need not be anxious if lor was well aware of the difficulties and danger be concluded between Russia and England. Chanceltion, concerning Tibet or Afghanistan which may attitude was the same in regard to boundary ques-Anglo-Russian negotiation in regard to Persia and her aim in Morocco but the right of equal opportunity. into by the act of Algeciras, Germany had no other confidence in loyal observance of obligations entered followed events in Morocco with attention and has which did not immediately concern her. of the nation are necessary and Germany keeping them self-consciousness and confidence in the power which surround Germany and in order to overcome Germany viewed with perfect calmness conclusion of with triple alliance but was discontinuous Germany to be concluded about things

Inouye.

第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備

一四八

二 0 八

ensue in an undesired direction. by touching on such contrasting interests effect might 第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 一四七

To be continued.

Inouye

(] ]

Received 8.30 p.m., 2/5/07. Berlin, 9.15 p.m., 1/5/07.

Hayashi, Tokio.

No. 44. (Continuation)

right of seizure at sea at the Conference and Germany in taking part in The Hague Conference could also so doing and limited herself in letting those Powers, tion for the Russian programme she refrained from of armament should not be touched, but in considerahave made it condition that the question of limitation would depend upon non-introduction of the question of they declared that their participation in the Conference Government did 1874 at the Brussels Conference when cuss the question among themselves. Chancellor then who had hopes of a success from the discussion, dis-German Government could have done as the British

	第三章 平和会談ノ談題及時期、各国ノ準備 一五一
Kecelved 3.40 a.	お 国家 員 広 ノ 通 リ 伯 命 有 之 修
11.30	在丁都コーペンヘーゲン帝国名誉領事ヨリノ報告ニョレバ
件	公信第二七号 六月十二日接受
領	回平和会議丁抹国委員任
第二回萬国平和会議ニ丁抹委員ヨリ中立国ノ権	第二回萬国平和会議丁抹国委員任命通知ノ件
五二 明治学年至月4日 藤国駐箚佐藤公使ヨリ	一五一 明治毕年当月3日 林外務大臣宛 ? ?
•••••	••••••
外務大臣子爵 林 董殿	外務大臣子爵 林 董殿
在蘭 特命全権公使 佐 藤 愛 麿(印)	在蘭 特命全権公使 佐 藤 愛 麿(印)
明治四十年五月五日	明治四十年五月五日
右及報告候 敬具	右及報告候 敬具
外務書記官ヴィデル (A. Vedel)	海軍大尉シュリー (H. G. Surie)
第三委員	海軍省出仕
海軍少将シエラル(Scheller)	陸軍中佐ファン、オールト(H. I. van Oordt)
第二委員	参謀本部出仕、陸軍大学教授
特命全権公使ブラン(C. Brun)	三、専門委員
亜米利加合衆国駐劄	A. van Karnebeek)
第一委員	法学博士ヨンクヘアー、ファン、カルナベイク(H.
20 - La Art all-plant ("L	
道民省皆己了	公言书二六号
J. M. van Eysinga)	第二回平和会議和蘭国委員任命ノ件
法学博士ヨンクヘアー、ファン、アイシンガ(W.	<b>一五〇</b> 明治四年五月五日 林外務大臣宛
外務省政務局長	
二、「デレゲザヂョアン」(Délégués adjoints)	*****
法学博士ルッフ (J. A. Loeff)	外發大臣子爵林董殿
前司法大臣第二議院議員	: 臨時(
ヨンクヘアー、ロエル(J. A. Röel)	
前海軍大臣休職海軍中将	明治四十年五月三日
C. den Beer Poortugael)	右及報告候 敬具
ヨンクヘアー、デン、ベアー、ポルチュガル(J. C.	去月三十日同国へ向ケ当地ヲ出発致候
参事院議官前陸軍大臣休職陸軍中将	催セラルヘキ第二回平和会議ニ参列ノ暹国委員ヲ命セラレ
法学博士アツセル (T. M. C. Asser)	ト」(Luang Puwanat)ノ両氏ハ今度蘭国海牙府ニ於テ開
国務大臣兼参事院議官	(Mom Chatidej Udom)及大尉「ルアング、プーワナッ
法学博士ド、ボーフォルト (W. H. de Beaufort)	当国陸軍参謀部長陸軍少将「モム、チャティデヂ、ウドム」
前外務大臣第二議院議員	公信第三十号 五月廿一日接受
一、全権委員	海牙平和会議ニ参列ノ暹国委員任命出発ノ件
委員左ノ通リ任命有之候	即沿西西月三日
本月二日付勅命ヲ以テ第二回平和会議ニ参列スベキ和蘭国	日れ、明治日4月2月1日、ヨリ
1月0 1110	第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 一四九

11 1 11	第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 一五五
	リモ発議アルヘキ筈ナレバ先頃「カルタヘナ」ニ於テ英国 💧
	シタキ旨ヲ発議シ置クリ而シテ此ノ問題タルヤ英国政府ヨ
*****	討議決定シ得サル時ハ常設委員会ヲ設ケテ之カ研究ヲ附託
:	軍備制限問題ニ付テハ今回ノ平和会議ニ於テ其主義原則ヲ
外務大臣子爵林董殿	第一
在西 特命全権公使 稻垣満治郎(印)	得ハ至幸ナル旨申候処同大臣徐ニ語テ曰ク
明治四十年六月十六日	去ル六月十四日外務大臣ト会見ノ際尙詳細ニ之ヲ聞ク事ヲ
右申進候 敬具	当時市来代理公使ヨリ上申相成居候
ヲ発送スルニ至リタル次第ナリ云々	府ヨリ発議セリトノ事ハ去三月五日付電信第参号ヲ以テ其
リ露国政府ニ発議シ其結果トシテ南米諸洲ニ参会ノ招待状	西班牙政府ノ意見トシテ三案ヲ議題ニ付セラレ度旨当国政
今回ノ平和会議ニ南米諸政府ヨリ委員参列ノ件ハ我政府ヨ	機第六号 八月五日接受
第三	「付外務大臣ト談話ノ件
タラサルベシ	第二回海牙平和会議ニ於ケル西班牙政府ノ態度
キタレバ更メテ平	一五五 明治罕年六月六日 林外務大臣宛
アリヤ否ヤヲ研究シタ	- F
債権使行ニ関シ武力ヲ用フル件ニ付テハ或ル主義ヲ定メ之	
第二	
スヘキ事ヲ打合置ケリ	外務大臣子爵 林 董殿
テ軍備制限問題ヲ議題ニ附スル事ヲ得サレバ之ガ研究ヲナ	在西 特命全権公使 稻垣满治郎(印)
外務次官 Harding 氏ト会見ノ際若シ今回ノ平和会議ニ於	明治四十年六月六日
<b>第</b> 可及從通幹優一礎具	プ帯陸ノ地位=右リ位ラ平利会諱ニ 与プ帯陸ノ 諱声 レノ魚 ニ
7	7. 国家 三日 白衣裳 三日 川長 / 窓豆 / マ
以上乍樫延御参考迄申進候尚専務委員ノ義ニ付テハ確知次ヨニヨニニー	ルニ足ルノ兵力ヲ有スルモノニ非ルヲ実
	ハ国ノ地勢ヨリ毎軍ハ二分サレ陸軍ハ
一、衆議議員 Don Gabriel Maura y Gamaso	本日平和会議ニ列席スベキ米国全権委員「ポーター」氏ト
Calva	第五九号
一、和蘭国駐劄特命全権公使 Don Jose de la Rica y	林外務大臣 栗野大使
但シ第一回平和会議ニ参列セシ人	五月九日 前九、五五 本省着
Urrutia y Villa-Urrutia	
一、英国駐劄全権大使 Don Wenceslao Ramires de Willa-	軍備制限問題ニ関スル米国委員ノ意見ノ件
有之候	一五三 明治學年至月八日 林外務大臣宛(電報)
平和会議参列当国委員へ三月廿六日付ヲ以テ左ノ通リ任命	
公第四〇号 と月十二日接受	******
海牙平和会議参列西班牙国委員任命ノ件	Sato.
一五四 明治罕年六月六日 林外務大臣宛	I leave for Copenhagen May 7.
	tions of neutrale.
*****	ucted to propose question of rights and oh
· .	No. 21. Honourary Consul in Copenhagen reports that Danish Delegate to Peace Conference has been
主張者ニハ 非ズト言ヘリ	Tokio.
2ニ賛成スベキモ新聞ガ囂々タル如々	
	第三章 平和会議ノ議題及時期、各国ノ準備 一五三